

鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書

(鎌倉国宝館収蔵庫建設に伴う緊急調査)

鶴岡八幡宮境内発掘調査団編
鎌倉市教育委員会発行

鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書

鶴岡八幡宮境内発掘調査団編
鎌倉市教育委員会発行

序 文

鎌倉市教育委員会
教育長 尾崎 實

大正12年に突如南関東地方に襲来した関東大震災は、鎌倉にも甚大な被害を与え多くの人命や財産が失われました。同時に鶴岡八幡宮、建長寺、円覚寺など殆どの社寺が倒壊し、仏像や絵画等の文化財が著しく破壊されたのです。この事態を憂慮した鎌倉同人会を始めとする数多くの市民の方々の積極的な運動によって、文化財収蔵・修理施設建設の気運が急速に高まり、ついに昭和3年4月3日、鎌倉国宝館が開館されました。「人口2万の町が文化財の重要性を知っていて、それをまもるべき宝庫を作りあげたのである。日本国が文化財保護法を作り、全国府県市町村が競って博物館を建設する機運になるまでに20数年先立ってのことである。当時の町民の見識を高く評価したい。」「鎌倉国宝館四十年略史」故洪江二郎元館長序文から引用)というように、国宝館建設事業は鎌倉市が誇るべき先人の偉業であります。

開館以来50有余年、国宝館は鎌倉の文化財保存事業の要としてその役割を如何なく発揮してきました。しかし、展示場を除く各建物の老朽化が進み、将来にわたって館本来の機能を保持するためにはさらに施設を拡充することが必要となってきました。そこで教育委員会では新しい収蔵庫の建設を計画し準備をすすめてまいりましたが、土地所有者の鶴岡八幡宮を始め文化庁、神奈川県教育委員会及び神奈川県都市部等関係諸機関のご協力をいただき昭和58年度竣工が決定されたのです。

建設予定地は国指定史跡鶴岡八幡宮境内にあり、重要な埋蔵文化財の存在が推定されるところです。このため教育委員会では青山学院大学教授吉田章一郎氏にお願いして発掘調査を実施することとしました。調査の結果、5枚に及ぶ境内整地面が見つかり八幡宮造営史を具体的に調べることができ、さらに平安時代の水田跡や墓地の発見など、古代の鎌倉についても知られざる貴重な事実を得て、大きな成果をあげることができたのです。

現在、新たな収蔵庫も完成し国宝館も一層その機能が充実しました。教育委員会は開館当時の先人の偉業を継承発展させると共に、有形文化財のみならず埋蔵文化財など広く文化財全般の保護事業に力を注ぐ所存であります。本報告書が広汎に活用されることを祈念し、調査に携わった多くの方々のご労苦に改めて御礼申し上げます。

例 言

- 1 本書は鎌倉国宝館収蔵庫建設計画に伴う事前発掘調査の報告書である。
- 2 調査は鎌倉市から委託を受けた吉田章一郎氏（青山学院大学教授）を団長とする調査団によって、昭和57年6月28日から同年10月14日に亘る期間で実施された。
- 3 現地調査及び資料整理作業に際しては、鎌倉国宝館前館長貫達人氏ならびに三浦勝男館長の特段の御配慮により鎌倉国宝館職員諸氏の全面的な協力をいただいた。記して深謝を表する。
- 4 調査関係者氏名は本頁下段に記載した。
- 5 本書の執筆分担は各項目の末尾に記し文責を明示した。
- 6 本書に使用した写真は遺構関係は山田武二、遺物関係は木村美代治の撮影による。
- 7 調査及び資料整理作業の進行管理は、吉田章一郎団長の指導の下に教育委員会学芸員松尾宣方が担当し同学芸員玉林美男、永井正憲が補佐した。
また調査に際して表土掘削、土留等の土木工事は日興商事株式会社が担当した。
- 8 本書の作成にあたっては、鶴岡八幡宮境内（武徳殿建設予定地）発掘調査団々長大三輪龍彦氏ならびに同主任調査員斎木秀雄氏の御助言をいただいた。また出土人骨の鑑定を聖マリアンナ医科大学教授森本岩太郎氏に依頼し、本書に寄稿いただいた。

記して謝意を表する。

調査関係者

（鎌倉国宝館職員）

広海富治 山田泰弘 岩橋春樹 中村義光 高橋 保 沢内保男 川上克彦 山田武二

（調査員）

石渡直子（旧姓工藤）

（協力者）

安田ヒデ 青木タカ 徳永シズ 成田初枝 錦織トク 吉田文一 吉田茂夫 吉田 茂 曾原
糸子 高倉尚子 柳瀬素子 萩原真理 島田百合子

（整理作業調査員）

原 広志 木村美代治 福田 誠 杉山春信 千葉 滋 菊川英政

（整理作業調査補助員）

若林泰子 瀬田哲夫 土方明司

目 次

本 文 目 次

第1章 調査に至る経過	2
I 第1次試掘調査	2
II 第2次試掘調査	3
III 本調査	3
第2章 検出された遺構	5
I I面上遺構	5
II II面上遺構	7
III III面上遺構	7
IV IV面上遺構	10
V V面上遺構	12
VI 中世以前の遺構	13
第3章 出土遺物	19
I 舶載陶磁器および国産陶磁器	19
II 土器および土製品	25
III 瓦 類	35
IV 金属製品	77
V 骨製品	82
VI 石製品	82
VII 木製品	84
VIII 漆製品	94
IX 中世以前の土器	97
第4章 総 括	101
寄稿文 鎌倉国宝館内遺跡出土人骨について	
森本岩太郎	105

挿 図 目 次

Fig. 1 遺跡周辺部地図……………(1)	Fig. 28 女瓦, 男瓦の部分名称……………(49)
Fig. 2 発掘区位置図……………(4)	Fig. 29 側面, 端面の処理法模式図……………(49)
Fig. 3 I面上遺構……………(折込①)	Fig. 30 女瓦 (1)……………(51)
Fig. 4 II面上遺構……………(8)	Fig. 31 女瓦 (2)……………(53)
Fig. 5 III面上遺構……………(折込②)	Fig. 32 女瓦 (3)……………(55)
Fig. 6 1建物跡……………(9)	Fig. 33 女瓦 (4)……………(58)
Fig. 7 2建物跡……………(9)	Fig. 34 女瓦 (5) 文字・記号瓦 鬼瓦 他……………(61)
Fig. 8 方形聚穴状遺構……………(11)	Fig. 35 女瓦II・III類叩き目模式図……………(62)
Fig. 9 IV面上遺構……………(折込③)	Fig. 36 男瓦 (1)……………(63)
Fig. 10 V面上遺構……………(折込④)	Fig. 37 男瓦 (2)……………(66)
Fig. 11 モッコ状製品……………(12)	Fig. 38 男瓦 (3)……………(68)
Fig. 12 中世以前の遺構……………(14)	Fig. 39 銅製品 鉄製品……………(78)
Fig. 13 埋葬人骨出土状況……………(15)	Fig. 40 鉄拓影……………(79)
Fig. 14 モッコ状製品……………(17)	Fig. 41 鉄釘……………(81)
Fig. 15 水田跡……………(18)	Fig. 42 骨製品(并)石製品(硯・砥石)……………(83)
Fig. 16 発掘区土層断面図……………(折込⑤)	Fig. 43 木製品 (1) 板草履……………(85)
Fig. 17 青磁 白磁 青白磁……………(19)	Fig. 44 木製品 (2) 板草履 下駄……………(86)
Fig. 18 古伊万里 瀬戸……………(22)	Fig. 45 木製品 (3) 船形 その他……………(88)
Fig. 19 垢器 山茶器 火鉢他……………(24)	Fig. 46 木製品 (4) 五輪塔……………(90)
Fig. 20 かわらけ (1)……………(27)	Fig. 47 木製品 (5) 五輪塔……………(折込⑥)
Fig. 21 かわらけ (2)……………(29)	Fig. 48 木製品 (6) 碑伝……………(91)
Fig. 22 かわらけ (3)……………(33)	Fig. 49 木製品 (7) 特殊 その他……………(92)
Fig. 23 土製品……………(35)	Fig. 50 木製品 (8) 平板状……………(93)
Fig. 24 鎧瓦 (1)……………(38)	Fig. 51 櫛 漆器皿・椀……………(95)
Fig. 25 鎧瓦 (2)……………(40)	Fig. 52 中世以前の土器 (1)……………(98)
Fig. 26 字瓦 (1)……………(43)	Fig. 53 中世以前の土器 (2)……………(99)
Fig. 27 字瓦 (2)……………(46)	

表 目 次

表1 軒先瓦出土層位別点数表……………(48)	表4 男瓦の層位別出土比率表……………(76)
表2 女瓦, 男瓦出土層位別点数表……………(70)	表5 女瓦の遺構別出土比率表……………(76)
表3 女瓦の層位別出土比率表……………(76)	表6 鉄出土一覧表……………(80)

図 版 目 次

- | | |
|---|---|
| <p>PL. 1 「相模国鎌倉名所及び江之嶋全図」明治29年(1896)刊(部分・鎌倉市中央図書館蔵)</p> | <p>出土状況
PL. 19 1. 中世以前の遺構 2. 自然水路
表出状況</p> |
| <p>PL. 2 1. 発掘区の全景(調査前) 2. 調査開始状況</p> | <p>PL. 20 1. 水路上堆積土層 2. 有基植物堆積状況</p> |
| <p>PL. 3 1. I面上遺構全景 2. I面上各区画遺構</p> | <p>PL. 21 1. 墓壇周辺柱穴群 2. 1号人骨
上半身表出状況</p> |
| <p>PL. 4 1. 第4区画西縁辺部 2. 第3区画</p> | <p>PL. 22 1. 1号人骨 2. 2号人骨</p> |
| <p>PL. 5 1. 第3区画 2. 区画内巴文鍔瓦
出土状況</p> | <p>PL. 23 1. 台葬状況 2. 墓壇上堆積土層</p> |
| <p>PL. 6 1. II面上遺構全景 2. II面上区
画遺構</p> | <p>PL. 24 1. 木製品等出土状況 2. 木製品
等出土状況</p> |
| <p>PL. 7 1. II面上区画遺構 2. 三叉戟出
土状況(II面上)</p> | <p>PL. 25 木製塔婆類出土状況(上・下)</p> |
| <p>PL. 8 1. 指銭出土状況(II面上) 2.
板草履出土状況(II面上) 3. 板
草履出土状況</p> | <p>PL. 26 1. 束状植物出土状況 2. 束状植
物切断部</p> |
| <p>PL. 9 1. III面上遺構全景 2. 1建物跡</p> | <p>PL. 27 1. モッコ状製品出土状況 2. 縄
状製品出土状況</p> |
| <p>PL. 10 1. 2建物跡 2. 柱痕残存状況</p> | <p>PL. 28 木根表出状況(上・下)</p> |
| <p>PL. 11 1. 柱痕礎板残存状況 2. 柱痕残
存状況</p> | <p>PL. 29 水田跡全景</p> |
| <p>PL. 12 1. 方形竅穴状遺構(上層) 2.
方形竅穴状遺構(下層)</p> | <p>PL. 30 1. 水田跡 2. 土手切断部</p> |
| <p>PL. 13 1. 方形竅穴状遺構(底面) 2.
単弁蓮花文鍔瓦出土状況</p> | <p>PL. 31 土手切断部(上・下)</p> |
| <p>PL. 14 1. 平ノミ出土状況 2. 槍ガンナ
出土状況 3. 釘隠出土状況</p> | <p>PL. 32 1. 木製品出土状況 2. 須恵器要
出土状況</p> |
| <p>PL. 15 1. IV面上遺構全景 2. 柱穴列</p> | <p>PL. 33 青磁 白磁 青白磁</p> |
| <p>PL. 16 1. 瓦溜り(瓦堆積状況) 2. 瓦
溜り(掘り上げ後)</p> | <p>PL. 34 襦袢壺 瀬戸</p> |
| <p>PL. 17 1. V面上遺構全景 2. 溝状遺構</p> | <p>PL. 35 常滑</p> |
| <p>PL. 18 1. V面上遺構 2. モッコ状製品</p> | <p>PL. 36 常滑 火舎</p> |
| | <p>PL. 37 かわらけ</p> |
| | <p>PL. 38 かわらけ</p> |
| | <p>PL. 39 かわらけ</p> |
| | <p>PL. 40 かわらけ</p> |
| | <p>PL. 41 1. 壺体もしくはトリベの破片 2.
土鏝 3. 瓦質鼎の脚部 4. かわ
らけ片円板 5. 刻み目のあるかわ</p> |

- らけ 6. 不明土製品
- PL. 42 鎗瓦 蓮花文系 巴文系
- PL. 43 鎗瓦 巴文系
- PL. 44 字瓦 唐草文系 半載花文
- PL. 45 字瓦 刺頭文系
- PL. 46 女瓦 I類A
- PL. 47 女瓦 I類B～D
- PL. 48 女瓦 II類A～D
- PL. 49 女瓦 II類E～G, III類, IV類A
- PL. 50 女瓦 (IV類B), 文字・記号瓦, 面戸瓦, 鬼瓦
- PL. 51 男瓦 I類A・B
- PL. 52 男瓦 I類C～F, II類, I類A・II類群
- PL. 53 1. 銅製品 2. 鉄製品
- PL. 54 1. 木製船形 2. 骨製筭 3. 石製品
- PL. 55 木製品
- PL. 56 木製品
- PL. 57 木製品
- PL. 58 木製品
- PL. 59 木製品
- PL. 60 木製品
- PL. 61 木製品
- PL. 62 木製品
- PL. 63 漆製品
- PL. 64 漆製品、櫛
- PL. 65 中世以前の土器
- PL. 66 第1号人骨の頭蓋片と歯
- PL. 67 第1号人骨の上・下肢骨片
- PL. 68 第2号人骨の頭蓋片と歯
- PL. 69 第2号人骨の上・下肢骨片
- PL. 70 骨 種子

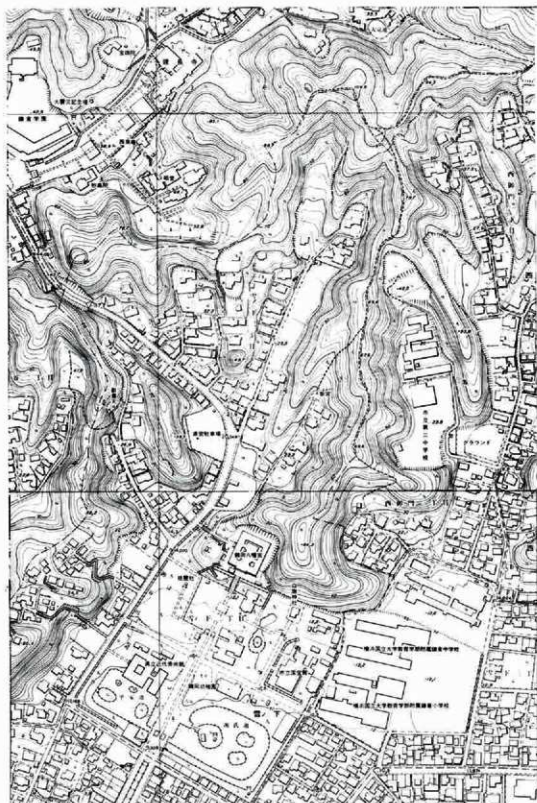


Fig 1 遺跡周辺部地図

第一章 調査に至る経過

鎌倉国宝館は関東大震災で甚大な被害を受けた市内の各種文化財の修理とその後の保護を目的として、昭和3年4月に設立された。その後、現在に至るまで鎌倉市の文化財収蔵展示の中心施設として大いに機能を発揮して来たが、寄託出陳の需用が高まる中でより以上の施設の拡充が求められ、故渋江二郎元館長を始めとする多くの関係者の急願とするところであった。そして具体的には本市の総合計画の中に国宝館収蔵庫建築事業として位置づけられ、更に昭和57～58年度に掛けての建設が実施計画に定められたのである。建設予定地は国宝館敷地内の旧事務所等跡地部分の約450㎡。

ここに至るについては当該地が国指定史跡鶴岡八幡宮境内に属し、文化財保護法第80条の現状変更行為に相当するために派生する様々な課題の処理が必要であった。とりわけ予定地内の埋蔵文化財については、参集殿、武徳殿等の八幡宮諸社殿の建設工事に伴う緊急発掘調査結果に進み、事前発掘調査の実施は不可避と判断された。そしてその調査方法等についての具体的指針を得るために、2次に亘る試掘調査が実施された。試掘内容については別稿に委ねるが、調査の結果3～4面に亘る中世遺構面が確認され本調査への準備が開始されたのである。昭和57年3月に事務所等の既存建物が解体され諸準備を経た後、同年6月28日から本調査が始められた。

なお、当該地は前述のとおり国指定史跡の範囲内に含まれるため収蔵庫建築工事の最終決定は調査の結果を待って判断されることと定められたのは言うまでもない。

I 第1次試掘調査

2次に亘る試掘調査は何れも鎌倉市から委託を受けた、鶴見大学助教大三轮龍彦氏を団長とする調査団によって実施された。調査団員は八幡宮境内での発掘調査経験者によって構成されたが、これは試掘調査のより効率的な運用を図って為された措置である。

第1次調査は昭和56年7月16日から31日までの16日間に亘って行われた。設定したテストピットは3ヶ所である。各テストピット共に表土層、土丹（破碎泥岩）層、灰青色粘質土層と続き、次に土丹版築地形面が2枚堆積するのが確認された。試掘であるため、各版築面を可能な限り残す方法を執ったことにより第2版築面から下層については十分に確認し得なかったが、部分的な掘り下げ及びボーリング探査等により更に2枚の版築面の所在が推定された。なお、第2テストピットからは、第1土丹版築面上に幅30cm、長さ50cm、厚さ20cm程の凝灰岩切石列が略々南北方向に走行する状態で検出された。同切石列の東側は土丹版築面となり、西側はやや落ち込みかわらけ皿が密集して出土した。

Ⅱ 第2次試掘調査

2次試掘は昭和56年9月16日から30日までの期間内で行われた。調査対象区域は1次試掘時の第2テストピット内に検出された凝灰岩切石列の性格を究明するために、同テストピット南側に設定された。これは石列遺構が地輻石等の建築遺構に関わるものか否かを確認する必要性に基くものである。だが結果的には石列の継続部分は発見されず土丹を用いた版築面が検出されたのに止った。従って収蔵庫建設計画を左右するに至る結果は試掘調査によって見出せず、直ちに本調査への準備が開始されたのである。

試掘調査参加者

- 大三輪龍彦（団長・鶴見大学助教授）
- 斎木秀雄（調査担当者・鎌倉考古学研究所々員）
- 宮田 真（鎌倉考古学研究所々員）
- 杉山春信（同上）
- 秋篠周太郎（横浜国立大学々生）
- 工藤荘八（同上）

Ⅲ 本調査

本調査は青山学院大学文学部教授吉田章一郎氏を団長とする調査団によって、昭和57年6月28日から収蔵庫建設予定面積を若干上回る約470㎡の範囲を対象に実施された。2次に亘る試掘調査の結果に鑑みて青灰石粘質土層下に検出された土丹版築地形面を第Ⅰ面とし、以下各面単位に調査が進められた。なお、Ⅰ～Ⅴ面全体写真中の北西隅付近に走行する溝は現代の排水溝である。また発掘区内で使用したグリット軸は、八幡宮参集殿、武徳殿建設に伴う発掘調査に於ける軸線を準用した。南北軸は舞殿前の参道方向線を基軸とし、磁北に対して $20^{\circ}32'20''$ の差位を測る。

（松尾宣方）

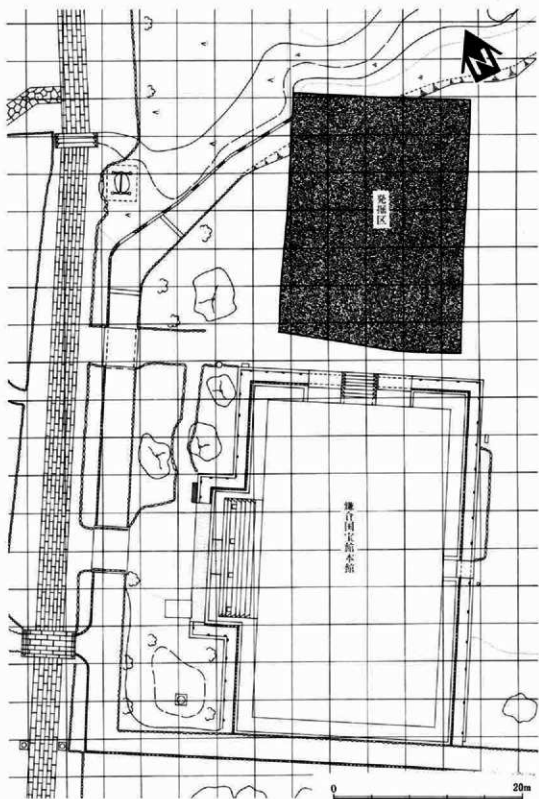


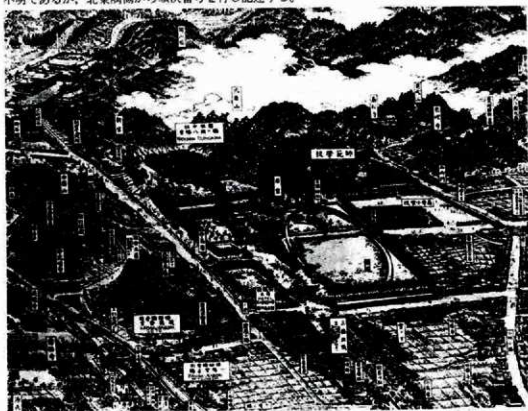
Fig 2 发掘区位置图

第二章 検出された遺構

I I面上遺構

表土攪乱層及び青灰色粘質土層を重機を用いて除去し、地表下110cmで土丹版築地形面（I面）を表出させる。I面上にみられる青灰色粘質土層は発掘区内に略々一定の厚さ（約 10cm）で堆積するが、長期間に亘って水分の影響を受けたかの如く土層中に含まれる土丹も青灰色に変色している。明治19年8月に印刷発行された「相模国鎌倉名所及江之嶋全国」をみると、現国宝館付近を含めた境内東側一帯が周りに馬場を廻らす大きな池として表現されている。或いは青灰色を呈すに至る水分の影響はこの池に因るものかも知れない。

I面については試掘結果から粘性土中に土丹を混入させて地形した境内整地面と目されていたが、実際の表出状況は大量の土丹を敷き詰めた堅固な版築面によって構成されるものであることが判明した。版築面は凝灰岩切石、安山岩等も用いながら数ヶ所の区画に分れる。図示した区画図は土丹等の石材配列状況から推定したものである。各区画の多くは発掘区外に範囲が及ぶため全容は不明であるが、北東隅側から順次番号を付し記述する。



PL 1 「相模国鎌倉名所及江之嶋全国」明治29年(1896)刊
(部分・鎌倉市中央図書館蔵)

第1区画

検出範囲で南北辺約7m、東西辺約4・5mを計る。区画西側縁辺から西方向に1.5m程の間隔で土丹の含有の少ない軟質版築面を挟んで、凝灰岩石列が南北に併走する。石列は試掘の段階で検出され建築遺構に関わる施設と一時考えられたものであった。結果的には今次調査により区画に併行し、かつ石列西側が約25cmの段差をもって下りその以西には土丹版築面等の具体的遺構は皆無である、などの点から同石列は第1区画に伴う西側の土留施設と推定されるに至ったものである。第1区画を構成する土丹版築面は堅牢かつ平坦化されていた。

第2区画

検出範囲で南北辺約3m、東西辺約4mを計る。南側縁辺部には大型の土丹を配し、区画内の版築密度は極めて堅牢である。北側縁辺は第1区画と殆ど接しているが、版築の度合は本区画の方がはるかに堅固である。或いは第1区画は第2区画の北方拡張部とも考えられる。

第3区画

検出範囲で南北約3m、東西約4mを計る。北縁辺部西側には北方に面を揃えて、安山岩河原石、凝灰岩切石を用いた石列が約2m程東西に走行する。区画南西隅では幅0.8m長さ2.5mに亘って土丹敷面から西方に突出している。区画内面は土丹版築密度がまばらで、均等な版築状態とはいえない。だが、地形版築そのものは固く良く締り堅固な状況を呈する。

第4区画

拡張がなされたと思われる区画である。当初区画と推定される範囲は溝状の間隙を挟んで南北に分れる。北側区画は1辺3.4mの正方形を呈し、西側縁辺部には大型土丹を南北に配石する。版築状況は極めて堅牢であった。南側区画は1辺約3m四方の正方形で、全体に大型土丹が配される。北側同様に堅牢な版築状況を呈する。この南北2区画はI面上で検出された土丹版築面の中でも、最も堅牢かつ平坦化された区画と評される。なお、両区画共に西側縁辺部は同一線上に沿って構築されていた。

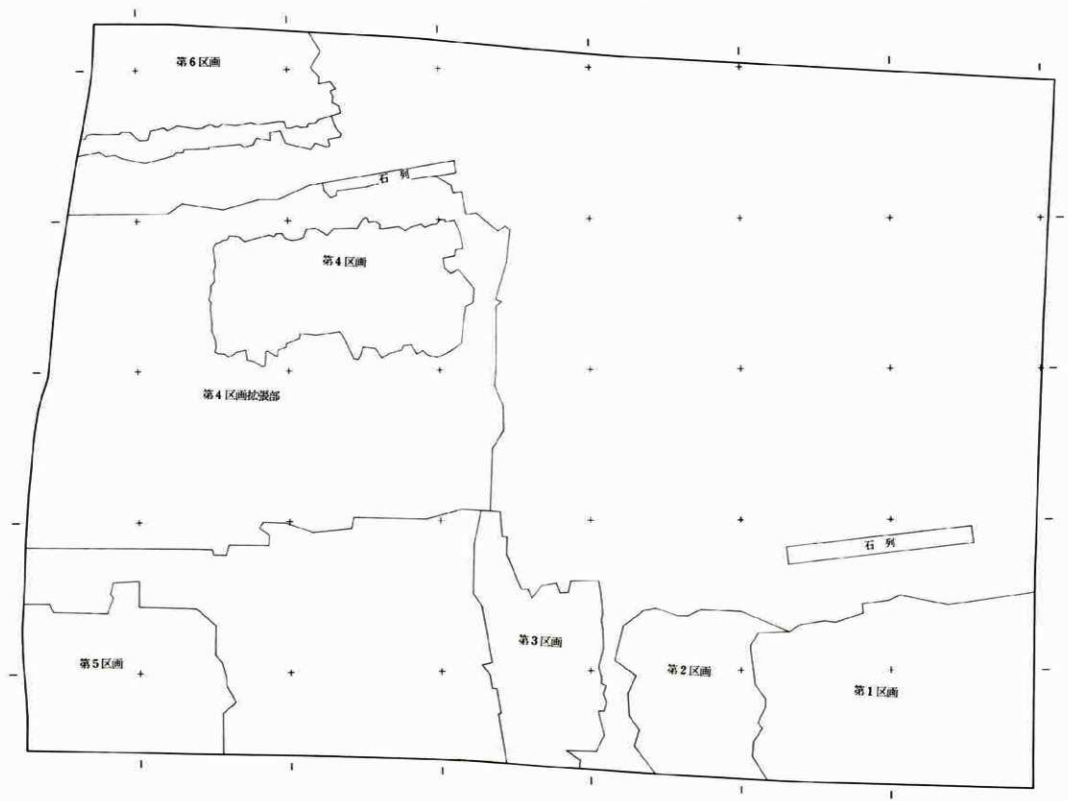
拡張部と思われる土丹版築面は、当初区画をとり囲むようにして構築されていた。検出範囲は南北10.5～12m、東西9mに及ぶ。西側縁辺の一部には凝灰岩切石を据えた石列が配置され、西方の第6区画との間に幅約1.5mの軟質土面を挟む。東側縁辺部は西側に比して明度とはいえないが、南東隅付近に於ては土丹、凝灰岩切石を列状に据えている。拡張区画部南側上面は全体に小型の土丹を用いて版築地形されており、他の区画面とは様相を異にするのが注目された。

第5区画

発掘区南東隅付近にあり、検出範囲は南北5m、東西4mを計る。第4区画との間に幅約2mの軟質土層面を挟み、また西縁辺側に僅かな突出部が認められる。区画内の版築状態はやや粗雑である。

第6区画

発掘区南西側にあり、検出範囲は南北約6.5m、東西約3.0mを計る。版築状態は堅牢で平坦化さ



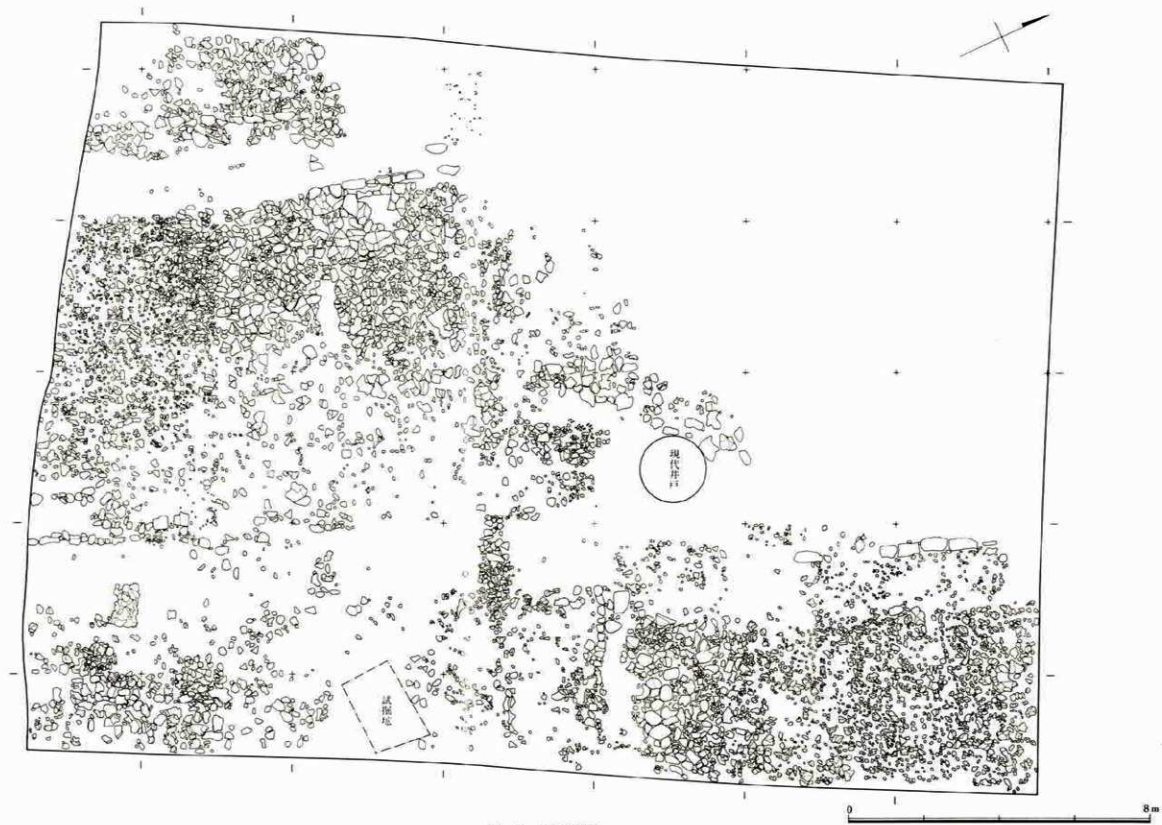


Fig 3 I 面上遺構

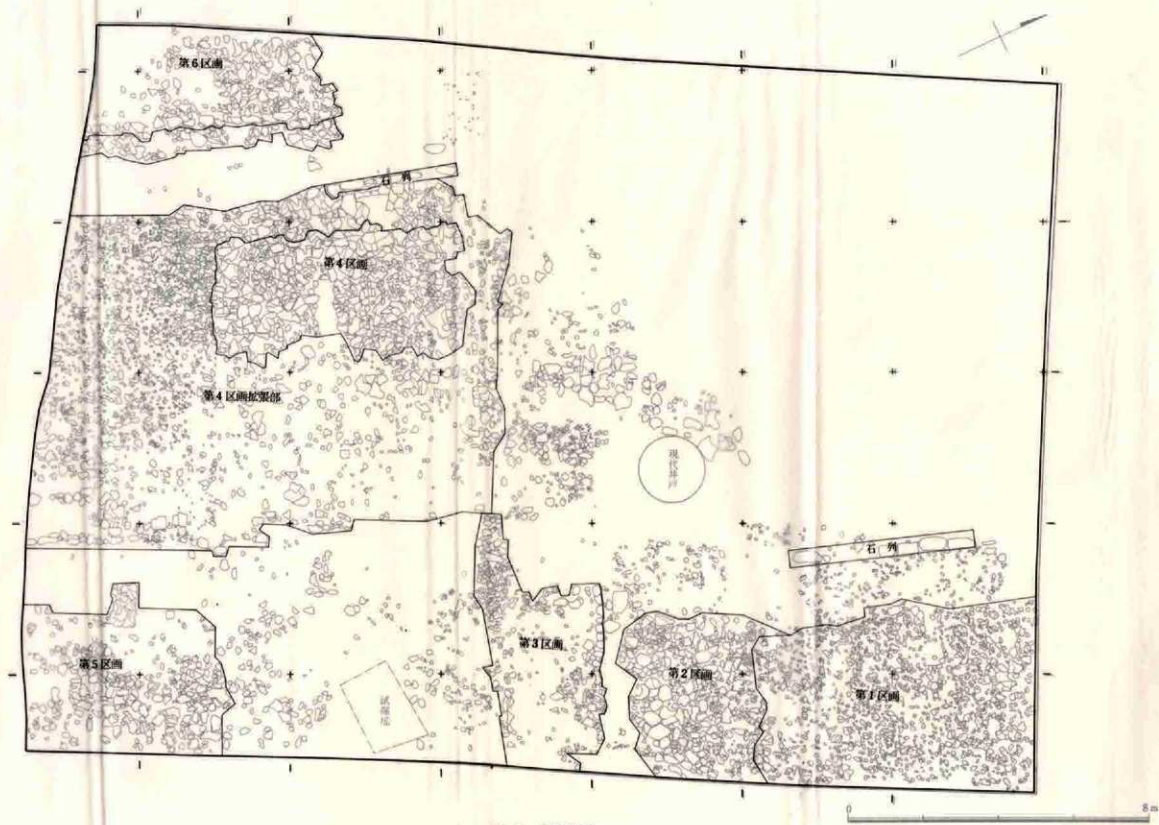


Fig 3 I 面上遺構

れている。東縁辺部土丹列に東方へ拡張されたと推察される兆候が認められる。

I面上で検出された以上の土丹版築遺構については、その特異性から「版築面」との一般的呼称に代えて「土丹敷遺構」と称し、後章で考察を加えたい。なお各土丹敷遺構を構成する石材と共に多くの瓦類が混入して出土した。特に第4区画拡張区域縁辺部に使用石材と並んで出土する例が多く、或いは補強目的をもって設置された可能性も考えられる。出土瓦の中には鎌倉前半期の所産と目されるものも多い。

II II面上遺構

I面下約15～20cmに暗褐色土軟質版築面が広がるが、同面上から二区画の土丹敷遺構が検出された。中央部に位置する区画はI面上第4区画内当初区画の略々真下に相当し、南北約5.0m、東西約1.7mの長方形状を呈す。土丹敷の状態は極めて堅牢かつ平坦で区画縁辺線も明瞭である。残る一区画の土丹敷遺構は、I面上第6区画下に相当する個所に検出された。その範囲は発掘区外にも及ぶため全容は不明であるが、検出範囲は南北2.5mを計る。土丹敷の状態も堅牢、平坦であった。

II面上に検出された土丹敷遺構は区画数こそI面上に比し少量であるが、版築状態は極めて良好といえる。また中央部の区画とI面上第4区画内当初区画とを比較した場合、間隙部を除き版築手法等の要素に共通性が多分に認められる。更にI～II面間の堆積土の薄いことや出土遺物を比較しても両面間の著しい時間差は考えられず、II面上の土丹敷遺構からI面上当初土丹敷、そして拡張部の土丹敷と続く一連の承譜が想定される。II面上に検出された土丹敷は遺跡内に於ける土丹敷遺構のいわばオリジナルと言えよう。II面上に於ては土丹敷以外には特段触れるべき具体的遺構は検出し得なかった。出土遺物で特に注目されたのは、南西隅の土丹敷遺構内で出土した数種の鍍金青銅製品が挙げられる。これは三叉戟と呼ばれる天部像の持物の一つで、出土例としては珍重である。

III III面上遺構

III面は暗褐色土層中に、土丹及び貝混りの海砂を混在させて地形版築を施した状態で表出された。上面は全体として北西から南東に掛けて緩やかに傾斜し、約50～80cmの落差を計る。この傾斜斜傾向は下層のIV、V面も同様であった。III面上から各種の遺構が検出され次に詳述するが、建築遺構については1、2建物跡と呼称する。

1 建物跡

発掘区西側に検出された礎石を有する建物跡である。高さ約30cmの基壇上に安山岩河原石を用いた礎石を据える。礎石は基壇南東隅とその北側に2石検出された。礎石間の芯々距離は1.7mを計る。礎石上の柱座痕は明瞭ではない。基壇東側縁辺部には安山岩玉石を主とした石列が3段に互って、縁辺部を覆うかの如き状態で走行していた。各石列上の比高は各々10cm程である。ただし最東部の石列は、石材の多くが除去されているため完全走行していたか否かは不明である。南側縁辺部については、東縁辺最東部石列の南東隅石を起点として、東西に石列が走行する。1建物跡は発掘

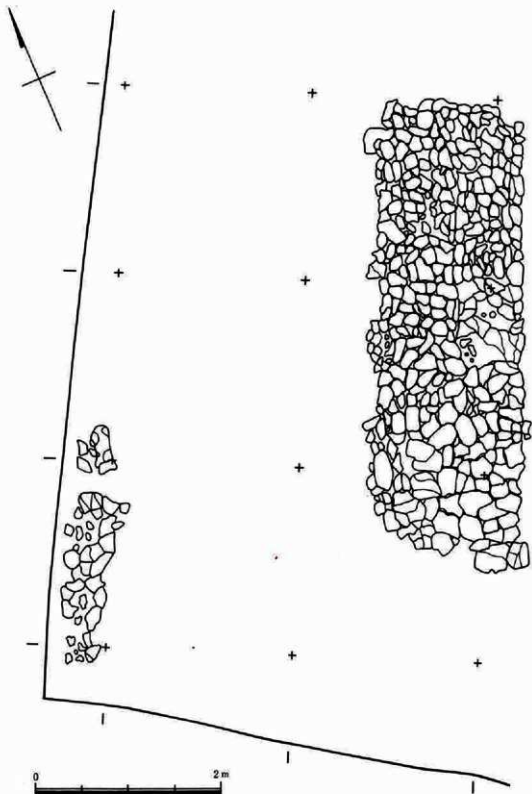


Fig 4 I面上遺構

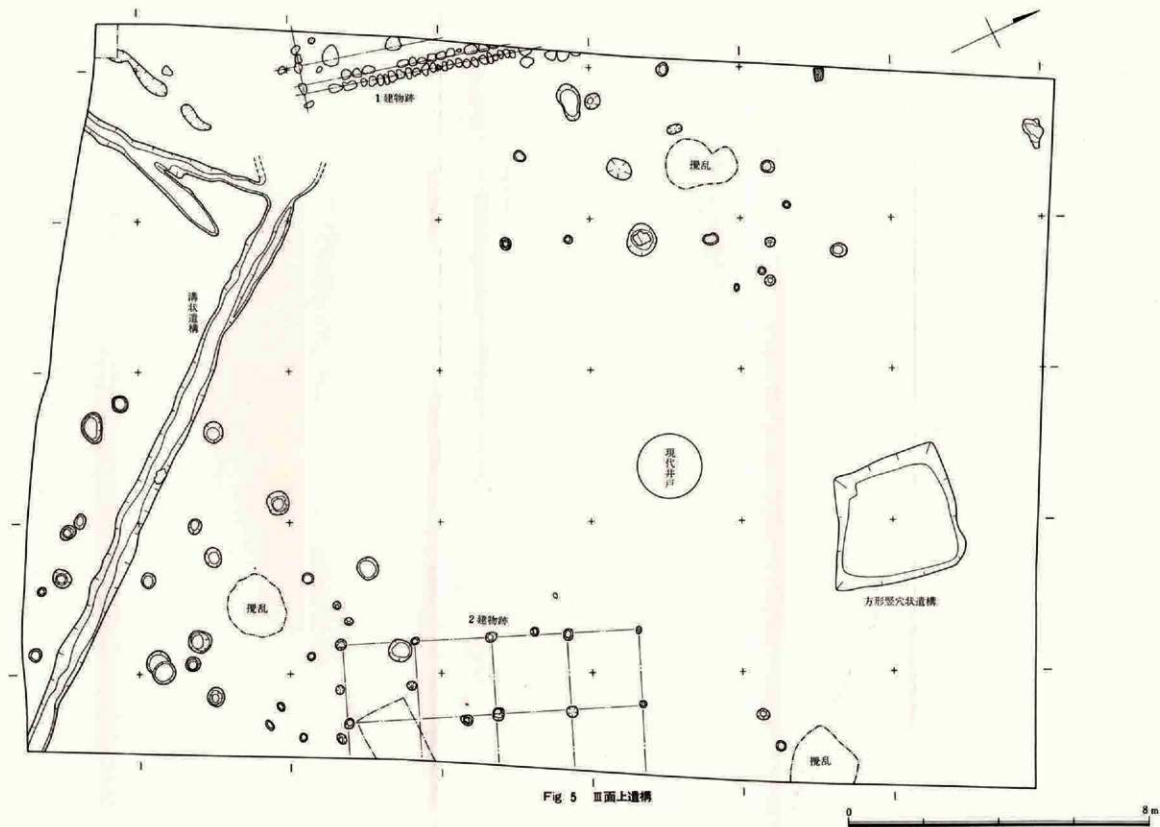


Fig 5 直面上遺構

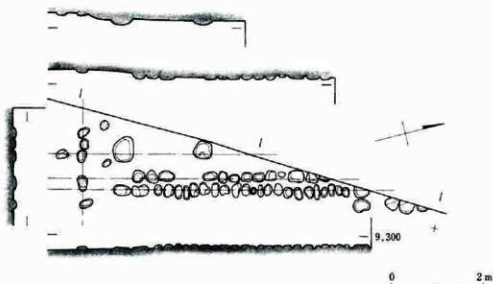


Fig 6 1建物跡

区西隅に発見されたためその全容は不明なままで止まらざるを得なかったが、本調査に於ける建築遺構例としては最も具体的な様相を示す資料であった。

2 建物跡

発掘区西側に検出された掘立柱による建築遺構である。東側及び南東側の目面上からは様々なサイズのピットが検出されたが、これらのピット群の中で平均径20cm、深さ5~10cmを計る小ピットグループが注目された。小ピット群の内、土丹を底面に据えた例が5穴、礎板及び柱痕の残存する例が4穴ある。この中で芯々間距離2mをもって構成される小ピット群を選定し、南北四間、東西二間以上の建物跡を推察し得た。建物跡の柱間上に位置する小ピットについては、建替等による明確な重複兆候が認められず、補助材用に供された柱穴と考えたい。また、建物跡は発掘区外東方に延びると考えられるが、約8m東側の八幡宮武徳殿建設予定地内発掘調査区にまでは至っていない。

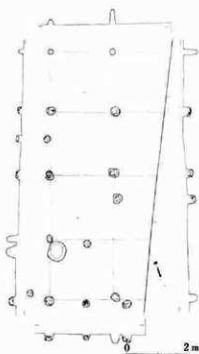


Fig 7 2建物跡

その他のピット群

1 建物東側から発掘区南東隅に掛けて溝状遺構が斜に走行するが、この東側部分で溝を挟んで10数穴のピット群が検出された。各ピットの配列状況には定型的な規則性が見出せず、建物跡を推定

し得るには至らなかった。図示したラインは今後の検討課題としてのみ提起したい。なお溝北側のピットの内3穴に自然木の根が遺存していた。1建物北東側にも数箇所のピットが検出されたが、何れも規則性は認められず、建物跡を確定し得ない。

方形竪穴状遺構

発掘区北側7E点を中心とした箇所に、3.5m四方の範囲で方形竪穴状遺構が検出された。竪穴遺構の一部は試掘箇所に相当したため既に掘り下げられていたが、これは第1次試掘調査で凝灰岩切石列（Ⅰ面上土丹敷遺構第1区画に伴う石列）の西側に大量のかわらけが出土したと報告された所である。竪穴内の覆土は粘性黒色土で、上層中からはかわらけが、下層中からは板草履等の木製品を中心とする諸遺物がさながら順を追って投棄されたかの如き状態で出土した。上層の状態はいわゆる「かわらけ溜り」の様相を示すが、同種の遺構の発見例は市内でも例を増している。永福寺跡、釈迦堂遺跡などでは建物跡直下に該当する箇所での検出例があり、また若宮大路周辺やその他の市街地内遺跡では土壌内や溝中からの発見例が得られている。本調査で検出された「かわらけ・板草履溜り」はⅢ面上の平坦版築面上に方形竪穴を穿ち形成されたもので、周辺には竪穴に伴う遺構の存した兆候は認められない。またかわらけ、板草履共に規則性を持った堆積状況を呈してはならず、遺構に積極的な意義づけをするには十分な資料になり得なかった。方形竪穴状遺構が何らかの目的、例えば祭祠的用途のために構築されたとは検出状況に鑑みても到底断じ得ず、むしろ不用品を投棄した「ゴミ穴」的なものを想起する方が妥当性があると思われる。

その他

発掘区北西隅に安山岩自然石の平石が面上に据えられた状態で検出された。関連する施設が存したとしても、発掘区外に及ぶと思われる。

Ⅳ Ⅳ面上遺構

土丹及び貝混りの海砂を用いた版築地形面で、Ⅲ面下30-40cmで検出される。上面はⅢ面同様、北西から南東に掛けて50-60cmの落差で緩傾斜する。面上に検出された遺構は次の2例であった。

発掘区西側、Ⅲ面上1建物跡の直下に該当する箇所で柱穴様のピット列が検出された。検出された範囲内では具体的遺構を推定し得なかったが、ピットの規格は柱穴とするに耐え得るものであり1建物跡の前身施設が想定される。なお記述は前後するが、Ⅲ面上1建物跡については礎石等の規模から推してこれを重要視し、Ⅴ面上調査時まで遺構部分をⅢ面レベルで保存しておいた。この間に取壊庫建設工事による影響の有無等を検討し最終的には種々の問題点を総合した上で、文化庁との協議の結果記録保存措置に止めたものである。従ってⅣ面全景写真には柱穴様ピット列は含まれていない。

次にⅣ面上の具体的遺構として、発掘区北西部に大量の瓦が集積された箇所が検出された。発掘区外に範囲が及ぶため内容は不明であるが、円形の土壌内に集積されたものと思われる。出土瓦中には鎌倉初期に属する種類も多く、別稿に詳述するように八幡宮造営に関わる瓦資料の研究上貴重

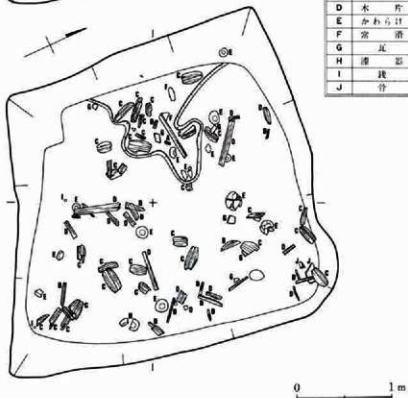


Fig 8 方形竪穴状遺構

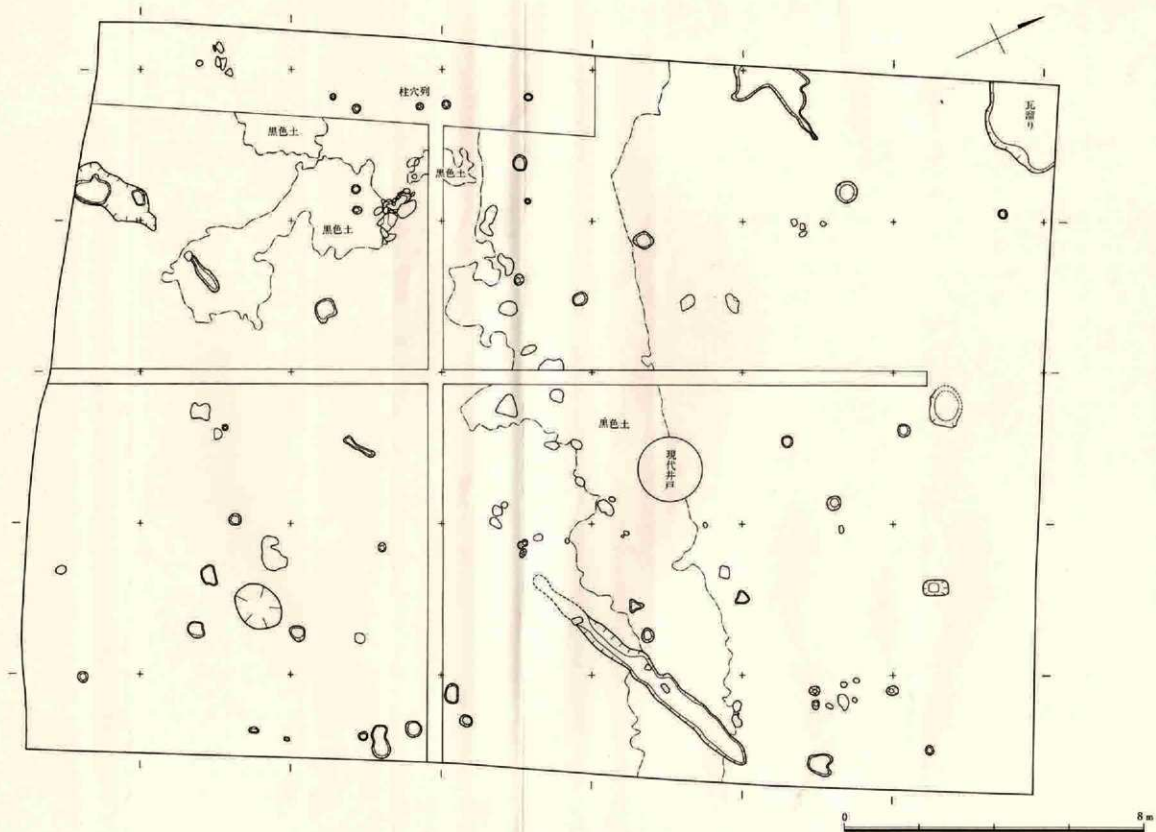


Fig 9 IV面上遺構

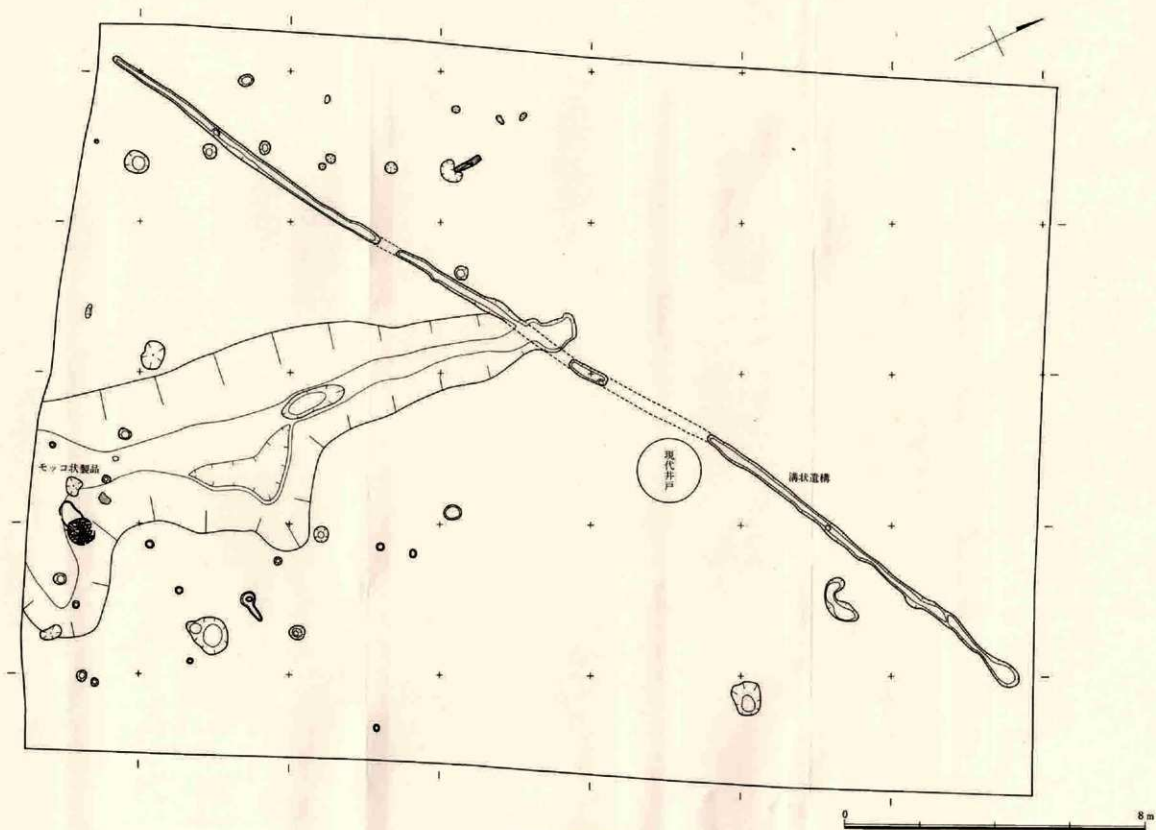


Fig 10 V面上遺構

な資料が得られた。

この他、発掘区東側に浅い溝やいくつかのピットが検出されたが、何れも配列に規則性がなく中には木根の遺せるものも見受けられた。従ってⅡ面の中央部は、Ⅲ面同様中央部に起伏がなく平坦版築面の様相を呈する。

V V面上遺構

八幡宮創建当時の版築面と目される。黒褐色粘質土面上に、土丹、或いは海砂等を用いて地形版築が施されている。版築の程度は決して堅牢とはいえず、層の厚さは平均2-3cmに過ぎない。発掘区南東隅及び西側に数穴のピットが認められたが、建物跡の所在を示す配列状態とは言い難い。面上に於ける具体的な遺構例としては、発掘区北東隅から南西隅に掛けて走行する溝状の落ち込みが挙げられる。溝は幅約 cm、深さ cm程の規模で側壁は脆弱な部分が多く、長期間存続したものは認められない。

V面上は前述のとおり、版築の度合も薄く堆積状態も発掘区北側の傾斜上面に接近すればする程、脆弱さを増して行く。版築下の黒褐色粘質土層もこれと同様に北側では堆積が薄く、20cm程掘り下げると下層の青灰色砂礫層に到達するが発掘区南側ではかなり厚いことが窺われた。同層中の遺物包含状態もまばらで、中世遺物と土師器等の古代遺物が混在して出土する。以上の現象と、武徳殿発掘調査区域との層位比較などを併せて検討した結果、黒褐色粘質土層は中世基盤層と判断される。従ってⅡ面については鶴岡八幡宮境内のこの区域に於て、最初に手掛けられた人為的な地形作業に

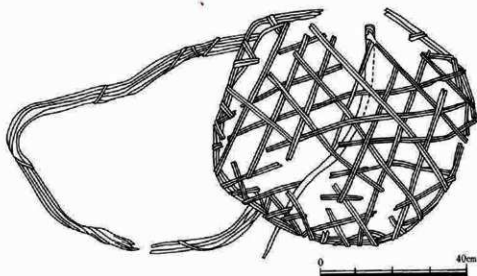


Fig 11 モッコ状製品

よる版築面と推察されるに至った。やや恣意的ではあるが、このことを象徴するかの如き特異な遺物が発掘区南東隅辺りの、黒褐色土傾斜面上に堆積した版築層の脆弱部分から出土した。遺物は竹製のモッコ状製品で桑木と思われる木根に掛けられた状態で検出されたものである。出土地点周辺は中世基盤層の黒褐色粘質土層上面が南に向けて急激に傾斜し、その上面に土丹泥りの黒色土が雑然とした状態で堆積する様相を呈する。起伏に富んだ荒地での最初の地形作業が難澁を極めてであろうことが偲ばれる。

VI 中世以前の遺構

発掘区北側に於てV面下に堆積する黒褐色粘質土層及びその下位の黒色土層を除去すると青灰色砂礫層に相当する。同層はその後の調査の結果、発掘区北端から南端に掛けて急激に傾斜しその落差は約1.8mを計る。従って砂礫層上に堆積する黒褐色土層なども南に下る程堆積が厚くなる。砂礫層上の遺構を確認するために発掘区北半部の表出作業を開始した。

砂礫層上面は平坦状況を呈さず溝状の落ち込みが随所にみられ複雑な様相であった。まず発掘区北東隅辺りから一条の溝状落ち込みが略々南北に走行し、これに東側から流れ込むような形で三～四条の同じく溝状落ち込みが合流する。各溝中からは土師式土器、弥生式土器の破片が覆土に混在して出土する。井戸掘乱部西側で南北4m、東西1.5mの範囲に亘り多量の有茎植物の堆積箇所が検出された。堆積状況は恰も水流の濃み部に溜ったかの如き様相であった。同じような植物質遺物の堆積箇所は南半部に近づくにつれ、つまり黒褐色粘質土層などの堆積が厚くなる程目立って増加してくる。砂礫層上に検出された溝状落ち込みについては、傾斜面上を自然直下した兆候が認められ人為的所業の結果とは考えられない。有茎植物等の大量堆積現象などから、葎などの草木が生い茂る湿地帯に形成された自然水路と推定したい。

さて南北に走行する水路の西側は、砂礫層が一段高くなり上面に黒色土等が堆積する平場となる。同平場南側は約50cmの落差をもって落ち込みが、この平場上面と落ち込み部から極めて重要な資料が得られた。

平場東縁辺部に南北2m、東西1m、高さ20cm程の灰ブロックの高まりがあり、同ブロック中から白磁片(PI.33-8)とかわらけ様土器(Fig.20-2-3, PI.37-2-3)が出土した。灰ブロック北西側の平場上面に7穴のピットが検出されたが、配列状態は明瞭ではない。しかし各ピットは平均径30cm、深さ15-20cmを計り、規格式や掘り方から柱穴と判断し得る。簡弁な建物の所在が推察される。このピット群に囲まれるような形で、西側の発掘区西壁際に土壇状の落ち込みが検出された。土壇を精査した結果、2体の埋葬人骨が発見されたのである。

人骨を擁する土壇、即ち墓壇の掘り込み面は、V面構成層下に堆積する黒褐色粘質土層及び黒色土層の下層、暗黒褐色粘性砂質土層上面と観察された(Fig.13参照)。墓壇は検出範囲で南北約1.9m、深さ20cmの長円形状を呈する。人骨は合葬状態で2体発見され、何れも頭頂を北方向におき、面部を西に向ける。東西に並ぶ人骨を東側から1、2号と呼称する。2体共に両肘両膝を軽く折り曲げ

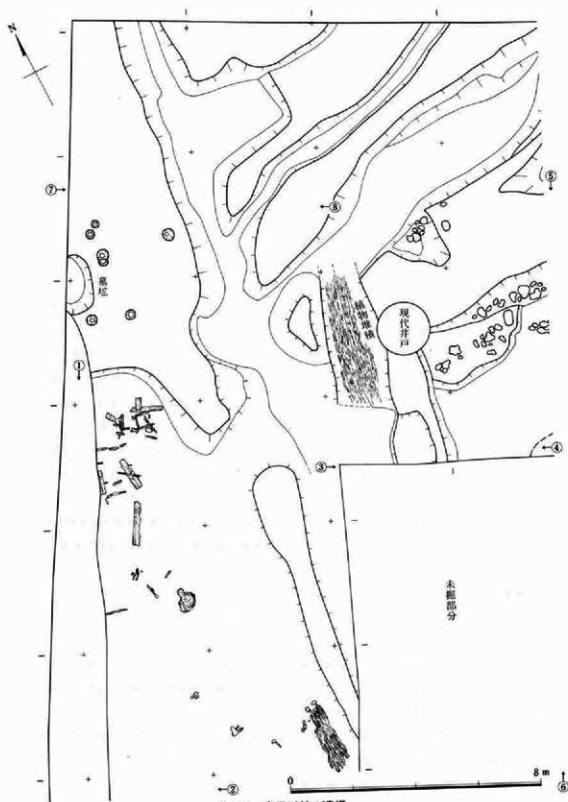


Fig 12 中世以前の遺構

墓西壁地層断面図

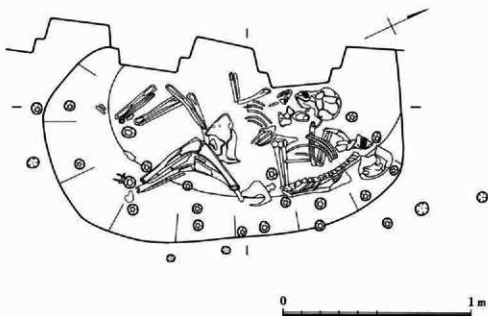
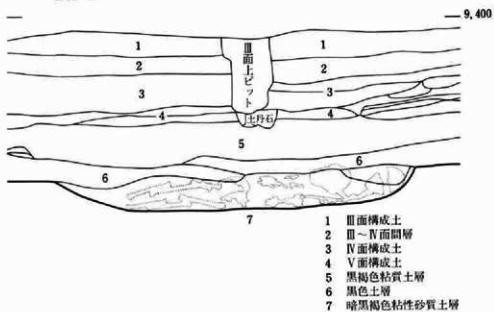


Fig 13 埋葬人骨出土状況

いわゆる横臥屈体を示すが、2号人骨は右手を背側に、左手は胸部辺りに位置する。これは埋葬時には上半身を西に向け横臥させていたのが、その後の腐化と土圧のため左半部から前に崩れ落ちた結果と判断される。手骨は遺存していないが右手の曲げの具合から元来存在していた位置は胸前辺りと推定され、合掌姿勢をとっていたことが考えられる。1号人骨は左手を欠失しているが、右手は腰の辺りで肘を折り曲げ、同じような合掌姿勢が考えられる。埋葬人骨に関わる詳細は別掲の森本教授の論文を参照されたい。

人骨及び墓壇の周辺には、平均径5cm、深さ6~7cmの小ピットが26穴検出された。ピットの配列は不規則ではあるが墓壇周辺に集中しており、他の区域には及ばない。同ピット群の性格については後章で考察を加えたい。

墓壇及び埋葬人骨が発見されたのは自然水路区域西側の高段地に形成された平場上であるが、同平場から更に南側を東西約8m幅で発掘区南縁辺部までに亘り黒褐色粘質土層を掘り下げて確認調査を試みた。発掘区南半部を全面調査しなかったのは、自然水路区域南壁土層等の観察結果から南半部の多くは自然水路形成区域の継続と判断され、また砂礫層面の急傾斜状態から推して発掘区壁崩落の危険が予想されたことに因る。調査範囲を前述の箇所限定し、墓壇の存する平場南側の落ち込み部の性格究明作業を進めた結果多くの貴重な資料が得られた。

落ち込み部は窪地状を呈し、黒色土及び墓壇形成面である暗黒褐色粘性砂質土層が堆積する。窪地東側は平場南東隅に端を発して土丹混り青灰色土による土手状の高まりが弧形状に巡っている。土手は幅約1mを計る。土手下東側は約70cmの落差で水路状の落ち込みとなり、有茎植物が厚く堆積する。植物と共に貝殻による小穴の開いた鏝等も検出された。土手から約30cm下の西側凹地内に堆積する暗黒褐色粘性土層上面には有茎植物が略々全面に亘って覆さり、中には東ねた状態で遺存するものも発見された。これは穀物類と思われる種子をつけた植物で、概ね30cm程が積み上げられた状況であった。茎の一部は鋭利な刃物で切断されたかの如き様相を呈し人為的な所業と思われる。

その他の自然堆積した有茎植物を除去し暗黒褐色粘性土層を表出させた段階で、多量の木製品等が検出された。各遺物については別掲で詳述するが、木製五輪塔、碑伝等の特異な木製品が占められる。木製品と共に瓦罐を用いたモッコ状製品も出土した。各遺物の出土状況は本来そこに定置された様相を示さず、重り合ったいわば一時的に流れ込んだ散乱状態の如き有様であった。しかし層位関係からして、窪地内の出土ではあるが、墓壇と同一年代の所産による遺物と考えられる。

窪地内の暗黒褐色粘性砂質土層を更に掘り下げ青灰色砂質土層を表出した段階で新たな遺構の所在が知られた。弧形を画く土手状遺構は平場南東隅辺りで約1mの間隔をもって切断される。切断部北岸中腹には、切断方向に沿って長さ2m、幅20cmの板材が据えられていた。板材の長辺に沿った両側には板材を固定するためか、小杭が打ち込まれている。小杭は北側辺りに1本、南側辺りに2本遺存していた。対岸の南岸中腹にも小杭が切断方向に沿って7本検出された。北岸同様に板材が据えられていた可能性がある。切断部中央部は僅かに東から西に掛けて、即ち南北溝から窪地内に

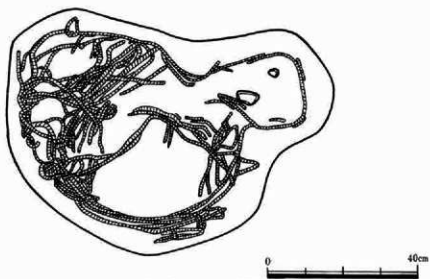


Fig 14 モッコ状製品

向けて緩やかに傾斜する。そして矢張り切断方向に沿って土丹が列状に並んで検出された。土丹は切断部東側、つまり南北水路側で2～3段に積み上げられ、切断部の低地部を補強するかの如き形状を呈する。土丹の間隙には兩岸同様に小杭が数箇所認められた。このように切断部の兩岸、及び中央部の所々に小杭を打ち込み、これに補強されるようにして北岸中腹には板材が、中央部には土丹が各々設置されたと思われる。

なお、土手状遺構の南端部近くで同様の小杭が頂部平坦面から窪地側斜面に掛けて10本検出された。何れも径2～3cm程度であるが、長さは約50cmと径に比して長い杭である。

窪地内側の青灰色砂質土層面は、北側から3段の段差をもって構成される。各段の南北幅は約4mを有し、10～20cmの段差を計る。また土手頂部平坦面との比高は上段約50cm、中段60cm、下段80cmである。なお土手切断部と上段との比高は殆どない。調査の過程で各段差についての認識が十分でなかったため段差部を平坦に均らしてしまったが、発掘区西壁土層の観察の結果、上段から中段及び中段から下段の各段差部上端面が10cm程の高まりを示すことが確認された。段差上端に東西に走行する道状の高位部分の存在が予想される。

窪地内の青灰色砂質土層面で得られた以上の諸遺構については、その形状から推して水田跡と考えたい。年代については、二叉状木製品 (Fig45-11, PL58-9) 以外直接遺構に伴う遺物がないため、不明と言わざるを得ない。しかし土手状遺構周辺から須恵器 (Fig53-19, PL65-6)、灰袖陶器 (Fig53-30, PL65-9) 及び下段覆土中から青磁無文皿 (Fig17-6, PL33-1) が出土している。

(松尾 寛方)

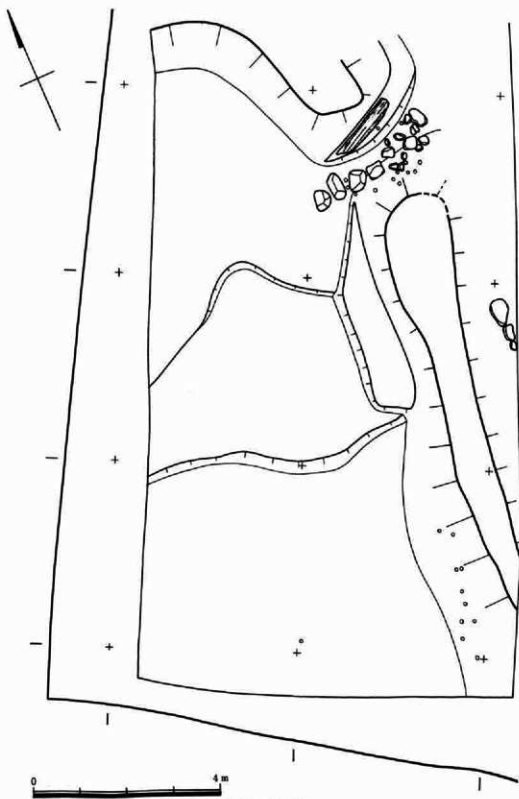


Fig 15 水田跡

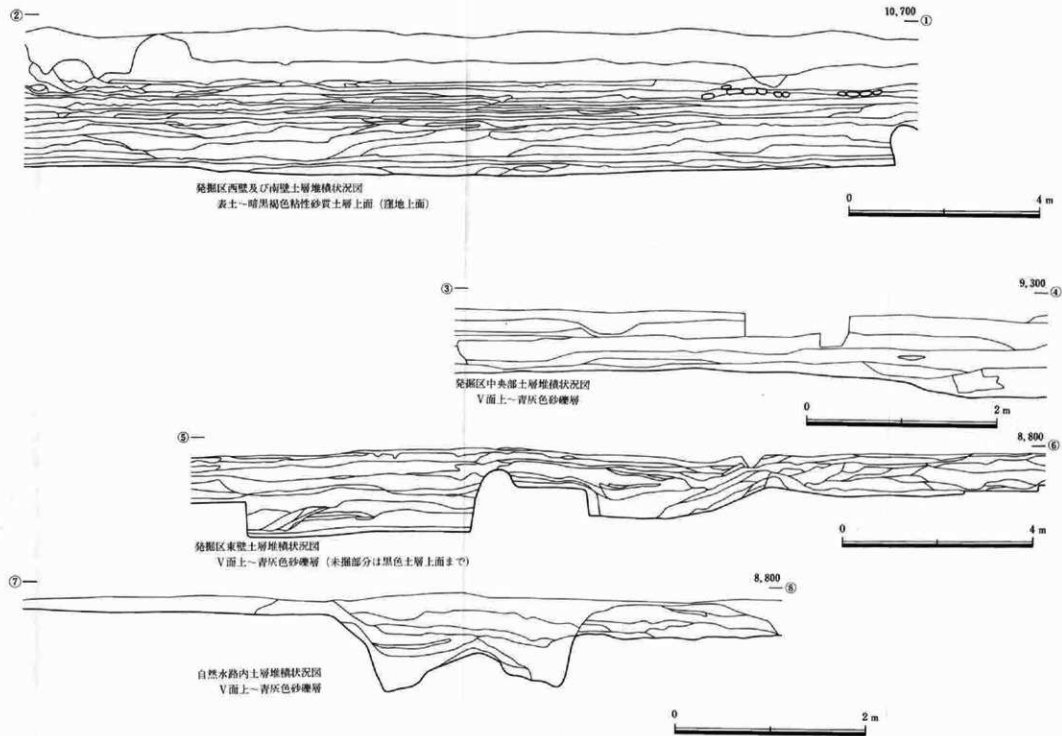


Fig 16 発掘区土層断面図

註 土層断面未測箇所は Fig 12を参照

第3章 出土遺物

本遺跡からの出土遺物については、各種別に説明及び考察を加えた。なお、従来資料が乏しかった平安時代の末期の遺物について、新たな知見を得たことは大きな成果であった。

また、中世かわらけ及び瓦については大まかであるが層位的な把握ができ、標準的編年資料と成り得るものである。

以下に詳記する。

I 舶載陶磁器および国産陶磁器

舶載陶磁器

(1) 青磁 (Fig 17-1~5, PL 33-1・10~16)

A 櫛描文碗 (PL 33-13)

外面に縦方向の櫛描、内面に稲妻状の櫛目文及び笄刺文を有する碗の胴部破片で、黄灰色の素材に透明度の高い朽葉色の釉が薄くかけられている。福建省莆田窯で類似の製品が生産されている。第IV面上出土。

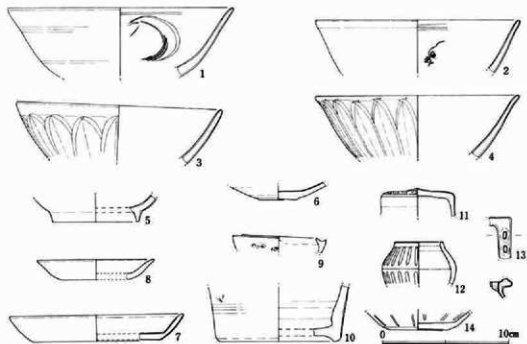


Fig 17 青磁・白磁・青白磁

B 劃花文碗 (Fig 17-1・2, PL.33-10-12)

外面は無文で、内面に牡丹文と思われる劃花文を配する碗である。Fig 17-1 (PL.33-10)は灰色の素地に透明度の高い緑色の釉が薄くかけられている。第V面上層出土。PL.33-12は前者と同様であるが、釉色がやや濃く、透明度が低い。第IV面上出土。Fig 17-2 (PL.33-11)は毛彫に近い劃花文を有する。素地は黄灰色で貫入が多く、透明度の高い朽葉色の釉が薄くかけられている。第III面上出土。これに類似した製品は、浙江省電泉窯で生産されている。

C 鎗蓮弁文碗 (Fig 17-3・4, PL.33-14・15)

外側面に鎗蓮弁文を配した碗で、縁部が内湾・直行するもの (Fig 17-3) と外反するもの (Fig 17-4) とがあり、蓮弁の太いもの (Fig 17-3) と細いもの (Fig 17-4) とがある。

Fig 17-3 (PL.33-15)は素地が白色で、透明度の高い青緑色の釉がかけられている。第III面上出土。

Fig 17-4 (PL.33-14)は素地が灰色で、透明度のやや低い緑色の釉がかけられている。第III面かわらけ面出土。

D 無文小盤 (Fig 17-5)

第III面かわらけ面出土。

E 無文皿 (Fig 17-6, PL.33-1)

口縁に向かって大きく開く皿と思われる器形である。底部は平底で、口縁に左回りで篦削りがなされている。胴部外側面下部は木引のままであるが、上部は篦削りが行われている。素地は灰白色で、堅緻である。釉は透明度の高い黄色で、大きな貫入がある。白磁に含めるべきかも知れない。木田下段上覆土層中出土。

(2) 白磁 (Fig 17-7-8, PL.33-2-8・11)

A 口はげ皿 (Fig 17-7-8, PL.33-2-7)

口縁部が直行するもの (Fig 17-7, PL.33-2-5・7) と外反するもの (Fig 17-8, PL.33-6) とがある。素地は白色で、透明からうすい青緑色の釉がかけられている。

Fig 17-7 (PL.33-6)は、全面に釉がかけられており、口唇部のみ釉が削られている。第III面上出土。

Fig 17-8 (PL.33-7)は全面に釉がかけられ、口唇部内面のみ釉が削られている。第III面上出土。

PL.33-3は口唇無釉部の上に黒色の付着物(覆輪か?)がある。第III面上出土。

PL.33-2は第I～II面上出土。4は第II面上出土。5は第III面上出土。

B 碗 (PL.33-8)

端反碗の胴部と思われる破片である。素地は灰白色で、やや黄味がかかった透明釉がかけられている。暗黒褐色粘性砂質土層上灰ブロック内出土。

C 合子 (Fig 17-9, PL.33-11)

外側面に梅と思われる文様を型で浮出させたものである。素地は白色で、透明度の高い釉がかけられている。第Ⅰ面上出土。

(3) 青白磁 (Fig 17-10~14, PL 33-9~10・12~18)

A 梅瓶 (Fig 17-10~11, PL 33-14~18)

外側面に描繪文を配した梅瓶または水注と思われる破片 (PL 33-16~18) と、外側面に草花文を配したと思われる梅瓶の底部の破片が出土している。PL 33-16は第Ⅱ面上、17は第Ⅲ面上、Fig 17-10 (PL 33-15) は第Ⅰ面上丹敷出土。Fig 17-11 (PL 33-14) は梅瓶の蓋で、直径6cmを測り、上面に花文を配している。いずれも素地は白色で、PL 33-17を除き、ガラス状の劈壊面を呈し、透明、半透明の青白色釉がかけられている。

B 水注 (PL 33-12)

水注の把手と思われる断片で、縦に櫛目文を配し、その上に円形の貼付がなされている。素地は白色でガラス状の劈壊面を呈し、透明度の高い青白釉がかけられている。第Ⅳ面上層出土。

C 小壺 (Fig 17-12, PL 33-13)

上下二段に型で籬蓮弁文を配した小壺の断片である。最大径付近で軋継ぎがなされている。素地は白色で半透明の青白色釉がかけられている。第Ⅲ面上出土。

D 角形香炉 (Fig 17-13, PL 33-10)

角形香があるいは器台と思われる断片で、口縁部には把手と思われる貼付痕が存在する。素地は白色でガラス状の劈壊面を呈し、透明度の高い、うすい青白釉がかけられている。第Ⅲ面上出土。

E 輪花小皿 (Fig 17-14, PL 33-9)

内側面に型押しで凸線を、その外側に捺押しで沈線を配して輪花を表わした小皿である。底は釉を削り、萼筒底にしており、底径は4.3cmを測る。素地は白色で貫入の多い透明度の高い、非常にうすい青白釉がかけられている。第Ⅲ面上出土。

(4) 褐釉壺 (PL 34-2~4)

茶褐色・黒褐色の不透明な釉をうすくかけた壺の破片である。素地は黄灰色で、白色・黒色・赤褐色の粒子を多く含んでいる。第Ⅲ面上出土。

国産陶磁器

(1) 古伊万里 (Fig 18-1)

高台脇から丸味を持って内湾しながら開く碗で、高台径は3.6cmを測り、畳付には砂が多く付着している。素地は灰白色で器壁が厚く、やや青味がかかった透明釉がかけられている。器壁には呉須で丸文が描かれている。土丹敷遺構上出土。

(2) 瀬戸 (Fig 18-2~13, Fig 19-35, PL 34)

A 天目茶碗 (Fig 18-2)

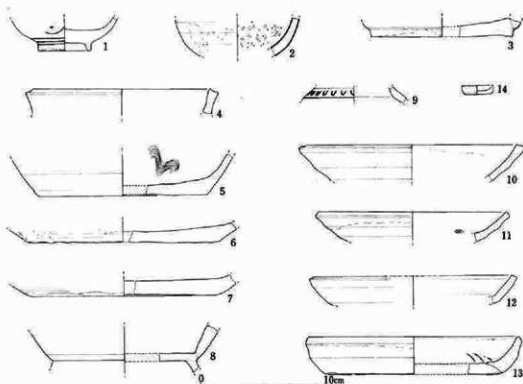


Fig 18 古伊万里・瀬戸

丸味の強い器形で、黄白色の粉性の素地に安定した黒と茶褐色のまだら状の軸がかけられている。17世紀以降の製品と考えられる。土丹敷遺構上出土。

B 筒形容器 (Fig 18-3, PL 34-12)

筒形容器と思われる底部で糸切後低い高台が削り出されている。外側面には若葉色の良くとけた軸がかけられ、内面は降灰がみられる。第Ⅱ面上出土。

C 洗 (Fig 18-4~7, PL 34-11・13)

Fig 18-4 (PL 34-13) は小形の洗と思われる口縁部で、口唇部に丸味の強い沈線を巡らしている。軸はかけられていない。第Ⅲ面上出土。

Fig 18-5 (PL 34-11) は内底面に磨目文を配した洗の底部。若葉色の軸をかけているが、細かな貫入が多く、土錆が浸入して黒ずんで見える。底面は篋削りが行われ、無軸であるが、外側面には、うすく透明軸がかけられている。第Ⅰ面上出土。

Fig 18-6 は第Ⅲ面上、Fig 18-7 は土丹敷遺構上出土。

D 四耳壺 (Fig 18-8, PL 34-14-17)

Fig 18-8 (PL 34-17) は13世紀タイプの四耳壺である。軸は透明で極くうすくかけられている。第Ⅲ面上出土。

PL 34-14~16も同タイプで、頸部から肩部にかけての破片である。第Ⅲ面上出土。

E 小壺 (Fig 18-9, PL 34-1)

酒会壺形の小壺と思われるもので、肩部に蓮弁文の型押しした浮文を配している。素地は黄白色で、米色の釉が内外共均一にかけられている。第Ⅲ面上出土。

F おろし皿 (Fig 18-10-13, PL 34-5-7)

Fig 18-10 (PL 34-6) は口縁が大きく開く形である。土丹敷遺構上出土。

Fig 18-11 (PL 34-5) は10と同様の器形であるが、二次焼成を受けている。第Ⅰ面上出土。

Fig 18-12は13と同様の器形である。土丹敷中出土。

Fig 18-13 (PL 34-7) は口縁が直立に近くなり、内底径と外底径が一致する形式である。第Ⅲ面上出土。

G 入子 (Fig 18-14, PL 34-8)

口径2.4cm、底径2cm、器高0.75cmを測る小型の入子の完器である。外底面は寛削りが行われている。内面には全面に降灰がみられる。第Ⅱ面上出土。

H 無軸小皿 (Fig 19-35)

内湾気味に大きく開く皿で、縁軸小皿の底部と思われる。第Ⅱ面上出土。

(3) 炉器 (Fig 19-1-14, PL 35-1-21)

A 甕 (Fig 19-1-6・8-14, PL 35-1-2・4-5・11-12・14-21)

Fig 19-1 (PL 35-4-5) は肩部に弧状の沈線配する大甕で、口縁部は強く外反する。素地は灰紅色で、外面は暗い小豆色を呈し、焼成は堅緻である。渥美窯の製品と思われるが、常滑窯の福年表では第2期前半期の製品である。第Ⅳ面上出土。

Fig 19-3-4 は口唇部が折れて立ち上がる形式で、常滑窯第2期後半期の製品である。第Ⅲ面上出土。

Fig 19-8-9 (PL 35-14-15) は頸部が内傾して立ち上がり、口縁がほぼ水平に外反し、T字状に口縁帯をもうける形式である。常滑窯第3期の製品である。第Ⅳ面上出土。

Fig 19-2・5・11・12 (PL 35-17) は頸部が内傾して立ち上がり、口縁部で外反し、T字状の縁帯をもつ形式である。常滑窯第3期の製品である。2は第Ⅲ面、5は第Ⅱ面、11は第Ⅳ面、12は第Ⅲ面上出土。

Fig 19-6・10 (PL 35-19-21) は頸部が内傾して立ち上がり、口縁部が外反し先端に幅2.5cm前後の縁帯をつける形式である。6は外反した口縁部を下へ折り曲げた先端に縁帯を貼りつけてある。常滑窯第3期の製品である。6は第Ⅱ面上、10は第Ⅲ面溝中の出土。

Fig 19-13-14 (PL 35-1-2) は縦方向に荒い寛削りがみられる。砂底である。第Ⅲ面上出土。

B 壺・小壺 (Fig 19-7・15-18, PL 35-7-10・13)

Fig 19-15 (PL 35-13) は口縁が水平に外反し、口唇部がやや立ち上がる形式の壺である。常滑窯第2期後半の製品である。第Ⅱ面上出土。

Fig 19-16 (PL 35-9・10) は胴上半から丸く内湾する小壺の肩部である。常滑窯第3期の製

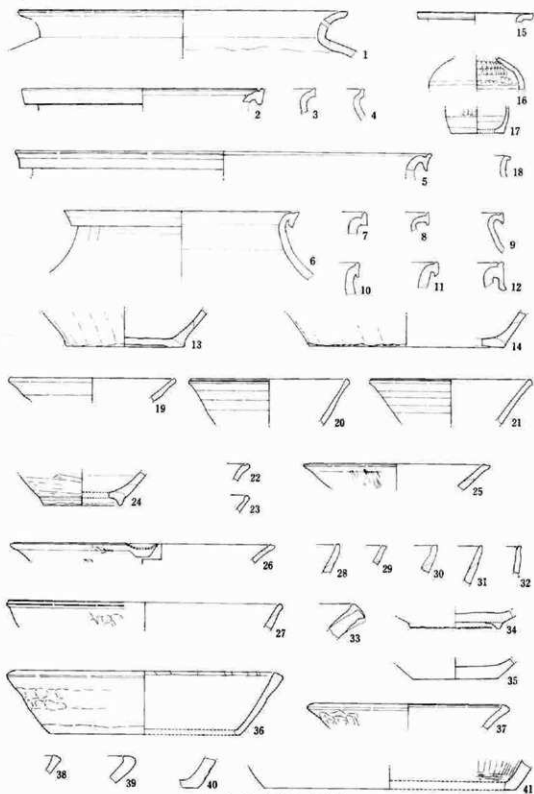


Fig 19 拓器・山茶碗・火鉢他

品であろう。第Ⅲ面上出土。

Fig 19-17 (PL 35-8) は底部から丸味を帯びて立上がる小壺の剩下半部である。常滑窯第3期の製品であろう。第Ⅲ面上出土。

Fig 19-18 (PL 35-3) は丸く外反気味に直立した頸部から、口縁がやや下向きに外反する形式で、口縁上端には浅い沈線が巡っている。渥美窯の三筋壺と思われるが、常滑窯の編年では第2期後半である。Ⅳ面上出土。

PL 35-7 は頸部下に一条の沈線を巡らす。常滑窯の三筋壺と思われる。第Ⅱ面上出土。

Fig 19-7 は頸部が直立し、口縁が水平に外反した後、口唇部が立上がる形式で、大形の壺と思われる。第Ⅲ面上出土。

C 片口鉢 (Fig 19-19-33, PL 36-1~16)

Fig 19-19-24 (PL 36-中段) は山茶碗窯系と称されている片口鉢である。いずれも小破片であり、全体を知り得るものはない。口縁はやや肥厚し、22・23は口縁内側に沈線を巡らしている。22は第Ⅱ面、19・23・24は第Ⅲ面、20・21は第Ⅳ面上出土。

Fig 19-25-33 (PL 36-上段) は常滑窯の製品である。

Fig 19-28-32は口唇部がほぼ水平で四角く小さいもので、上端に浅い沈線を巡らす形式である。常滑窯第3期の製品である。28は第Ⅱ面、29-32は第Ⅲ面上出土。

Fig 19-25-26 (PL 36-5・8) は直線的に大きく開いた口縁を水平に削り、口唇部に幅広の沈線を巡らす形式である。常滑窯第3期~第4期にかけての製品と思われる。25は第Ⅱ面、26は第Ⅲ面上出土。

Fig 19-27 (PL 36-2) は玉縁状の口縁を有する形式である。常滑窯第3期の製品であろう。第Ⅳ面上出土。

Fig 19-33 (PL 36-9) は器厚が1.5cmと厚く、釘の頭状にやや張り出したT字状を呈する口縁帯を有する。常滑窯第4期の製品である。土丹敷遺構上出土。

D 山茶碗 (Fig 19-34)

モク高台を有する常滑窯系の山茶碗である。第Ⅳ面上出土。

(玉林美男)

Ⅱ 土器および土製品

(1) 火鉢 (Fig 19-36-37・39-41, PL 36-下段)

Fig 19-36-37 (PL 36-17-18) は直線的に大きく開く鉢形土器の口縁で、口唇部は内傾し突起状に肥厚する。36は突起部分を削り落している。第Ⅲ面上出土。

Fig 19-38は口縁部が方形に、内外両面に肥厚するものである。黒灰色を呈し、瓦質である。

Fig 19-39 (PL 36-21) は36・37と類似する口縁を持つが、器壁が厚く、器形に丸味があり、外面が良く研磨されている。第Ⅱ面上出土。

Fig 19-40-41 (PL 36-19) は素地が灰白色の精練された良好な胎土の製品で、40は外側面が良好に研磨され、黒灰色を呈す。41は内外側面を研磨しており暗灰色を呈す。40は土丹敷遺構上、41は第Ⅱ面上出土。

(玉林美男)

(2) かわけ

Ⅰ類 高台状の厚い底部をもつもので、多くは内底面のヨコナデを行っていない。底径は5.4cm前後を測り、底部切り離しは回転糸切りと静止糸切りの二種類が認められた。

Fig 20-1 (PL 37-1) 口径8.7cm、底径4.8cm、器高1.8cmを測る完形品である。細砂粒を多く含み、焼成は良好、硬質で、爪ではじくと重い音がする。内底面中央部を指頭で軽く押えるだけで、Ⅱ類で一般的な巾広のヨコナデは行っていない。底部切り離しは、遅い回転を利用した糸切りと思われる。

Fig 20-2 (PL 37-2) 口径8.3cm、底径4.8cm、器高1.9cmを測り、口唇部をわずかに欠いている。胎土には細砂粒および金雲母の微粒を多く含み、焼成は堅緻である。内外面とも成形は丁寧であり、内底面は回転を利用したナデによって、口縁部近くまで一度にナデられ、細かい圏線を多く残している。底部切り離しは回転糸切りである。

Fig 20-3 (PL 37-3) 残存部が少なく断面図を反転させて復原した。実際は、歪みのために一方の器高が低くなるものである。やや粗い砂粒を多く含む胎土で、内底面中央には指頭による軽い押さえ、外底面には回転糸切り痕が残る。二次的な火熱を受けて、全体に脆く、黒色化しており、内面にはタールが付着している。

Fig 20-4 (PL 37-4) 胎土に細砂粒を多く含み、焼成は良好、堅緻である。体部は高台状の底部から大きく外へ開き、口縁部は外反気味に短かく立ち上がっている。内底面には細かい圏線、外底面には回転糸切り痕が残っている。

Fig 20-5-6 (PL 37-5) ともに内底面には圏線状の調整痕を残し、底部の切り離しは静止糸切りである。5は砂をまったく含まない精良土で、焼成は良好、堅緻、明赤褐色を呈する。6は細砂粒を多く含み、焼成はやや甘い。

Fig 20-7-9、底部に回転糸切り痕を残し、内底面に圏線状の調整痕がみられる。7・8は細砂粒を多く含み、焼成は良好、9は細砂粒をごくわずかに含み、硬質である。

Fig 20-10-11は胎土に細砂粒を多く含み、焼成は良好、堅緻である。10は内底面中央の高まりを残し、周縁を2-3回軽くヨコナデし、11は内底面全体をヨコナデしている。ともに回転糸切りであり、スノコ圧痕もみられる。技法上から言えば、Ⅱ類に近いものであるが、底径、高台状の底部、胎土などからⅠ類として扱った。

Fig 20-12 (PL 37-6) 底径5.4cm、胎土に砂粒をごく少量含み、焼成はやや甘い。体部は巻き上げ成形によるものと考えられ、底部に回転糸切り痕を残している。

Fig 22-41-42 (PL 40-19-20) 41は底径7.4cm、底部厚1.8cmを測り、胎土に多量の砂を含む。

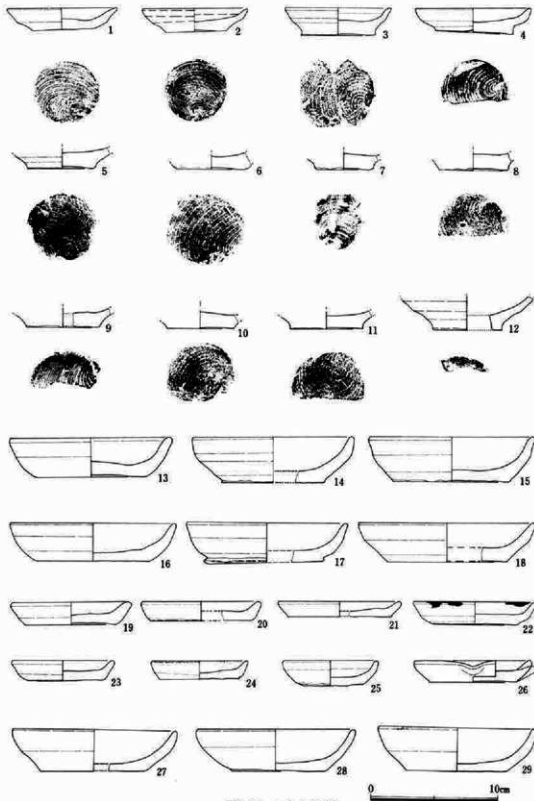


Fig 20 かわらけ(1)

焼成は不良で脆く、破損後に火熱を受けて全面が黒色化している。底部は回転糸切りで、内底面には渦巻状の成形痕が残る。42は底径7.7cm、底部厚1.9cmを測り、胎土、焼成および内外面の成形も41と同様である。ともに、底径、内底面の成形など、同層出土のものとは異っている。

これらはすべて包含層からの出土で、2・3が墓壇周辺出土、1・6-11・41・42がⅤ面上、4・5・12がⅣ面上の出土である。

Ⅱ期 内底面中央を最後にヨコナデするもので、底部の切り離しは回転糸切り、スノコ圧痕を残す。鎌倉で出土するかわらけのほとんどがこの類に属す。

Fig 20-13-14 (PL 37-7) 細砂粒を多く含み、焼成は良好、13は暗赤褐色を呈する。内底面中央のナデは弱く、渦巻状の成形痕が残る。器壁は厚く、口縁部は軽く外反している。Ⅴ面上包含層からの出土である。

Fig 20-15-18 (PL 37-8-10) 15は細砂粒を少量含み、焼成は良好である。内底面は巾広くナデられるが、渦巻状の成形痕も残している。16は細砂粒および泥岩粒を多く含み、焼成は不良、内底面のナデは15と同様である。17・18は細砂粒および赤褐色粒を多く含み、焼成は良好である。いずれも器壁が厚く、底径も9.0-9.6cmと大きい。Ⅳ面上包含層からの出土である。

Fig 20-19-21 19は胎土に砂粒を含まず、焼成は良好、堅緻で、暗赤褐色を呈する。器壁は厚く、口縁部を軽く外反させている。20・21は胎土に細砂粒を多く含み、焼成は良好、底部から直線的に開く体部をもち、口径、底径とも大きく、器高は低い。Ⅴ面上包含層からの出土である。

Fig 20-22-26 (PL 37-11-14) 22は胎土に細砂粒を少量含み、焼成はやや甘い。厚い底部から内燻気味に立ち上がり、口縁部は外反させている。口唇部にはタール状の付着物がみられ、灯明皿として使用されたものであろう。23は胎土に細砂粒、赤褐色粒を多く含み、焼成はやや甘い。24は細砂粒を少量含み、焼成は良好、口唇部に火熱を受けて黒色化した部分のみられる。灯明皿であろう。25は砂粒をあまり含まず、泥岩粒を少量混入する。焼成はやや甘く、指で触れると滑らかな感触を受ける。26は片口のつくもので、胎土には細砂粒を多く含む。焼成は良好、堅緻で、明赤褐色を呈する。Ⅳ面上包含層の出土である。

Fig 20-27-29 (PL 37-15-17) 27・29は細砂粒を多く含み、焼成は良好、茶褐色を呈する。底部から外燻しながら立ち上がり、口縁部は内側へ丸められる。29は灯明皿であろう。28は口唇部を丁寧に丸めている点など、器形的には29と近似する。胎土にはやや粗い砂粒と泥岩粒を少量含み、明橙褐色を呈する。

Fig 21-1 (PL 38-1) 口径10.2cm、底径6.4cm、器高2.8cmを測る中形の皿である。胎土には細砂粒と泥岩粒を少量含み、焼成は良好、口唇部にスガが付着している。

Fig 21-2-3 (PL 38-2) 細砂粒、赤褐色粒を少量含み、焼成良好。体部は直線的に開き、口縁部を軽く外反させている。

Fig 21-4-6 (PL 38-3-5) 細砂粒を多く含み、焼成は良好、明褐色を呈する。緩やかに内燻する体部と外方へ引き出された口唇部に特徴がある。特に4は器壁がやや薄く、成形も丁寧で、

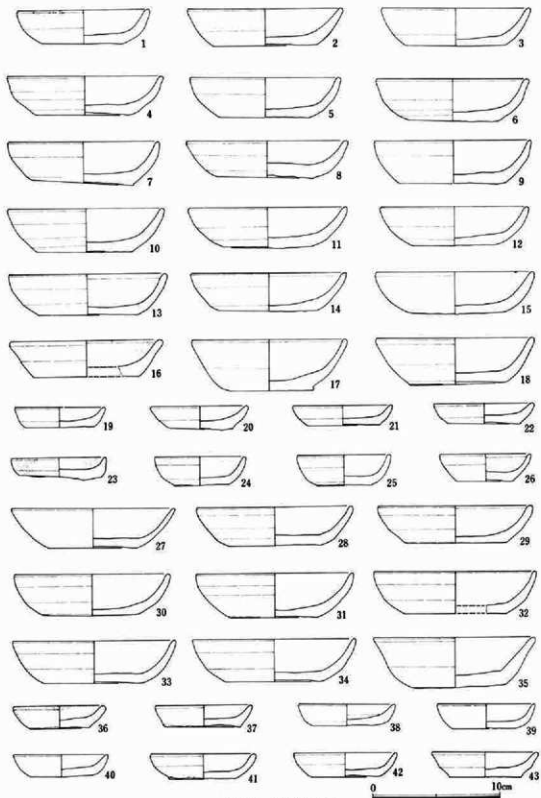


Fig 21 かわらけ(2)

内外面に細かい水びき痕を残す。

Fig 21-7-8 (PL 38-6-7) 胎土にやや粗い砂粒、赤褐色粒を含み、焼成は良好、堅緻で、暗赤褐色を呈する。8は歪み大きい。

Fig 21-9-10 (PL 38-8-9) 胎土に細砂粒を多く含み、泥岩粒も少量混入する。焼成は良好。明褐色を呈する。口縁部は直立気味であるが、口唇部は軽く外方へ引き出される。9の口唇部内面には、ごく小範囲にススの付着がみられ、灯明皿と考えられる。

Fig 21-11-15 (PL 38-10-13) 胎土に細砂粒および泥岩粒を少量含み、焼成は良好、底部から緩やかに内傾しながら立ち上がり、口唇部もそのまま丸められる。13・14の口唇部内面は肥厚し、15の内面には小範囲にススが付着している。

Fig 21-16, 胎土に細砂粒、赤褐色粒をごく少量含み、焼成は良好、明橙褐色を呈する。底部から直線的に外方へ開き、口唇部は丁寧に丸められている。口縁部内外面にススの付着がみられる。

Fig 21-17-18 (PL 38-14) 器高が4 cm前後と高いものである。胎土に細砂粒および泥岩粒を多く含み、焼成は不良。底部から緩やかに立ち上がり、体部中位から外反気味に開く。口唇部は若干肥厚している。

Fig 21-19 (PL 38-15) 胎土、焼成、器形とも Fig 20-23 と酷似する。

Fig 21-20-22 (PL 38-16-17) 胎土に細砂粒および赤褐色粒を多く含み、焼成はやや甘い。口唇部を外方へ軽く引き出すもので、20の作りはやや粗い。

Fig 21-23 (PL 38-18) 細砂粒を少量含み、焼成はやや甘い。底部から直立気味に立ち上がる短い体部である。内外面にはススが付着している。

Fig 21-24 (PL 38-19) 砂を含まない極めて精良な胎土で、焼成は堅緻、明赤褐色を呈する。内外面とも丁寧にナデられ、均整のとれた器形である。

Fig 21-25-26 (PL 38-20) 細砂粒および赤褐色粒を多く含み、焼成は不良、薄手のものである。25は明橙褐色を呈し、器形は24と同様である。26は底部から直線的に外方へ開く体部と直立気味の口縁部をもち、灰白色を呈する。

Fig 20-27-29, Fig 21-1-26は、Ⅲ面上かわらけ溜りからの出土である。

Fig 21-27, 32-34 (PL 39-4) 細砂粒、赤褐色粒を多く含む薄手のもので、明橙褐色を呈する。27は焼成良好で、底部から内傾気味に大きく開く体部をもつ。32-34は焼成がやや甘く、内外面とも磨耗して滑らかになっている。

Fig 21-28-31 (PL 39-1-3) 胎土に細砂粒を少量と泥岩粒を多く含み、焼成はやや甘い。28, 30は明褐色、他の二点は明灰褐色を呈する。口縁部はいずれも内傾気味に丸められ、29の口唇部は肥厚している。

Fig 21-35 (PL 39-5) 細砂粒および赤褐色粒を少量含み、焼成はやや甘い。底部から内傾しながら立ち上がり、体部中位で大きく外方へ開く。内底面周縁には強いナデが一週し、そこから口縁部までは滑らかに外反している。器高は高く、4 cmを測る。

Fig 21-36 (PL 39-6) 細砂粒および赤褐色粒を少量含み、焼成は良好、堅緻で、明赤褐色を呈する。口唇部は丁寧に丸められ、内外面にはススが附着している。

Fig 21-37-38 (PL 39-7) 細砂粒および泥岩粒を少量含み、焼成はやや甘い。38は内面の立ち上がりが急で、強い屈曲部ができる。

Fig 21-39-41 (PL 39-8-10) 胎土に細砂粒および泥岩粒を少量含み、焼成はやや甘い。いずれも底部から内彎して立ち上がり、口縁部も内側へ丸められている。

Fig 21-42, 細砂粒, 赤褐色粒を多く含む薄手のもので、焼成はやや甘く、明橙褐色を呈する。32-34の大皿と対になるものであろう。

Fig 21-43 (PL 39-11) 細砂粒, 泥岩粒を少量含み、焼成はやや甘い。形態的には20とよく似るが、胎土に若干の差異がある。

Fig 21-27-43までは、Ⅱ面上包含層からの出土である。

Fig 22-1 (PL 39-12) 細砂粒をごくわずか含み、焼成は良好、明茶褐色を呈する。口径11cm, 底径5.4cm, 器高3.1cmを測る中形の皿で、器壁は薄い。

Fig 22-2 (PL 39-13) 粗い砂粒をごく少量含み、焼成は良好、明橙褐色を呈する。外面には水びき痕を残す。

Fig 22-3-6 (PL 39-14-16) 3・4は胎土に細砂粒および泥岩粒を多く含み、焼成は良好、5・6は細砂粒, 泥岩粒を少量含む。いずれも口縁部は内彎気味に丸められており、3・6の外面には水びき痕が残る。

Fig 22-7 (PL 39-17) 粗い砂粒を多く含み、堅緻で明赤褐色を呈する。作りは粗雑で口唇部にススの附着がみられる。

Fig 22-8-9 (PL 39-18) 二次的な火熱を受けて変質し、灰黒色、堅緻である。8の底部は回転糸切りでスノコ痕もみられるが、丸底状に歪んでいる。この他にも、Ⅰ・Ⅱ面上からは同様の変質した皿が多く出土している。

Fig 22-10 (PL 39-19) 細砂粒, 泥岩粒を少量含み、焼成は良好である。内面体部は直線的に大きく開き、断面は三角形状を呈す。

Fig 22-11-12 (PL 39-20-21) 細砂粒および泥岩粒を少量含み、焼成はやや甘い。内底面中央部に高まりを残し、口縁部は肥厚している。

Fig 22-13-14, 胎土に細砂粒および泥岩粒を少量含み、焼成は良好。13は丁寧な作りで、体部は内彎している。14は直線的に開く体部をもち、口縁部内外面にタールの付着がみられる。

Fig 22-1-14まではⅠ面上包含層からの出土である。

Ⅲ類 手捏ね成形のものを一括して取り扱った。

Fig 22-15-16 (PL 40-1-2) 細砂粒を少量含む精土で、焼成は良好、堅緻である。体部の指頭痕は三段にわたってみられ、外底面中央に指頭によるくぼみがつく。体部の稜は明瞭で、口唇部には凹線が残っている。

Fig 22-17 (PL 40-3) 胎土、焼成は15・16とはほぼ同じ、指頭痕も三段にわたってみられるが、底面には巾広いスノコ圧痕が付き、口唇部の凹線は消されている。

Fig 22-18 (PL 40-4) 細砂粒をほとんど含まない精土で、焼成はやや甘い。指頭痕はおよそ三段にわたってみられ、外底面には円弧状に指頭痕がめぐる。体部の稜は明瞭で、口唇部の凹線は消されている。

Fig 22-19-20 (PL 40-5-6) 19は細砂粒を少量含み、焼成は良好、歪みの大きいものである。体部の指頭痕は三段にわたってみられ、口唇部に凹線が残る。20は胎土に細砂粒を多く含み、焼成は良好。丁寧な作りで、体部の指頭痕は軽くナデているのか不明瞭である。口唇部には、わずかに凹線が残る。

Fig 22-21-22, 21は細砂粒を少量含み、焼成は良好、堅緻で、明赤褐色を呈する。指頭痕は不明瞭で、底部中央にくぼみがみられる。22は細砂粒を多く含み、焼成は不良、指頭痕は不明瞭で、口唇部は21と同様に平坦にナデている。

Fig 22-23-26 (PL 40-7・9) 細砂粒をほとんど含まない精土で、焼成は良好、堅緻、明赤褐色を呈する。指頭痕は不明瞭であるが、およそ二段にわたってつき、底面中央を軽くおさえている。口唇部は内側へナデて丸められる。26は口唇部にタールが付着し、内面は黒色化している。灯明皿であろう。

Fig 22-24-25 (PL 40-8) 細砂粒をわずかに含み、焼成は良好、21の指頭痕は不明瞭であるが、およそ二段にわたるものと思われる。体部の稜は不明瞭で、口唇部は内側へ丸められる。25は体部の稜は明瞭で、口唇部の肥厚はみられない。

Fig 22-15-26までは、V面上包含層からの出土である。

Fig 22-27-29 (PL 40-10-11) 27は細砂粒を少量含み、焼成はやや甘い。体部の指頭痕は三段にわたる。28・29は胎土に砂粒をほとんど含まず、焼成は良好で、堅緻である。いずれも、口唇部を内方へナデて丸めている。

Fig 22-30 細砂粒を少量含み、焼成は良好、堅緻である。指頭痕は不明瞭であり、外底面中央に指頭によるくぼみをもたない。口唇部の肥厚はみられず、すなおに丸められている。

Fig 22-31 (PL 40-12) 胎土、器形、色調ともに20と近似する。口唇部には凹線が残り、丁寧な作りである。

Fig 22-32 (PL 40-13) 胎土に細砂粒を少量含み、焼成は良好、指頭痕は不明瞭で平底に近い器形である。口唇部は平坦にナデられている。

Fig 22-33 (PL 40-14) 胎土に砂粒をほとんど含まない精土、焼成は良好で堅緻、明橙褐色を呈する。体部には緩い段ができ、口唇部の凹線はみられない。歪みの大きいものである。

Fig 22-34-35 (PL 40-15) 34は胎土に砂粒をほとんど含まず、焼成は良好、堅緻で底部および内面が黒灰色、口唇外面が明橙褐色を呈する薄手の皿である。口唇部はやや肥厚する。35は細砂粒を少量含み、焼成は良好、外底面中央に指頭によるくぼみをもつ、ともに体部の稜は不明瞭である。

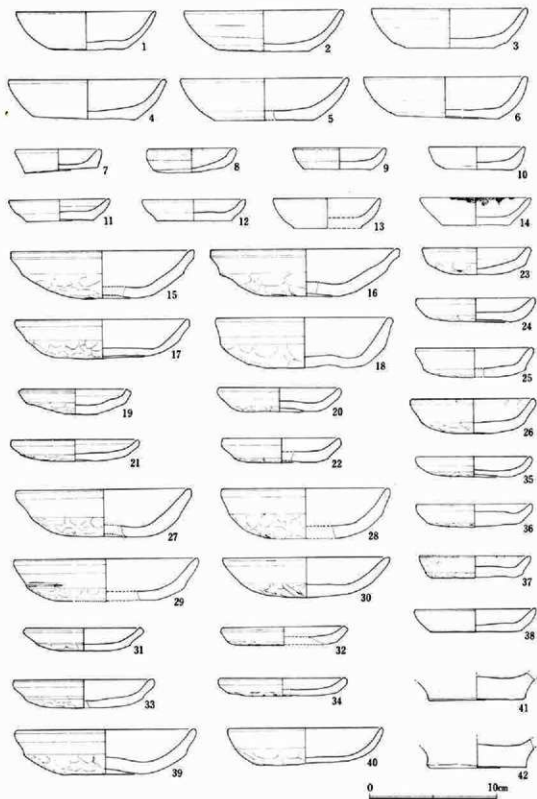


Fig 22 かわらけ(3)

Fig 22-36~38 (PL 40-16~17) 36は胎土に細砂粒を多く含み、焼成は良好、堅緻で明赤褐色を呈する。外底面中央のくぼみはなく、厚い底部である。37は細砂粒を多く含み、焼成はやや甘い。口縁部外面にススが多く付着する。灯明皿であろう。38は細砂粒を少量含み、焼成は良好である。口唇部にわずかにススの付着がみられ、灯明皿の可能性もある。いずれも、平底に近く、体部および口縁部の形状など、糸切り底の小皿に近い器形である。

Fig 22-21~38まではⅣ面上包含層の出土である。

Fig 22-39 (PL 40-18) 細砂粒を少量含み、焼成は良好、堅緻である。指頭痕は三段にわたってみられ、外底面中央にくぼみをもつ。体部の後には明瞭で、口唇部は内方へ丸められる。

Fig 22-40はいわゆる白かわらけである。胎土は砂粒を含まず精良で、焼成は良好、灰白色を呈する。

成形上の差異を主としてⅠ-Ⅲ類に分類を試みたが、Ⅰ類については完形品が少なく、充分な検討は出来なかった。ただ、Ⅴ面上出土の他のかわらけと比較した場合、口径、底部厚など明らかに異なる要素をもって、いわゆる中世のかわらけの一段階前のものと考えられる。²¹⁾

Ⅱ・Ⅲ類のかわらけは、鎌倉市内の調査によって数多く出土しており、大雑把であるが、変遷の傾向をつかむことが出来た。²²⁾

Ⅱ類では、細砂粒を多く含み、器壁が厚く、内底面のナデは中央部の高まりを軽くナデルだけで、渦巻状の成形痕を残していたものが、Ⅲ面以降になると、胎土に含む砂粒の量が減少し、かわりに泥岩粒を含むものが多くなる。また、内底面のナデも巾広く、薄手の皿や中形の皿、小皿でも器高の高い均正のとれたものが現われ、器形にいくつかのタイプがみられるようになる。

Ⅲ類は、Ⅳ・Ⅴ面に集中しており、この時期では圧倒的にⅠ・Ⅱ類を上回る量が出土する。Ⅴ面以前にはみられず、Ⅲ面以降ではわずかに出土するが、白かわらけが輸入される頃には衰退していったようである。²³⁾口唇部の形状は、凹線をつけるもの、凹線をつけずに肥厚させるものから、しだいに、肥厚させず、素直に丸めるものへと移行し、体部の後縁も不明瞭で下位につき、平底の器形に近くなってゆく傾向がみられる。

以上の変化をまとめると、Ⅴ面およびⅢ面の時期にかわらけ生産上の大きな転期を考えることができる。つまり、古代末期の生産体制だけでは対応できず、新たに手づくね生産が始まる時期がⅤ面、その後、かわらけの量産体制が軌道にのり、手づくね生産が衰退する時期がⅢ面と考えられ、供伴遺物や八幡宮境内遺跡の調査成果²⁴⁾との比較によって、それぞれを12世紀末、14世紀中頃としておきたい。

註1 横浜市受地だいやま遺跡D区54号住居址から、Ⅰ類とよく似た土師質土器が出土している。

伊藤正義『(No11) 受地だいやま遺跡発掘調査概報Ⅱ』1983年

註2 鎌倉考古学研究所の齊水秀雄氏、馬淵和雄氏から、多くの御教示を得た。

註3 河野真知郎『鎌倉における「白かわらけ」の特徴と系譜』鎌倉考古No10, 1981年によれ

ば、大体14世紀を中心とした時期に
搬入されるとしている。

註4 『研修道場用地発掘調査報告書』1983
年

(菊川英政)

(3) 土製品

Fig-1~2 (PL 41-2) は所謂「土鍾」
である。1は長さ4.1cm、最大径1.4cm、孔の直
径0.3cmを測る。2は半分に分れているが、1
と同様の大きさであると思われる。ともに細砂
粒を少量含み、焼成は良好である。黒色砂質土
層の出土。

Fig-3 (PL 41-3) キメの細かい胎土で、
焼成は良好、灰白色を呈する。全面をナデで仕
上げており、瓦貫鼎の頸部であろう。Ⅲ面上包
含層の出土。

Fig-4 (PL 41-4) かわらけ底部を再加工したもので、直径3cm、厚さ1cmを測る円板である。
両面は平坦に、側縁はやや丸味をもって磨られている。Ⅳ面上包含層の出土。

Fig-5 (PL 41-5) 内底面に線刻を有するかわらけで、線刻は直径5.2cmの円弧を中心から放
射状にのびる直線と組み合わせたもので、焼成後に描かれたものである。Ⅲ面上包含層の出土。

Fig-6 (PL 41-7) 胎土に細砂粒を多く含み、焼成は良好で灰白色を呈する。成形はヘラによっ
て行われ、全体に雑な作りである。破損品であるため、器形、用途ともに不明。Ⅲ面上包含層の出
土である。

なお、これらの他に、Ⅱ・Ⅲ面上包含層からは、用途不明の破片が多く出土している。(PL 41
-1) すべて二次的な火熱を受け、堅緻で、何かに押しつけられていた時についたような粘土ジワ
があるもの、溶鉱物の付着があるものなど、壘体もしくはトリベの破片とも考えられる。同じⅡ・
Ⅲ面からは火熱を受けて変質したかわらけも数個体出土しており、小規模な鍛冶が存在した可能性
も考えられよう。

(菊川英政)

Ⅲ 瓦類

出土遺物の大半は瓦類であり、量の多少はあるが第Ⅰ面~第Ⅳ面の各層位から破片数にして、
3500点以上が出土している。とくに第Ⅰ面の土丹敷き遺構(土丹地形層)、第Ⅳ面の瓦溜り遺構か

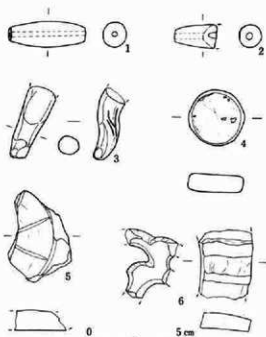


Fig 23 土製品

らまとまった資料が得られた。瓦類には鎧瓦・宇瓦・男瓦・女瓦などがみられたが、言うでもなく男瓦・女瓦が圧倒的多数を占めている。

中世瓦については、各地におけるその実態がかならずしも明らかとは言えず、いまはその資料の報告が急務である。事実鎌倉においても寺院等からの瓦の出土こそ多いが、これらの製作地とくに焼成された窯についてはまったくと言っていいほど知られていないに等しいからである。したがって今回の報告では、出土瓦のすべてを観察し、そこから看取される特徴を可能な限り提示することを心がけたつもりである。特にほとんど報告されることのない男瓦や女瓦にも重点を置いたものもその現れである。

なお鶴岡八幡宮出土の軒先瓦の分類基準について次のとおりである。まず先に報告されている境内の直倉殿地用地及び修造場用地発掘調査によって出土した資料を含めて、¹⁾鎧瓦にはHA、宇瓦にはHNを付し、それを瓦当文様によって次のような文様系（Ⅰ～Ⅲ）に大別した。

鎧瓦 (HA)	宇瓦 (HN)
Ⅰ 蓮花文系	Ⅰ 唐草文系
Ⅱ 巴文系	Ⅱ 剣頭文系
Ⅲ その他	Ⅲ その他

これらを各々文様系を形状差によって順に01・02・03……と細分して呼称し、同文異范と思われるものにはそれぞれの末尾にa・b・c……を記して区分したものである。しかしこの01・02・03などの数字については、その順序によって時期を意味するものではなく、あくまで型式を確認した順である。なお今回の調査で出土した鎧瓦・宇瓦の各形式ごとの出土層位別点数は表1に示したとおりであり、この型式名もそのことを意味するものである。

(1) 鎧(軒丸)瓦

鎧瓦は出土総数88点であり、これらのうち小片や瓦当部を欠く型式判定の困難な資料を除く、70点である。瓦当文様は蓮花文系が2点出土したほかは全て巴文系である。ほとんどの資料に共通した製作技法上の特徴として、范型からの取出しを簡単にするため離れ砂を使用している。瓦当部と男瓦との接合は、溝をつくってなされており、瓦当裏面は、平坦にナゲ調整されるものとし指頭痕や粗いナゲによって凹凸を有するものがある。後者の下端部断面はやや丸味を持っている。これらの瓦当文様をもとにし以下の20型式に分けられた。

蓮花文系

①HA I 01 (Fig 24-1, PL 42-1)

八葉複弁蓮花文。中房は高く突出し、不明瞭ながら1+8の蓮子を置く。その外周に一段低い雄シベ状のものを表現する。花卉は中央部をくぼませたい輪郭線で囲み、その中に丸味を持つ2個の子葉を浮き上がらせている。外区には弁端と弁間に対応して16個の珠文を配する。周縁は内側をへら削りしているため幅は一定しない。男瓦との接合位置は高い。瓦当裏面は指ナゲ調査をした後、

外周にそってへら削りを施す。瓦当外周及び男瓦部凸面に平行条の叩き目が認められる。胎土には砂粒の混入少なく、焼成はやや硬質で、灰色を呈する。本型式と類似した文様構成を有する八葉複弁蓮花文は何種類かあって、鎌倉以外でも出土しているが、¹²²市内では二階堂永福寺跡で、同文の蓮花文笠瓦が出土しており、¹²³これは永福寺における創建期主要瓦と考えられている。なお、本例のように瓦当外周に叩きを施したような例は、永福寺出土例では知られていない。

②HA I 03 (Fig 24-2, PL 42-2)

八葉複弁蓮花文。突出した小さな中房には蓮子は認められない。中房と花卉の間の凹には雄シベ状のものを置く。弁区には先端を尖らせた八葉の単弁が配され、内外区を分ける界線は細い。珠文は弁端と弁間にはほぼ対応して16個巡らしている。周縁は直立して高い。瓦当面に深い指ナデ痕がみられ、文様の一部を消す。接合式で、支持粘土をあてたのち瓦当外周も含めて丁寧なナデ調整を施す。凸面は縦位にへら削り、凹面は細かな布目痕を残す。瓦当面の離れはやや粗い砂粒を使用している。胎土には石粒を少し交じえた砂粒を含み、焼成はやや軟質で、灰褐色を呈す。

市内から出土する単弁蓮花文笠瓦の例は大慈寺跡出土の笠瓦が知られている。¹²⁴

巴文系

③HA I 01 (Fig 24-3-4, PL 42-3-4)

左まわり三巴文は影が深く大ぶりである。巴頭は太く先端を尖らせて、半周余りで末端となり尾は短い。巴文のまわりには太い1条の界線が走り、その外側に大粒の珠文が配されている。周縁は比較的幅が狭くさほど高くない。瓦当裏面は縦方向の指ナデ痕が顕著に残り、下端部にかけて丸味をつけて調整されている。胎土に砂粒の混入少なく精良、焼成はやや軟質なものが多い。色調は灰色～淡灰褐色を呈する。二次的な焼成を受けたものもみられた。

④HA II 02 (Fig 24-5, PL 42-5)

右まわりの三巴文で文様の影が深い。巴は頭部先端が尖り気味で太く、胴部から尾部にかけて急に細くなり尾は短い。そのまわりには大粒の珠文を巡らしている。瓦当裏面は指ナデの粗い調整痕が認められ、下端部断面は丸味を持っている。男瓦との接合は高い位置で、内外面にあてる接合粘土は少量である。胎土は砂粒をほとんど交じえない精良、焼成は比較的軟質で、灰白～灰褐色を呈す。

⑤HA II 03 (Fig 24-6, PL 42-6)

左まわりの三巴文である。巴は比較的太く、断面は丸味を持っている。珠文は大粒で、密に配されている。瓦当は厚みがあり、裏面は指ナデ痕を残し、下端部にかけて丸味をつけている。本型式とHA II 01・02は胎土・焼成・色調が酷似し、細部にわたる調整法も近似している。

⑥HA II 07 (Fig 24-7, PL 42-7)

やや情円形を呈した左まわり三巴文である。¹²⁵巴は頭部先端を尖らせ胴部からやや細くなって尾部へ続き約半周で尾の末端となる。界線はなく、その外側に珠文がほぼ均等な間隔で巡っている。周縁は低く幅も一定していない。高い位置に深い溝をつくって男瓦と接合し、瓦当裏面は深い指頭

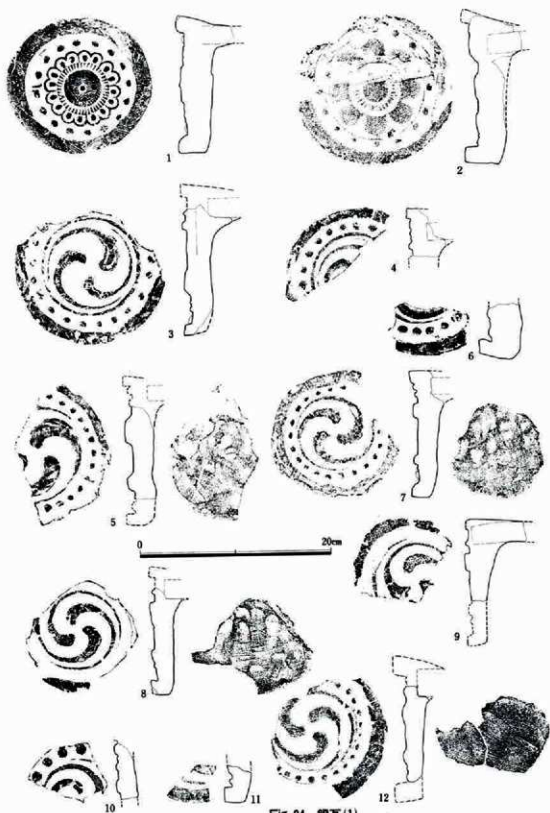


Fig 24 鋪瓦(1)

圧痕が認められる。胎土には細砂粒を交じるも良土で、灰色を呈す。焼成はやや甘い方で、表面灰褐色～灰黒色を呈する。

⑦HA Ⅱ08 (Fig 24-8~9, PL.42-8~9)

右まわりの三巴文で、頭部から尾部に至るまで上面は比較的平らである。巴頭部の先端をやや尖らせ、胴部から細くなって、尾は半周余りで末端と短かい。周縁は低いほうで幅も一定していない。瓦当裏面には顕著な指頭圧痕がみられ、瓦当上面から男瓦部にかけて縦方向のナデ調整される。HA Ⅱ04とは巴の方向や珠文の有無等の点で相違する。しかし胎土・焼成・色調、瓦当裏面の指頭圧痕が顕著であることなど共通した特徴を持っている。また巴の巻方向の違いを除けば両者の文様は良く似ている。

⑧HA Ⅱ09 (Fig 24-10, PL.43-1)

左方向にまわる三巴文である。巴は比較的細く頭部から胴部にかけてそれほど太さが変わらず、断面が丸味を持っている。大粒の珠文を配している。瓦当裏面は粗いナデを施すが、指頭圧による凹凸の痕跡を残す。瓦当面にいわゆる離れ砂と考えられる細砂粒が付着している。胎土は砂粒をほとんど交じえない良土、焼成は硬質で、灰褐色を呈す。

⑨HA Ⅱ011 (Fig 24-11, PL.43-2)

小破片1点のみで全体は明らかではないが、おそらく左まわり三巴文であろう。巴は比較的太めで、上面が平らである。界線・珠文等は認められない。瓦当裏面は平坦にナデ調整される。胎土は砂粒等をほとんど交じえない極めて精良な粘土を使用している。焼成は軟質で、色調は表面黒灰色、芯部灰色を呈する。女瓦・男瓦のⅠ類C中に見られた精良土の一群と同質である。

⑩HA Ⅱ12 (Fig 25-1, PL.43-3)

右まわりの三巴文は断面が台形状を呈し、尾の末端は周縁にせまっている。周縁内側はへら削りで面取りを施しており、男瓦との接合位置は高い。胎土は石粒、砂粒を多量に含む粗土で、女瓦・男瓦Ⅰ類Dと同質の胎土・焼成を呈する。

⑪HA Ⅱ18 (Fig 25-2)

左方向にまわる三巴文である。巴の尾は周縁と連なり、周縁に凸線の文様が認められる。周縁の幅は一定していない。胎土は石粒を若干交じえ、焼成軟質、灰黒色を呈す。類似したものが雪ノ下の横浜国立大学附属小学校校庭から⁴⁸出土している。

⑫HA Ⅱ21 (Fig 25-3, PL.43-5)

左方向にまわる平面的な三巴文である。巴は頭部先端を丸くし、胴部から細くなって尾部に続く、尾部末端の巴の順次接している。そのまわりには細い一条の界線が走り、小さな珠文を密に配している。瓦当裏面は指で平坦にナデ調整されている。胎土は細砂粒を混入し、焼成はやや硬質で、色調は表面灰黒色、芯部灰褐色を呈す。

⑬HA Ⅱ24 (Fig 24-2, PL.43-4)

右まわりの三巴文である。巴は頭部先端がやや丸く、断面は丸味を持っている。頭部からやや胴

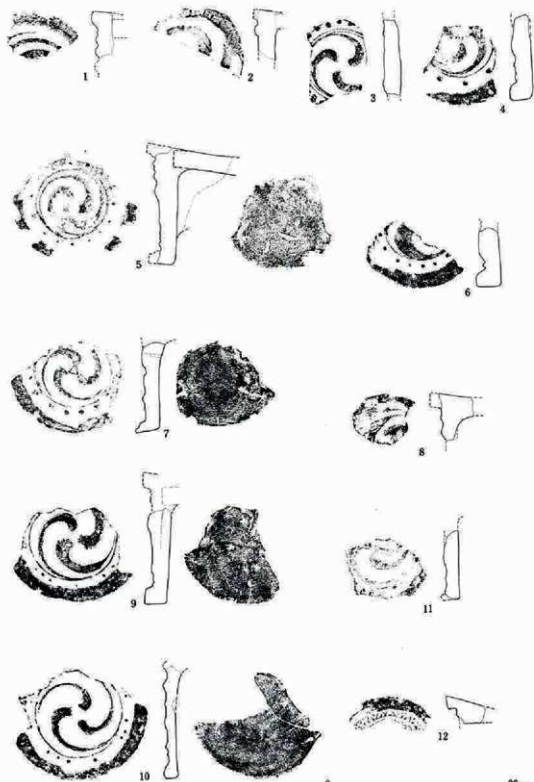


Fig 25 鍍瓦(2)

太気味に尾部に達する。巴文の外側には珠文を密に配している。瓦当面に砂粒の付着が多く離れ砂と考えられる。周縁は高く直立し、幅広くなる。瓦当裏面は横方向の指ナデ痕が顕著で平らである。胎土は石粒を比較的多く含みやや粗土、焼成はやや軟質、二次焼成を受けて明るい赤褐色を呈した例もみられた。

⑬HA Ⅱ 27 (Fig 25-4, PL 43-6)

右まわりで三巴文である。巴は頭部から胴部にかけてほぼ同じ太さでくが、尾部は細く隣りの尾部に接している。珠文は間隔を開けて配されている。瓦当裏面は指で平坦にナデ調整している。胎土は細砂粒を交じえるが比較的良好、焼成はやや軟質である。表面は灰黒色で、芯部は灰白色を呈す。

⑭HA Ⅱ 30 (Fig 25-6, PL 43-8)

小破片のため全容は知り得ないが、巴は左まわりで、頭部から胴部にかけて太く尾部から急に細くなって隣りの尾に接している。小さな珠文を密に配している。周縁内壁は外側に向けて傾斜する。瓦当面に黒色微砂粒の離れ砂がみられる。胎土は黒色の微砂粒を交じえ、焼成はやや硬質で、色調は表面灰黒色、芯部灰白色を呈する。

⑮HA Ⅱ 32 (Fig 25-8)

小片のため全体は不明である。右方向にまわる三巴文と考えられる。瓦当面にⅡ30と同様の黒色微砂粒が多く付着している。胎土・焼成・色調等もⅡ30と類似している。

⑯HA Ⅱ 33 (Fig 25-5・7, PL 43-7・9)

左方向にまわる三巴文である。巴は頭部がやや丸味を持ち、尾の末端はまわりの界線に接している。珠文は間隔が一定せず、不揃いである。瓦当裏面はナデ調整され、平坦であるが、5の例にはヘラによって「八」の字が刻されており、7の例は三巴文の中心に「△」印が押印されている。また女瓦の端面に三角印を押印した例もみられた。²⁷胎土は小石、砂粒を含み、焼成は比較的良好で、色調は灰橙～灰褐色を呈する。

⑰HA Ⅱ 34 (Fig 25-9~10, PL 43-10~11)

外区に非常に貧弱な珠文を3個と1個が一単位となって交互に配した左まわり三巴文である。巴の頭部は丸味をおび大きめで、尾は細く次の巴に接して旋回し、界線を思わせる。周縁は幅広く作られ、内壁は外側に開いて立ち上がる。瓦当裏面は平坦にナデ調整が施されており、男瓦との接合は比較的高い位置である。10の瓦当部は非常に薄手の造りである。胎土に砂粒を若干混入し、焼成はやや軟質で、灰橙色を呈する。

⑱HA Ⅱ 35 (Fig 25-11, PL 43-12)

小破片が2点出土したのみである。Ⅱ34と同様に珠文を数個組にして交互に配するものである。文様の浅い左まわり三巴文で、瓦当面に黒色微砂粒の付着が多く認められた。胎土・焼成・色調等Ⅱ30・32に近似している。

⑲HA Ⅱ 38 (Fig 25-12)

主文様は三巴文であろう。外区に小さな刺頭文を連続して配したものと考えられる。胎土には砂粒・石粒を含み、色調は表面灰黒色、芯部茶白色である。類例としては、市内では荏柄天神社²⁰、極楽寺²¹、二階堂永福寺跡²²があり、横浜称名寺²³のものも知られている。

(2) 宇(軒平)瓦

宇瓦は73点出土し、文様の明瞭でないものと極めて小破片で型式判定の困難な11点の資料を除く62点について分類を行なった。このうち刺頭文系が43点と最も多く、唐草文系18点、半截花文1点が出土した。刺頭文系の文様意匠を大きく分けると、陰刻の文様になるものと細い黒線で輪郭を描いたものがあり、後者に上向きの刺頭文も含まれている。唐草文系は中心飾を配した均正唐草文が主流である。宇瓦も燈瓦と同様に瓦当面に細かな砂粒の痕跡が認められ、離れ砂を使用したものがほとんどである。

瓦当部の製作技法は次の4種に分類された。

- (A) 別に瓦当部を作らず、女瓦広端部を凸面がわに折り曲げ瓦当とするもの。
- (B) 女瓦凸面の広端部に別粘土を貼って瓦当部とするもの。
- (C) 女瓦凸面の広端縁を斜めに切り落として瓦当部になる粘土を接合するもの。
- (D) 瓦当部に女瓦をさし込む様に接合したもの。

以上のような瓦当部の製作技法の差を大まかながら認めることができるが、この差は一概に時間差と断定することはできない。しかし、瓦当文様、顎部の形態、胎土・焼成、出土層位等を組み合わせて観察して行くことによって、製作技術上の新旧や変遷過程がその差として認められる。

唐草文系

①HA I 01 (Fig 26-1, PL 44-1)

均正唐草文である。四葉の花弁を十字に配した花文を中心飾とし、その左右に唐草文を反転させる。中心飾の各花弁は丸味をもったもので、花弁に接して唐草文が両側に派生する。瓦当面に布目が顕著に認められる。胎土は砂粒を含む良土で焼成は軟質、灰褐色を呈する。同文の例は二階堂永福寺跡²²、勝長寿院跡²³で出土している。

②HA I 03 (Fig 26-2, PL 44-2)

均正唐草文。唐草文は細い線で表現され、界線によって内外区に分ける。珠文は大粒で、間融も広い。瓦当面に砂粒等の付着は見られない。瓦当部は(B)の方法で、女瓦凸面広端部に別粘土を貼っている。接合の際、女瓦広端部に×状のきざみを入れたらしく、剝離面にはその痕跡を凸線として転写している。顎は中顎で、顎部下端は横方向の、顎部は縦方向に丁寧な調整が行なわれている。胎土はかなり緻密で、焼成はやや軟質、色調は灰白色を呈する。

③HA I 05 (Fig 26-4, PL 45-1)

左端部のみを残す小破片で、唐草文と考えられる。唐草文は線が細く、先端が小さな水玉様になっている。界線を作るが、外区内縁には珠文を持たない。瓦当部は(B)の方法で女瓦凸面広端部に別粘土を貼って瓦当部としたもので、女瓦部を欠損し剝離面に×状のきざみ痕が転写している。顎は中

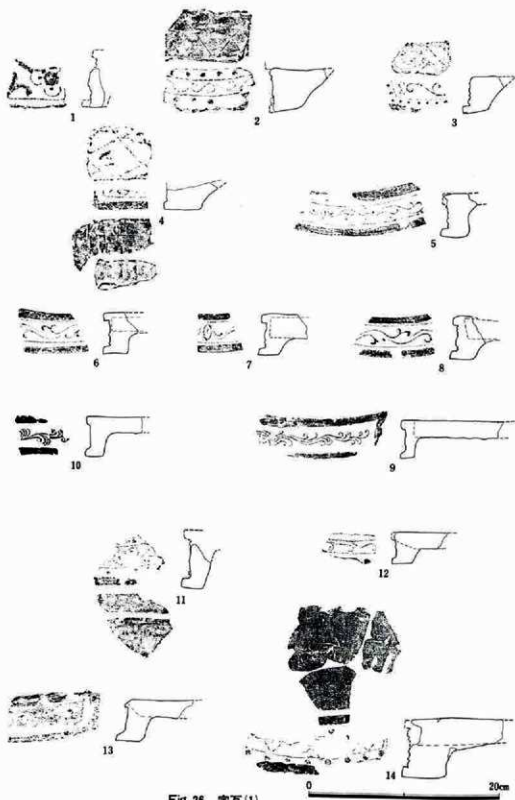


Fig 26 字瓦(1)

頸で、頸部下端・頸部は丁寧なナデ調整が行なわれている。胎土はきわめて精良で、焼成は軟質、色調は表面黒灰色、芯部灰色である。

④HA I 06 (Fig 26-3, PL 44-3)

左側端部を残す破片である。文様は軽い巻き込みを持つ唐草が左端に向かって伸び、その先端の頭に葉形状を配している。内外区は界線によって分け、外区内縁に配された珠文はやや小さく密である。女瓦部との接合面で剝離し、(b)の方法により剝離面にはHA I 03・05と同様に転写したきざみ痕が認められる。頸部下端・頸部とも丁寧なナデ調整を施している。胎土はきわめて精良で、焼成はやや軟質、色調は表面黒灰色、芯部灰褐色を呈する。

⑤HA I 08 (Fig 26-9~10, PL 44-8~9)

均正唐草文。中心飾は軽く巻き込んだ枝葉を多く派生させ、中心飾から左右に5回転する細い凸線によって構成される唐草文を配する。女瓦との接合は、瓦当部上端に喰い込ませており、その先端が瓦当部に及んでいるものと及んでいないものがある。頸は幅の狭い(浅頸)段頸で、頸部下端と頸部から女瓦部にかけては横方向のそれぞれナデ調整が行われている。女瓦凸面には横線2本と×状の交叉線文の叩き目痕が認められ、凹面は縦方向のナデを施している。瓦当面にはあまり砂の付着が認められないが、凹凸面には離れ砂と思われるやや粗い砂粒が認められた。胎土は石粒・砂粒を交じえた粗土で、焼成はやや軟質で、色調は灰褐色～灰橙色である。また、明るい赤褐色を呈した例もあり、これは二次焼成を受けたものと考えられる。胎土・焼成や叩き目などから見て、女瓦Ⅱ類に極めて近い。

⑥HA I 09 (Fig 26-11, PL 44-10)

中心部分を残す破片である。中心飾には輪郭線で花文を表現し、その中央から左右に反転する細い凸線によって構成された均正唐草文である。外区とは界線で分けられ、外区内縁に珠文を配している。瓦当面に黒色の微砂粒が多めに付着している。胎土は黒色微砂粒多く含み、小石等も若干交じえ、白色の物質が見られる。焼成はやや軟質で、色調は表面灰黒色、芯部灰色を呈す。同系の例は、頼朝法華堂跡²¹⁴・横浜称名寺²¹⁵で出土している。

⑦HA I 12 (Fig 26-2, PL 44-11)

左端から右端へ退化した下向きの唐草文を進行させた偏行唐草文である。界線は周縁下端に接するように配されている。瓦当部の接合法は、(c)の方法である。瓦当面と女瓦凸面に黒色の微砂粒が付着している。胎土は小石、砂粒を含み、焼成はやや不良で、灰褐色を呈する。

⑧HA I 18 (Fig 26-5~8, PL 44-4~7)

内区には蓮の花と葉をディフォルメした文様をさらに省略化したものを中心飾としている。中心飾の左右に2本の凸線からなる5回転の均正唐草文を配する。内区文様の外周に界線を配している。頸は幅の狭い(浅頸)段頸であるが、瓦当部に女瓦を喰い込ませた(b)の方法による。頸部下端は横方向、頸部から女瓦部にかけて縦方向にそれぞれナデ調整を施している。文様構成は同じであるが、a (Fig 26-6~8)はb (Fig 26-5)に比べて文様が大柄になっている。胎土は小石・砂粒を

交じえたもので、焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。

⑨HA I 19 (Fig 26-13, PL 44-12)

范ズレがひどいため文様は不明瞭であるが、瓦当面に付着する砂の流れから唐草文と考えられる。瓦当上端をヘラ削りで斜めに面取りしている。頸は段頸形式の浅頸で、女瓦凸面広端縁を切り落した面に粘土を貼って瓦当部とした(K)の方法による。頸部下端は横方向のナデ調整、頸部から女瓦部にかけてヘラ整形の段を残している。胎土は黒色微砂粒、小石・白石の物質を含む。焼成は良好で、色調は表面灰黒色、芯部灰色を呈する。瓦当部と女瓦凹凸面に黒色微砂粒が多く付着する。

刺頭文系

⑩HA II 01 (Fig 27-1-6, PL 45-2-6)

除刻の下向き刺頭文を配したもので、刺中の鋸は太く先端が尖っている。瓦当と女瓦とを接合する方法は、女瓦広端凸面に別粘土を貼って厚くして瓦当部としたもので、(例)の方法によっている。そのため頸部の剝離したものや女瓦本体が剝離した頸部のみのものも多く認められた (Fig 27-5-6)。剝離面には接合しやすくする為のきざみ等の痕跡を残さない。接合のち、頸部下端は横方向のヘラ削りもしくはナデで調整し、頸部から女瓦部にかけては指頭匠痕や、縦方向の粗いナデ調整が行なわれている。瓦当の上部は横方向のヘラ削りを施しやや斜めに面に仕上げた例が多い。女瓦部凹面は斜め方向の糸切痕を残すが布目痕はほとんど認められない。女瓦部凸面に縦位の織叩き目を残したものもある。

本型式は刺頭文の大きさや刺先端部の広がりなどによって若干の形状差がみられる。Fig 27-3・5・6は刺頭が大きく刺先端部が広がるものやFig 27-2は前者に比べて刺頭がやや小さくなるもの、Fig 27-1は刺頭が小さく、刺中の鋸が横広になるものなどが指摘できる。¹⁶胎土は石粒等の混入物をほとんど含まない精良で、焼成はやや甘い。色調は灰白色を呈する例が多いが、部分的に灰黒色になる例もある。また二次焼成を受けてたと思われるものには、コークス状にふくれたものや極めて硬質になったものが認められた。類似した例は二階堂永福寺跡¹⁷から出土している。

⑪HA II 03 (Fig 27-7-9, PL 45-7-9)

折り曲げ技法による刺頭文字瓦である。直線的な刺頭文の凹郭内に多少ための編様をいれている。これは、女瓦の広端部を凸がわに折り曲げて瓦当部を成形する(A)の方法によっている。女瓦部凸面には指頭匠痕を多く残し、頸部に横方向のナデを施しているが不完全で曲げジワが明瞭である。瓦当上部は横方向のヘラ削りを施し斜めの面に整形しているが、女瓦部凹面の布目が瓦当面の布目痕と連続している状態が一部で認められた a (7-8) がある。これに対し、c (9) では瓦当上部の横ヘラ削りの整形が認められず、女瓦部凹面の布目がそのまま瓦当面に連続している。また、頸部・瓦当裏などは横ナデで丁寧に調整し、曲げジワを消去している。

両者は刺頭文の形状や胎土・焼成・色調などの相違が見られる。前者は刺頭文の鋸が細く先端が尖っている。胎土は石粒をあまり混入しない精良で、鉱物(雲母粒か)を含むものもある。焼成は須恵質なものや軟質なものがある。色調は青灰-灰褐色を呈する。後者は刺頭文の鋸が太く先端が

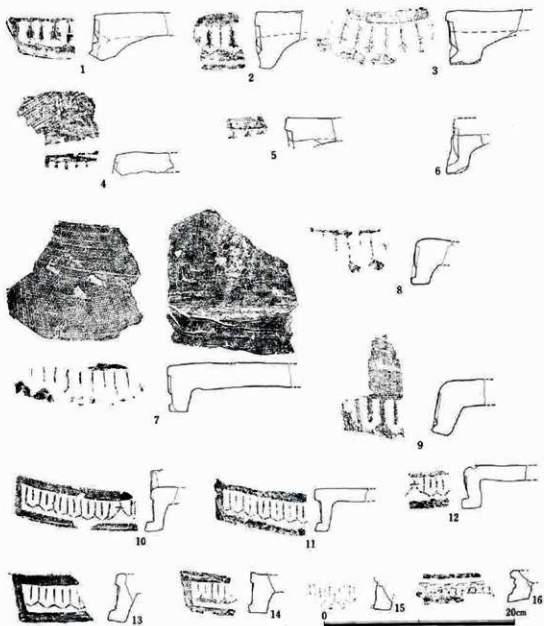


Fig 27 字瓦(2)

丸みをもつ、胎土は石粒等を含みやや粗く、焼成は良好だが、色調は表面が黒灰色、芯部が暗灰色を呈する。女瓦Ⅳ類Aと7・8の一群はその瓦質の一致や凸面の指頭痕を顕著に残す点で対をなすものと考えられる。本型式と同種の技法による刺頭文は何種類かあって各地から出土しているが、²¹⁸鎌倉では当宮境内²¹⁹および永福寺跡出土例²²⁰が知られており、また千葉地遺跡で1例²²¹報告されているにすぎない。

⑫HA II 06 (Fig 27-10-12, PL 45-10-12)

細めの凸線で描かれた下向き刺頭文を連続し、瓦当中央に裏字で「大」の文字を置いている。瓦当の上部にヘラ削りを施して斜めの面に仕上げている。瓦当部は女瓦凸面の広端縁を斜めに切り落とし、そこに別粘土を盛った、(c)の方法によるものと(b)の方法によって接合するもので、瓦当の上下区(周縁が多い)を欠損した瓦当片が目につく。頸部下端・頸部は横方向の丁寧なナデ調整を施し、女瓦部から頸部方向にヘラ整形痕が認められる。女瓦部凹面は縦方向のナデを施している。瓦当面・女瓦部凹凸面に粗い砂粒が多く付着してちる。胎土は石粒・砂粒を交じえた粗土で、焼成はやや不良で、色調は灰褐色～灰褐色を呈し、二次焼成のためか淡赤褐色になったものもある。瓦当中央の刺頭文内に「大」の文字を有する例が極楽寺²²²から出土している。

⑬HA II 07 (Fig 27-13, PL 45-13)

太めの凸線で下向き刺頭文を連続して配す。刺頭文はやや横長で文様の彫りも比較的深い。頸部下端・頸部ともに横方向の丁寧なナデで調整している。瓦当面に細かな砂粒が付着している。胎土は小石・砂粒を若干含み、焼成は良好で、色調は表面黒灰色、芯部灰白色を呈す。

⑭HA II 08 (Fig 27-14, PL 45-14)

細い凸線による下向き刺頭文を連続して表現する。文様はシャープさを欠き、彫りも浅い。瓦当面に黒色微砂粒が付着している。頸部下端・頸部は丁寧なナデ調整を行なっている。胎土は砂粒を多く交じえ、焼成良好、灰褐色を呈す。

⑮HA II 11 (Fig 27-15, PL 45-15)

細い凸線による下向き刺頭文を並列させる。刺頭文は縦長で鎗様がやや太く描かれている。瓦当面に微砂の付着が認められる。胎土は石粒を多く含む粗土、焼成はやや軟質で、灰褐色を呈す。

⑯HA II 16 (Fig 27-16, PL 45-16)

凸細線の上向き刺頭文を連続して配し、上方だけに刺頭文と接するような界線を置いている。瓦当面に黒色微砂粒が多く付着し、同様の砂粒が胎土にも含まれている。瓦当部は女瓦の凸面広端縁を切りとり、削り取った面に瓦当となる粘土を接合した(c)の方法による。焼成は良好で、色調は表面が黒灰色、芯部が灰白色を呈す。

類例は覚園寺²²³極楽寺²²⁴二階堂永福寺跡²²⁵横浜称名寺²²⁶などである。

⑰HA III 01 (Fig 26-14, PL 44-13)

半截花文字瓦で文様構成は中央に下向き、その両側に上向きの半截花文を配し、両端のみ3分の2程の花文を置いたものと考えられる。太い界線は半截花文の下端と連なり、外区内縁には間隔の広い大粒の珠文が巡っている。接合式で、女瓦広端部の凸凹がわに別粘土を盛って瓦当部とした(b)の方法により、接合の際、女瓦凸面にきざみを付けている。段頸形式の中頸で、頸部下端・頸部は丁寧なナデ調整が行なわれている。胎土は石粒等の混入物を含まない精土で、瓦当面や割れ口に白色土の流文が見らる。焼成はやや軟質で、色調は表面が灰黒色、芯部が灰白色を呈する。

表1 軒先瓦出土層位別点数表

型式	出土層位		第Ⅱ面	第Ⅲ面		第Ⅳ面		第Ⅴ面	計	備 考	
	イ	他		口	他	ハ	他				
瓦	HA I 01						1		1	類例永福寺跡	
	HA I 03				1				1		
	HA II 01			1		3	2	1	7		
	HA II 02					2	1	2	5		
	HA II 03					1		1	2		
	HA II 07			1	1		2	2	6		
	HA II 08				1	2	1	5	2	11	
	HA II 09						1		1		
	HA II 11							1	1		
	HA II 12					1			1		
	HA II 18				1				1		
	HA II 21					1			1		
	HA II 24	1		3	2	1			7		
	HA II 27	1	1	3	1	1			7		
	HA II 30					1			1		
	HA II 32					1			1		
	HA II 33	3	2	3		3			11	「ハ」「△」有	
	HA II 34	1		1					2		
	HA II 35		1	1					2		
HA II 38			1					1			
型式不明	3	2	3	2	3	2	2	1	18		
鍍瓦計	9	6	16	8	16	10	14	9	88		
瓦	HN I 01			1					1	類例永福寺跡等	
	HN I 03						1		1	割離面×伏きごみ痕	
	HN I 05	1							1	*	
	HN I 06					1			1	*	
	HN I 08	1		2	2				5	女瓦目Eと同・押き目	
	HN I 09					1			1		
	HN I 12			1					1		
	HN I 18	a		3						3	
		b		3						3	
	HN I 19					1			1		
	HN II 01						13	4	7	24	
	HN II 03	a			1	1		1	1	4	折曲作り
		c							1	1	
	HN II 06	1	1	6		2				10	瓦当中央「大」
	HN II 07				1					1	
	HN II 08	1								1	
	HN II 11	1								1	
	HN II 16			1						1	
	HN III 01					1				1	
型式不明	6		3	1				1	11		
字瓦計	11	2	19	6	6	14	5	10	73		

注 イ) 土丹敷き遺構 口) かわけ溜り遺構 ハ) 瓦溜り遺構
第Ⅱ・Ⅴ面及び他は各面上の包含層より出土。

数値(破片数)

(3) 女(平)瓦

今回の調査で出土した女瓦は、破片数にして2454点以上である。その大部分は小片で完成品は全く無く、わずかに幅を知り得た資料が数点みられたにすぎない。女瓦の分類は、主に凸面叩き目文様の種類によって縄叩き目・格子叩き目・特殊文(何種類かの文様を組み合わせた叩き目)・無文の4類に大別される。これを基幹として、さらに各類ごとに、叩き目、凹凸面の特徴・胎土・焼成・色調や細部の調整法などの相違に留意し細分を行った。この中で大型破片や特徴的な例、特異な例などを抽出して図示した。なお類別ごとの各面の出土点数を表2、層別出土比率を表3、さらに遺構別出土比率を表5に示し、側面・端面の処理法についてはあらかじめFig 29のように区別しておいた。

I類 縄叩き目

凸面に縄叩き目を有するもので、縄叩き目はほとんどが側縁に平行して施されているため、特徴が少なく明確な判別を行うことは容易でなかった。しかしながら、縄目のあり方や胎土・焼成・色調などの瓦質、調整法などの相違に留意しA-Dの4種を指摘し、あとは特異な例について記述しておくこととする。

A (Fig 30-1-9, PL 46-1-9)

胎土は石粒等の混入物をほとんど交えず精土、焼成は軟質なものが多く、須恵質の製品は皆無に等しい。色調は灰白色~灰褐色を呈する。しかし二次的な焼成を受けたものが比較的多く認められ、二次焼成を受けたため赤褐色ないし黄褐色を呈したものもある。また極端な例では、極めて硬質になって割れ口に至るまで濃い茶褐色を呈したものとふくれてコークス状になったものもある。厚さは2.2cm余りの製品が多いが、なかには3cm弱と厚手のものもある。本類は破片数にして707点出土し、女瓦総数の29%と高い比率を示し、かつI A, II A・Bとした判別不能の一群のうちにも多くが本類に含まれるであろうから、この比率はさらに高くなる。

凸面は斜め方向のわずかに弧を描いた糸切痕を深く残している。縦位に走る縄叩き目は太いものや細いもの、縄の条間の密なものや粗なものなど様々である。条は狭端縁から広端縁まで通っているもので、叩き目の原体である叩き板の長さは女瓦の全長に匹敵もしくは上回る長い

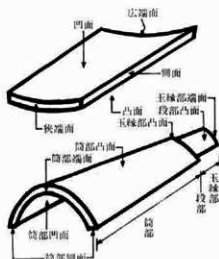


Fig 28 女瓦・男瓦部分名称

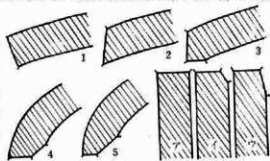


Fig 29 側面・端面の処理法模式図

ものであったと思われる。叩き目は一般的にやや浅く、付着する砂粒は叩き目によって打ち込まれている。これは叩き締めを施す前に、表面に砂を敷いたと思われる。

凹面は深い糸切痕を明瞭に残しているが、意目痕は殆んど認められない離れ砂凸面と同様の砂粒を使用しているが、付着する量は少なく集中部分とほとんどついていない部分とがあるものも多く、手で敷いたものとみられる。また凹面に布目痕を残すものに、側面にまで布目がまわり込んだものもある。凹面に縦位に走る軽い段が重複してみられる例（Fig 30-5）がある。これは恐らく無刻の細長い板（あるいは棒状のもの）によって叩き締められた痕跡と考えられる。端縁は幅の広い面取りを施すものがほとんどで Fig 29-ウの方式によっている。

側面の形態は、Fig 29-1の形状のように1回のヘラ削りを施した例が多く、同2の例も若干認められ、この中には凹面側の角をナデによって丸く仕上げたものもある。このほか側面に糸切り痕を有する例（Fig 30-3）や布目痕を残す例（同図4）がある。側面に糸切痕を残すものは、恐らく粘土板（一枚分）を得た粘土角材の整形に際し、糸切りの技法が用いられた結果であると推定される。

叩き板の端の末端処理を思わせる資料が2点認められた（Fig 30-8-9, PL 46-8-9）¹²⁷他に特異な例として、凸面に靱ガラ痕のついた例が認められた。（PL 50-6）。端面は Fig 29-イ・ウである。

B（Fig 31-1-2, PL 47-1-2）

叩き目や胎土に特徴があり、他の製品とは区別できることなどから比較的純粋に抽出し得た資料である。胎土は石粒等あまり含まない精良で、側・端面や割れ口に白色の流文状の文様がみられる。焼成はやや甘く、灰白色～灰褐色を呈する。二次焼成を受けたものがみられた。

凸面は側縁に平行に叩きを施した後に、再度斜めに叩きを加えた例や斜めまたは横方向に叩きを施したものもある。罫目自体には、太いものや細いものがあり、叩き締めは概して深めに行なわれている。凹凸面ともにAと同様の糸切痕を深く残している。凹面は布目痕を残す例と布目痕の認められない例とがあり、前者の端縁部に布の末端がはつれた状態の圧痕を残したものがある（Fig 31-1, PL 47-1）。凹凸面とも砂粒の付着はほとんど認められず、凹面に布目痕を有しない例の凹面に細かな砂粒をわずかに留めているにすぎない。

側面は多くに例が Fig 29-1の形状にヘラ削りを施しているが、側縁を幅の狭い面取りで調整を加えたものも数点みられた。端面は同図ア・イがみられ、イのように端縁を調整した例が多い。出土量は女瓦総数の3%弱と少なく、第IV・V面からの出土が目につく。

C（Fig 31-3-8, PL 47-3-8）

胎土は石粒をあまり混入しない良土、焼成は硬質と軟質と二群があり、暗灰色または青灰色・灰褐色を呈する。厚さ2～2.3cmの製品が多数を占めるが、中には2cmを割る薄手の例も認められた。このタイプは破片数にして129点出土し、女瓦総数の19%と決して多い数字とは言えないが、A・Bと同様第IV・V面を中心に比較的にかたよった出土状態である。焼成の軟質な一群中に凹凸面等の

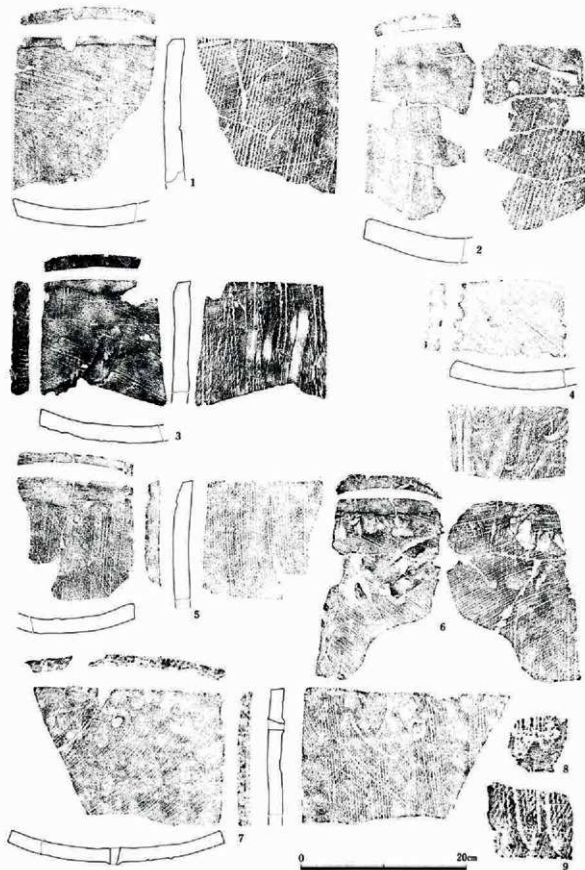


Fig 30 女瓦(1)

諸特徴を共有するが、胎土に極めて精良な粘土を使用した例が18点認められた（Fig 31-7・8，PL 47-7・8）。

凸面は側縁に平行した罫目印きが施されているが、印き目は比較的浅く、罫目の条は広端から狭端まで通るものである。罫目自体は細いもので、条間も密である。印き板は女瓦の全長に匹敵もしくは上回る長さのもので細長いものであったと推定される。凹凸面は端縁にはほぼ平行した糸切り痕を明瞭に残す例が大多数を占めている。

凹面に布目痕を残す例は極めてまれで、離れ砂と思われる粗い砂粒が多量に付着している。凸面にも同一の砂粒が多量にみられるが、砂粒が罫印きによって打ち込まれており、印きを施す以前に砂も表面に撒いたものであろう。

側面はFig 29-2の形状に1回のヘラ削りで、凹面側を鋭角に仕上げた後、側面にナデを加えている。このナデ調整は凹面側縁にまでおよんで、角を丸くおさめた例が多く認められた。このほか、同図3の断面形を呈する例も若干みられた。端面は同図Aの例が多く、ウも少しあった。

凹面に二次調整の印きを施したものが認められた。印きはほとんどの場合、無刻の細長い板（短冊形か）によってなされている（Fig 31-4・6，PL 47-4・6）。また凹面にも罫印き目を施したとと考えられる女瓦片（同図3）があり、ともに凹面調整のための凹形台の存在を示唆する資料であろう。

このタイプは、二階堂永福寺跡における創建期に使用された主要女瓦と諸特徴を共有する点が多く認められる。¹²⁸

D（Fig 31-9，PL 47-9）

胎土に石粒を多量に交じえた粗土で、焼成は良好であるが粗土のせいか脆い感じを受ける。暗灰色～灰褐色を呈する。厚さ2.5cm前後とやや厚手の製品が多い。出土点数7点も極めて少なく、Cのバリエーションとも考えてみたが、いくつかの点で相違している。

凸面は側縁に平行した印き目で、罫目自体が細くしかも印き締めは浅いほうである。凹凸面には糸切り痕が認められず、両面ともにやや粗い砂粒の離れ砂を使用している。凸面の印きに際し、砂を撒いており、印き締めによって打ち込まれている。凹面は縦方向のナデ調整を施す。布目痕は出土側には認められなかった。側面の処理はFig 29-2の形状にヘラ削りし、その後凹面の側縁角を丸味を持つようにナデ調整を施している。男瓦Ⅰ類Dに胎土・焼成等が近似している。

Ⅱ類 格子印き目

凸面に格子目の印き文様をもつもので、X状の交叉線文を呈するものや短い横線を天地におき、その間に交叉線文を入れたものも含まれている。印き目の原体は、細長い長方形形状を呈し、短冊形ないしは羽子板形の印き板でなかったかと思われる。印き締めの方法は、側縁と平行に印き板を移動しつつ施したもので、女瓦Ⅰ類・Ⅲ類と同一の方法によっている。これらを印き目の形状や胎土・焼成等の相違によりA～Eの5種を指摘したが、印き目の形状からさらに細分が可能である。なお先にも述べたように、本類のA・BはⅠ類Aと共通した諸特徴を有しており、2次のな焼成を受け

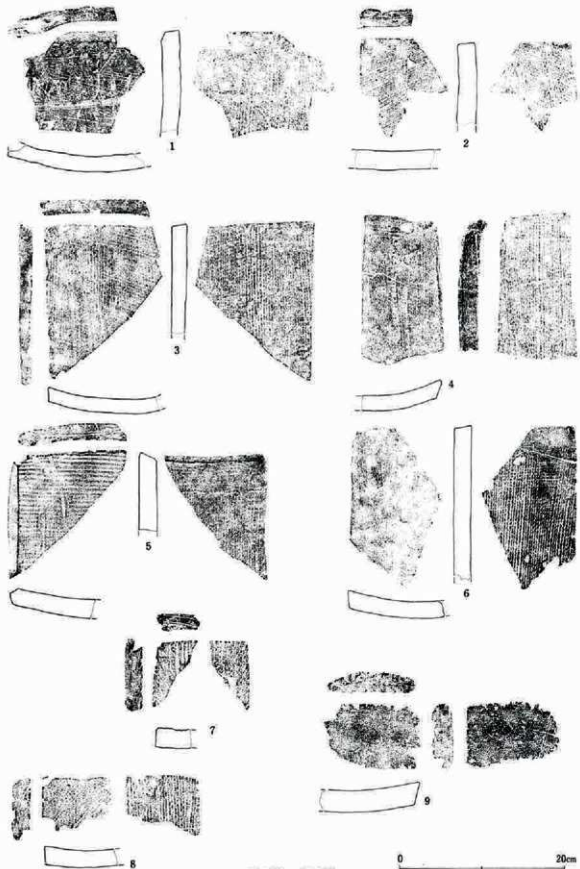


Fig 31 女瓦(2)

た例が比較的多く認められた。

叩き板に刻まれた文様を模式図にして分類したのが Fig 35 である。

A (Fig 32-1~3, PL 48-1~3)

胎土に石粒等の混入物を含まない精土、焼成は総じて軟質なもので、灰白色を呈する。出土量は 30 点を数えたにすぎない。

凸面は長方形格子の叩き目を残す。叩き目の原体は、幅 5 cm 余りの細長い長方形状を呈した叩き板で、これに互いに直交する条線を刻み、それぞれ長方形に近い凸部を刻み出したものである。叩き締めは、基本的には側縁に平行して原体を移動しつつ押しつけられている。叩き板の短辺の端と思われる例が (Fig 32-1, PL 48-1) 認められた。

凹面に布目痕を残す例はみられなかった。凹凸面に斜め方向の若干弧をもつ糸切痕で、凹面に良く残っている。離れ砂は多くの場合凸面に多く付着し、凹面は少量の使用に留まっている。使用された離れ砂は精選された細砂粒である。側面は Fig 29-1 の形状に調整している。端面は広端面がウ、狭端面がアの方式に処理している。

B (Fig 32-4~8, PL 48-4~7)

凸面に斜格子の叩き目を有するもので、叩き目の形状からさらに大きく B₁・B₂ の 2 種に分けられる。B は第 4・5 面に集中した出土状態であること、2 次的な焼成を受けた例が割合多く、瓦質・凹凸面等の諸特徴も I 類 A、II 類 A と共通している。厚さは 2~2.3 cm 余りの製品が多いが、なかには 3 cm をこえる厚手の例もある。出土量は破片数にして 295 点で、女瓦総数の 12% と比較的高い比率を示し、判別不能の I A、II A・B 群中にも含まれているので、この比率はさらに高くなる。

B₁ (Fig 32-4) はやや大きめの斜格子で、B₂ (Fig 32-6~8) は小さめの斜格子の叩き目を残す。叩き目の原体からして両者とも細分が可能である。B₁ は 234 点と圧倒的に多く出土し、B₂ は 61 点出土したにすぎない。しかしながらのちに触れるごとく B₁ と B₂ は叩き目以外の点において両者を区別する要素は何もないほど同様の特徴を備えている。したがって以下に B₁・B₂ を通じて B のもつ諸特徴を少し詳しく述べることにする。

凸面の叩き目の原体は、細長い長方形状の板に斜格子の条線を刻み、それぞれ菱形に近い凸部を刻み出したもので、ごく単純に考えるならば短冊状ないし羽子板状を呈す長い叩き板により側縁に平行して施されたものと言えよう。しかし、凸面に現われた叩き目はほとんど全てが深い糸切痕を残し、叩き目が浅くなっており、叩き板の全体を復元し得るものはない。叩き板の短辺の幅は、B₁ の原体については幅 6 cm の例 (Fig 32-4) や幅約 5 cm のものが確認できた。B₂ の原体については、幅約 4.8 cm の例 (同図 7) や幅約 5.2 cm の例 (同図 6) などを確認できた程度である。その他 B₁・B₂ とも斜格子の形状差が認められるので原体はさらに幾種類があるようである。

叩き締めの方法は、基本的には I 類と同様、女瓦側縁に平行した叩き締め方であり、重複させながら全面に行われているようである。しかし中には間隔をあけてきわめて疎な叩き締めに施したものがあつた。また粘土板を切り取る際の糸切痕が明瞭についており、叩き締めは一般的に浅くなつた

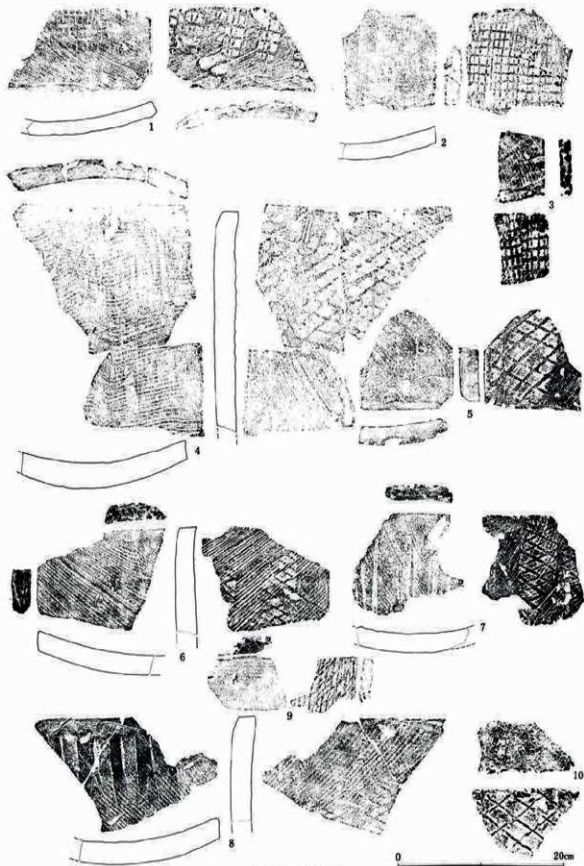


Fig 32 女瓦(3)

ている。

糸切痕はほとんどの例に認められる。糸切痕はとくに凹面に明瞭に残っているが、凸面にも叩き目同様に顕著に残している。糸切痕の方向は斜め方向の幾分弧を描くものが圧倒的に多く、端縁に平行に切られた例はほとんど見当たらない。これらは粘土角材から糸によって切り取られた粘土板を使用して作られたことは明らかであり、まれに側面に糸切り痕を有するものが認められた。²⁹

凹面には布目痕を残す例はまれで、離れ砂と考えられる細砂粒が若干付着しているにすぎない。凹面に二次調整の叩きを施したと思われるものが比較的多くの破片で認められた (Fig 32-4・7-8) 叩きはほとんどの場合、無刻の細板状具 (あるいは棒状具か) によってなされており、一見横骨痕あるいはナデ調整のように見える。しかし縦位に走る叩きは、軽い段が重複したものや互いに交叉しているものなどから判別された。また部分的にしか叩かれていないようなきわめて疎なものがある。したがって、このような凹面叩きが行われたということは、凹型調整台の存在を示唆するものであり、この凹型調整台は凹面に叩きを加え得る程度の構造を有していたのである。

離れ砂は凹凸面に細かな砂粒を使用しているが、とくに凸面に多めに砂粒が付着している。砂粒は叩きによって打ち込まれており、叩きを施す前に表面に撒いたと思われる。わた離れ砂の状態は全面に撒かれたものもあるが、部分的に集中したりほとんど付着していない部分とがあるので、手でふりかけるようにしたのかも知れない。

側面は Fig 29-1-2 の形状にヘラ削を施し、このなかには凹面側の角をナデによって丸く仕上げた例 (Fig 32-8) も若干認められる。端面は同図の形状のように端縁にヘラ削りを施した例が多い。

C (Fig 32-9)

胎土は石粒をあまり混入しない良土、焼成は硬質で、灰色を呈す。厚さは2cmを割る薄手である。

凸面には小さいが明瞭な斜格子の叩き目を残す。凹凸両面には離れ砂のやや粗い砂が認められ、とくに凹面にその痕跡が顕著である。凸面の離れ砂は叩き締めによって打ち込まれている。凹面に布目痕・糸切痕を残したものは認められなかった。側面の処理は Fig 29-2 に近い形状にヘラ削りで調整される。

わずかに3点出土したにすぎないが、胎土・焼成・色調や離れ砂の質などが女瓦Ⅰ類Cの硬質な一群に近似している。本タイプに近似した例が二階堂永福寺跡³⁰で出土している。

D (Fig 32-10, PL 48-8)

胎土は石粒を交じえた砂粒を多く含む粗土で、焼成は良好だが脆い感じを受ける。色調は灰褐色を呈し、厚さ2.5cm前後と比較的厚手の女瓦である。

凸面はやや大き目の斜格子の叩き目を残す。叩き目の原体は、幅約5.5cmで細長い長方形の叩き板と考えられる。凹面には細かな布目痕を残すが、糸切痕は認められない。この中には凹面を縦方向のナデ調整で布目痕を消去した例も認められた。側面は Fig 29-2 に近い形状を呈するが、単なるヘラ削りによる面取りではなく、ナデによって角を丸くおさめている。端面は同図Aの方式で

処理する。Ⅱ類Dは胎土の極めて粗悪な一群で、小片が5点得られたにすぎない。女瓦Ⅰ類Dに胎土に近い製品である。

E (Fig 33-1-4, PL 49-1-4)

胎土は石粒・砂粒を比較的多く交えた粗土で、焼成は軟硬質の両者がある。硬質な一群は灰～灰褐色を呈するが、軟質な一群は灰褐色ないし淡赤褐色を呈しており、火災にあったためであろうか。全長は不明であるが、先端部幅17.5cmをはかり、厚さは1.2～1.8cm程で薄手の製品が殆んどである。

凸面の叩き目は、基本的には横線と×状の組み合わせによる文様構成であるが、叩き目の形状からさらに2種に分けられる。それは凸面に横線2本を天地におき、その間に×状の交叉線文を配した例で互いの文様が接しないものと、横線と×状が接しており、一部に×状が二つ連なった状態を呈するものである。圧倒的に前者が多く、後者は32点確認されたにすぎない。しかし、これらの叩き目は多くの場合、縦方向のナデを中心に調整され不明瞭なものが大半を占める。叩き目の原体は、原則的にはおそらく短冊状の板の長面に縦位にこれらの文様を焼つか刻んだもので、横線や×状の幅を叩き板の幅と解するならば、Fig 35-⑤タイプが幅約5cm、同図⑥タイプが幅約4.6cmなどがそれぞれ復原できる。長さについては確認できる資料はないが、女瓦の全長に匹敵するか、あるいは上回る長い叩き板であったと考えられる。

凹面も全面に不規則なナデ調整を多用したものが多く認められ、布目痕を残す例は皆無に等しい。凹凸両面に使用された離れ砂は大粒砂粒の混在した粗い砂粒を多量に用いている。側面の処理はFig 29-1・2の形状にヘラ削りした後、ナデ調整を施している。このナデは凹面側縁にまで及び、角が丸く仕上げられている。端面の処理は同図イのように端縁を軽くヘラ削りしたものが多くみられた。

Ⅱ類Eは558点出土しており、女瓦総数の約23%と出土量が多く、第Ⅰ～Ⅲ面出土に限られている。宇瓦のHNⅠ08は本タイプと同じ叩き目を有する点や胎土・焼成・色調、さらに使用された離れ砂の質など極似している。またHNⅠ18・Ⅱ06なども瓦質、凹凸面の離れ砂の質等、比較的近い関係を思わせる。

F (Fig 33-5-7, PL 49-5-7)

胎土は黒色の微砂粒、石粒を交じえ、白色の物質を含むものが多く認められるのも特徴的である。焼成は良好な方で、色調は表面が灰黒～灰褐色、芯部が灰白～灰褐色を呈し、厚さ1.8～2.3cm程である。

凸面の叩き目には、縦長の斜格子や×状を連続したもの、×状に横線を組合せたものなどがあり、しかも大・小のパラエティーにとんだ斜格子文である。しかしながら、叩き目は浅いものが多くしかもナデが多用されており、叩き目の不明瞭なものが大多数を占めている。また、そのほとんどが小片で叩き目を確実に知りえた資料は極めて少ない。ただし、先にも述べたように白色の物質を含んだものや黒色の微砂粒を胎土・離れ砂に認められる点など、他資料に見られない特徴を有しているため一括してⅡ類Fとして抽出してみた。これらの細分については今後、資料の増加をまって再

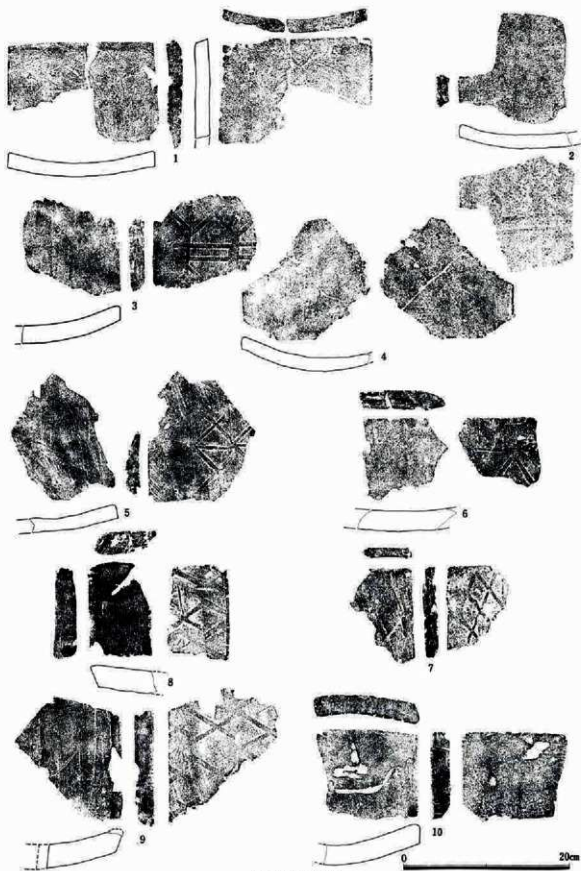


Fig 33 女瓦(4)

検討を加えることにしたい。ここでは大形破片の特徴的な例のみ挙げておくことにする。

凸面の叩き目は×状の交叉線文の天地に一条の横線を加えた例（Fig 33-5～6）、縦長の斜格子目状を呈する例（同図7）、さらに斜格子目状が横長で菱形を呈する例（Fig 34-8～9）などが認められた。叩き目の原体はFig 33-5の例が幅6cm程で、7の例が幅約6.5cmである。Fig 34-8～9の例は×状を縦位に連ねて刻み込んだ叩き板で、一個所に裏字の「大」を入れており、幅約5cmである。凹面は細かな布目痕を残す場合があるが、多くは不規則なナデ調整が多用されており、布目痕をほとんど残っていない。凹凸面ともに黒色の微砂粒が多く付着し、砂を撒いた痕跡が顕著である。

側面の処理はFig 29-2の形状にヘラ削り後、ナデ調整され凹面角を丸く仕上げている。端面は同図ア・ウの方式によるが、広端縁と狭端縁の幅にさほど開きがなく、両者のどちらにこれらの処理が施されたのか判定しづらかった。

本タイプは女瓦総数の8%程で、第Ⅲ面までの出土に限られている。

G（Fig 33-8～10, PL 49-8～10）

胎土は石粒をあまり交じえず、焼成は比較的良好で、色調は表面が灰黒色～灰褐色、芯部が灰色～灰白色を呈し、厚さ2.5～3cmと厚手の製品である。後述するように×状の斜格子目中に文字・記号を組み込んだものを含む一群である。

凸面は大きな斜格子目状の叩き目が施されているが、多くはナデ調整を施し不明瞭になるものが多く、完全に叩き目を消去したものも認められた。叩き目の原体は、細長い長方形の叩き板で、×状を縦位に連ねて刻んだものである。叩き板の幅は×状の幅と考えられる。文字・記号は裏字の「大」・「十」・「ク」や花蝶を表現したようなものもある。

凹面は丁寧なナデが全面に施され、ナデの及ばない部分には細かな布目痕を残している。凹面のナデは側縁からは側面角の部分において、縦方向の規則的なナデを施す点が特徴として挙げることができる。側面はFig 29-2に近い形状にヘラ削り後、ナデを行なっている。端面は同図ア・ウの方式である。

本タイプの斜格子目中に文字・記号を配したものや花蝶を表現したものが二階堂永福寺跡から出土しており、同一原体による叩き締め痕²³¹と思われる。また瓦質、厚さや側縁付近のナデの特徴なども極似している。

Ⅲ類 特殊文叩き目

本類は罫目・格子目以外の種々の叩き目を有する一群を一括したもので、出土点数は極めて少なく、全部合せても12点を数えたにすぎない。凸面には花菱文や三隣文などの特徴のある叩き目を有し、これらは横線や×状などの幾種類かの文様を縦位に組み合わせた叩き目痕を残すものである。しかし、小さな破片が多く全体の文様構成を把握することはできなかった。また本タイプは女瓦Ⅱ類Fと同様の黒色の微砂粒が凹凸面及び胎土にみられ、白色物質を含んだものもある。したがってⅡ類Fとした一群中にも本タイプが混入している可能性が強いと思われる。当宮境内の直会殿用地

発掘調査²³²で比較的良好な資料が多く出土しており、Fig 35-⑩・⑪の叩き目文様模式図はその資料から復元をしてみた。以下に、特徴的なものについてのみ簡単に触れることにする。

A (Fig 34-1-4, PL 49-11-14)

凸面は花菱文・横線・三鱗文・X状などの組合せの叩き目を残す破片である。1は大形の花菱文と横線、さらにX状を組み合わせたものである。

2は小形の花菱文とX状がみられるが、おそらく三鱗文や横線なども組み合わせた文様構成になると思われる。3は簡略化した花菱文で、横線もみられる。凹面は不規則なナデを多用しており、布目痕は認められない。凹凸面とも黒色の微砂粒が多量に付着し、とくに凹面にその痕跡が顕著である。側面、端面がFig 29-2の形状にし、ナデによって凹面角が丸味もっている。端面は同図A・Iの方式で処理する。

B (Fig 34-4, PL 49-4)

凸面には、縦長の斜格子目状の中に上・下向の三鱗文を凸線で表現した特異な例で、1点得られたにすぎない。凹面はナベ調整を施し、とくに側縁は丁寧な縦位のナデをおこなう。胎土・焼成・色調等Aに近似している。本タイプの報告例は知らないが、Aのような花菱文を有する例は何種類かあって鎌倉の寺院跡からの出土例が多く、²³³この他横浜称名寺²³⁴などにもみられる。

IV類 無文

凸面に叩き目痕の認められないもので、I~III類中のナデもしくはヘラなどによって調整された一群とは明らかに異なった特徴を持つものを本類とした。

A (Fig 34-5-6, PL 49-15-16)

焼成は硬・軟質の両者があり、前者は須恵質の製品がほとんどである。灰~灰褐色を呈し、胎土は石粒をあまり混入しない精土である。厚さは2~2.3cmをはかる。HN 102#の折り曲げ造り剣頭文字瓦との対応が考えられる。

凸面は指頭圧によって叩き板による作業を代行したものであり、指頭圧痕を全面に留めている。凹面は端縁に平行した糸切痕を残し、布目痕も認められる。糸切痕は比較的深く、凸面にも認められるものもある。側面の処理はFig 29-2~3の方式によっているが、3の側縁をヘラ削りした例の方が多い。端面は同図Aのように凹面端縁への調整を施さないものがほとんどである。女瓦総数のわずか1%であるが、このうち第IV・V面から8割近く出土している。

B (Fig 34-7, PL 50-1)

胎土は混入物の少なく良好であるが、焼成はやや軟質の製品が多く触れると落粉する。色調は灰色を呈する。厚さは平均2cmであるが、Fig 34-7の例も認められた。狭端縁の幅が2.5cmである。

凸面は主に縦方向のナデで調整しており、叩き目は不明である。凹面は横方向の調整痕を認めるが、部分的に密な整った布目痕を残す。側面はFig 29-2の形状の凹面角が丸くなったもので、側面も含めてナデを施す。端面は狭端面が同図I、広端面Aの方式で処理する。

(4) 男(丸)瓦

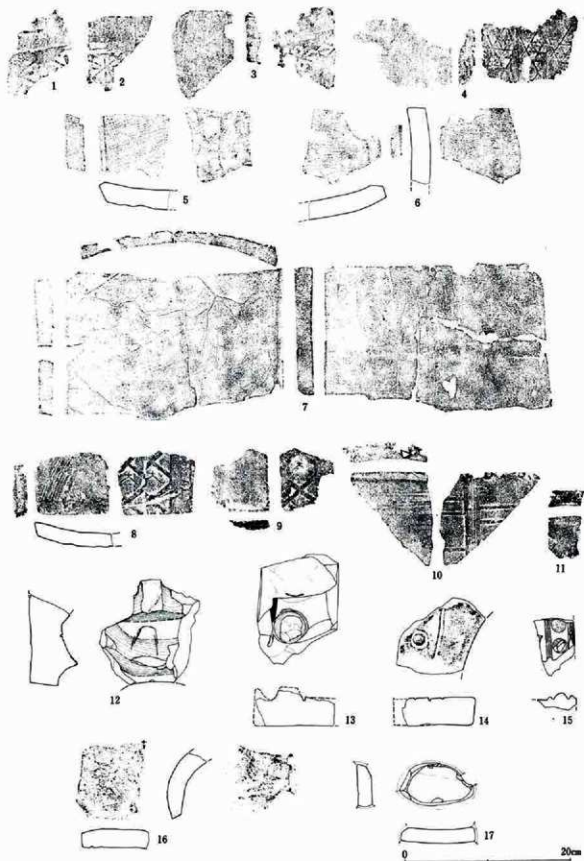


Fig 34 女瓦(5) 文字·配号瓦, 鬼瓦他

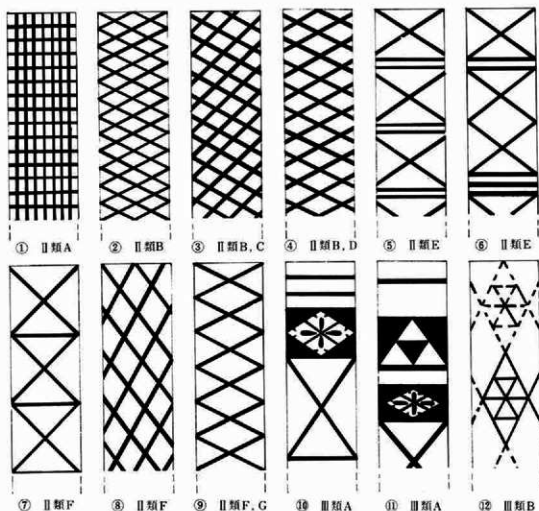


Fig 35 叩き板文様模式図 (女瓦Ⅱ類, Ⅲ類)

男瓦は破片点数にして900点余りを出土した。男瓦についても女瓦同様に基本的には叩き文様を中心として形態、手法などを加えて分類する立場をとった。しかしながら、男瓦の場合凸面の叩き締めを施したのち、ナデや削りで調整されることが多く、叩き目を残しているといっても痕跡的なものが殆んどである。したがって、女瓦のような明確な分類までは成しえないが、叩き目・胎土・焼成調整法などを加味して、女瓦との対応を考慮に入れて次のような2類9種に分類してみた。なお、類別ごとの各面の出土点数は、表2において示し、層別別出土比率が表4である。また、側面・端面の処理法についてはFig 29のように区別しておくことにする。

【類 縄叩き目】

縄叩き目を有するものであるが、殆んどの場合磨り消されており、不明瞭なものが多い。男瓦の形態・手法・胎土・焼成などにより本類を8種に細分した。

A (Fig 36-1-7, PL 51-1-5)

胎土・焼成・色調等からみて、男瓦Ⅱ類に極めて近い一群で、その他出土層位や筒部凸面端縁の

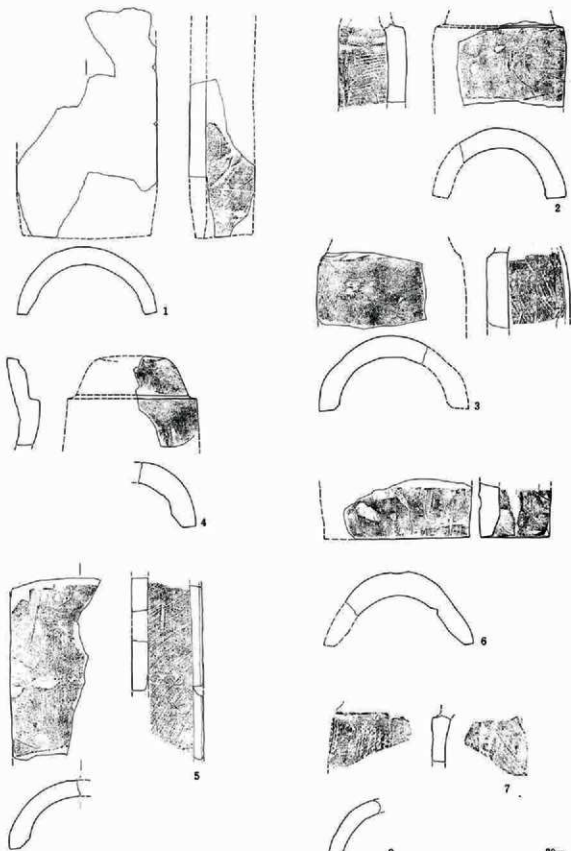


Fig 36 男瓦 (1)

特徴なども両者は共通した点を指摘できる。このうち磨り消しが完全であった破片においては男瓦Ⅱ類との判別が困難なほどであり、表2のⅠ類A・Ⅱ類とした判別不能な一群がそれである。また本タイプに二次的な焼成を受けて赤褐色を呈した例や焼けて影れたもの、曲りくねったものなどが比較的多く認められた。これらのことは女瓦のⅠ類A(罫目)とⅡ類A・B(格子目)と同じ関係にあると考えられる。したがって、本タイプと男瓦Ⅱ類は、女瓦Ⅰ類A及びⅡ類A・Bと対応するもので、おそらく同一工人集団の手によって生産されたものと推定される。

凸面の罫目叩きには、ほとんど調整されることなく叩き目を残したものと丁寧な調整を施し消しさるものがみられる。後者の方が一般的で、ナデまたは削りによって調整するが、削りの痕跡をそのまま留めた例は極めて少なく、大半はナデ調整によっている。筒部凸面の端付近を横方向に強くナデた例が多く認められ、軽い段が作り出されたものや筒部端縁がすばまった形状を呈するものもみられた。

凹面は糸切痕と布目痕を残しており、糸切痕の方向は側縁に対し斜め方向に弧を描くものがほとんどである。この顕著な糸切痕からして、粘土板を円筒状の台型に巻きつける方法が用いられたと言えよう。布目痕は細かなものが多く、布の乱れやシワが比較的少ない。男瓦製作時における布の使用法は、円筒形の台型の周囲に巻き付けられるか、袋状にしたものをかぶせて使用しあと考えられる。そうすると布の縦じ合せ痕や横じ合せ痕を残していてもいいし、この合せ目の痕跡を残すものは確率からすれば、2枚に1枚は認められるはずである。しかし、実際には粘土板の合せ目痕の場合と同様にあまり認められず、粘土板の合せ目痕にいたっては皆無に等しい。このことから考えるならば、2分割する時に合せ目のところで分割されることが多かったのかもしれない。それは側縁に近い部分に布の合せ目を残したものが若干みられたことからそのことを物語っているのではない、ろうか。

玉縁部の形状には、玉縁部と筒部の凸面の段の差がやや大きく、段部凸面は直線的な段を成すものと玉縁部と筒部凸面の差がやや小さく、段部凸面は斜めの段を成すものがある。ともに段部は丁寧な横方向のナデ調整を施している。玉縁部の中程から端部にかけてはなだらかに下がっている例が大半を占める。

側面・端面の処理法は、側面がFig 29-4のの形状に凹面側縁を狭くへら削りしたものと同図5のように幅広くへら削りしたものがみられた。筒部端面はFig 29-ウの形状のように、筒部凹面端縁を幅広くへら削りで面取りしている例が多い。大きさについては、男瓦の全長を知り得る資料はないが、幅は18cmを超えるものや16cmを割るものもみられたが、多くは16~17.5cm以内の数値におさまる。玉縁部の長さは5cm前後の例が多くみられた。筒部の厚さは2cmないし3cmで、多くは2.5cm前後である。総じて大形で厚手の製品である。

B (Fig 37-1 ~ 3, PL 50-6 ~ 8)

罫目叩きそのものには特徴がさほど認められないが、側・端面や割れ口に白色の流文状の文様をみせるのが特徴的である。胎土は石粒等あまり含まない精土で、焼成はやや甘く、灰黄白~灰褐色

を呈する。胎土・焼成・色調や端面、割れ口に流文状の文様がみられる特徴から女瓦Ⅰ類Bと極似し、量的にも少なく出土層位が第Ⅳ・Ⅴ面に集中している点なども両者のセット関係を裏付けるものと言えよう。

凸面の縄印きはほとんど削りやナデによって調整されており、痕跡的に叩き目が認められる程度で、むしろ完全に調整を加えたものの方が多く認められる。削りの痕跡をそのまま留めている例（Fig 37-1~2）が比較的多くみられた。筒部凸面の端縁近くには端面に平行した浅い凹み作り出されたものもあった。玉縁部については、出土点数が少なく資料に乏しいが、玉縁部と筒部凸面との段は比較的小さいもので直角に近いものが多いようである。

凹面はほとんど全て糸目痕が認められる。糸切痕はAと同様斜めに走るものが大半で、側縁に直角なものも皆無である。布目の精粗はまちまちで、かなり乱れたものも認められる。玉縁部は凹面の筒部と玉縁部との段差が比較的強いものが多いようである。Bはいずれも小片で長さを知り得た資料はない。推定径14.5~16.5cmで、厚さ2cm前後の製品である。

側面、端面の処理法は、側面がFig 29-4の形状で、側縁を軽くヘラ削りして面取りしている。端面は同図に近い形状で、凹面端縁のヘラ削りを軽く行ったものである。また、筒部の端縁付近はAと同様に端面に向ってなだらかに下がって薄くなっている。

C (Fig 37-4~5, PL 51-1~2)

胎土には、石粒をあまり混入しない良土で、焼成は軟・硬質の両者がみられた。前者には胎土の極めて精良な粘土を使用した製品が10点認められた。これは女瓦Ⅰ類にみられた精良土の一群と共通する要素をもっている。さらにこの他の製品に関しても胎土・焼成・色調や出土層位などの共通性が強く、両者は対を成すものと考えられる。また、胎土・焼成・色調等Ⅳ類Aにも近似している。

凸面の縄目叩きは、そのほとんどが叩き締めたのちに磨り消されており、痕跡的に認められる例が多い。玉縁部と筒部凸面の段の差が大きく、直角に近い形状を呈す。凹面は布目痕を残している。布目痕は比較的細かなものであり、筒部は乱れが少ないが、凹面段部から玉縁部に向けて絞りを残している。布の縦じ合せ痕を残す例はごくまれである。糸切痕はA・Bに比べて少なく、留めるものは側縁に直角な例が大半である。また、斜め方向に走る例も若干認められた。凹面の筒部から玉縁部に至るカーブも比較的なだらかである。厚さは1.8cm前後である。玉縁部は側縁を斜めに強く切り落したものが多くの例で認められ、4のように切り落としが弱いものは少ない。

側面の処理はFig 29-4の例が多く、5の例も若干認められた。端面の処理は同図に近い形状で、凹面端縁のヘラ削りを深くまで施している。玉縁部もすべて面取り風に一回だけヘラ削りしている。

D (Fig 37-6~7, PL 52-3~4)

胎土は砂・石粒を多量に含む粗悪なもので、焼成は良好だが、脆い感じを受ける。色調は灰褐色を呈す。厚さは2cm弱の製品で、胎土・焼成・色調等、女瓦Ⅰ類D・Ⅱ類Dに近似している。

凸面の縄印きは一部を磨り消されているものの、大部分叩き目をそのまま残している。縄目はや

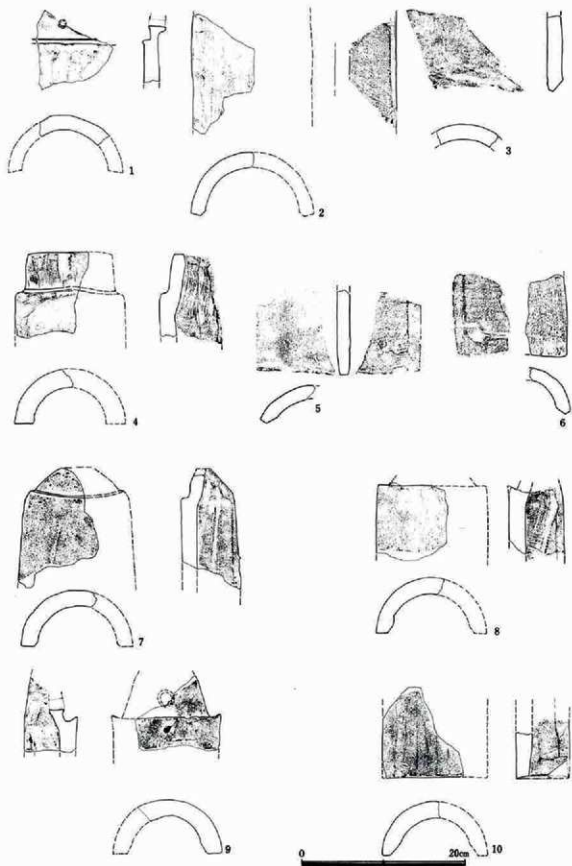


Fig 37 男瓦(2)

や細く、縄間も密なものである。筒部の玉縁部近くと端縁を横にナデたものが認められる。筒部凸面と玉縁部の段差が小さく、玉縁が短くなる。凹面は細かな布目痕を残すが、糸切痕は不明瞭である。筒部凹面と玉縁部との段差が小さくならだからである。玉縁部の側縁を斜めに強く切り落している。側面・端面の処理は、側面が Fig 29-4、端面が同図ウの方式によっている。凹面玉縁部は、Cと同様に側縁・端縁とも幾分深く削りを施している。

E (Fig 37-8-10, PL 52-5-7)

幅12.5-13.5cm程度の小ぶりな男瓦である。胎土は石粒・砂粒を比較的多く交じえた粗土で、焼成は軟・硬質の両者がある。硬質な一群は灰~灰褐色を呈するが、軟質な一群は灰橙色~淡赤褐色を呈しており、火災を思わせる資料である。

凸面の細い縄目叩きは、ほとんどがナデまたは削りによって調整され、痕跡的に認められる程度にすぎない。削りの痕跡をそのまま留めている例 (Fig 37-10) はまれで、大半がナデ調整による。筒部凸面と玉縁部との段差が大きく、直角ないし鋭角に近い形状になる。凹面はすべて布目痕が認められ、細かな布目である。糸切痕は斜めに走るものが若干みられただけは、不明瞭である。玉縁部は斜めに切り落されているが、比較的弱いものである側面の処理は Fig 29-5 の例が多く、4 の例もある。端面は同図ウの形状のように凹面端縁を深くへら削りを施している。玉縁部の側縁・端縁も幅の広いへら削りで調整している。

本タイプは小形の男瓦であること、胎土・焼成・色調や出土層位、二次焼成を受けたものなどからみて、女瓦Ⅱ類Dと対応関係にあるものと思われる。

F (Fig 38-1, PL 52-8)

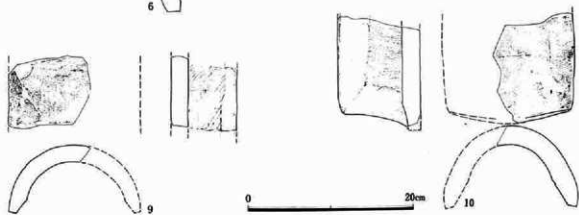
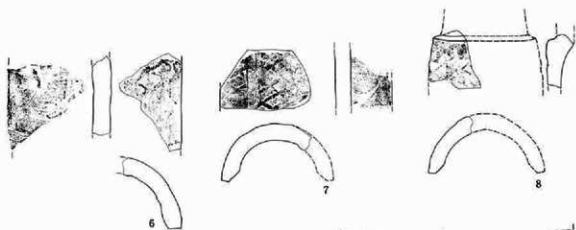
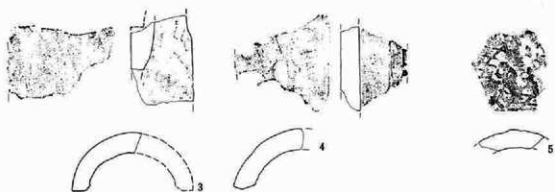
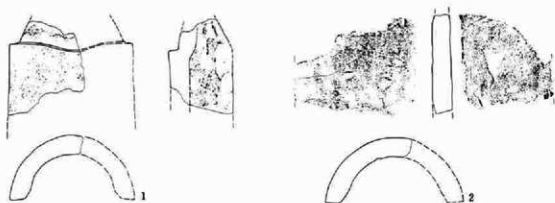
胎土に黒色の微砂粒を含み、石粒や白色の物質を混入するなど、女瓦Ⅱ類F・Ⅲ類Aと共通した特徴を有する。

凸面の縄目叩きは、ほとんどが磨り消されている。凹面は布目痕が不明瞭ながらみらる。細かな黒色砂粒が多量に付着しており、おそらく離れ砂として使用されたものと考えられる。幅は13.5-15cm程度で、厚さは2-2.5cmである。側面は Fig 29-5 の形状にへら削りを施し、端面は同図ウの方式によっている。玉縁部の側面・端面は、ともに深くへら削りし、玉縁部の側縁を斜めに切り落している。凸面の筒部と玉縁部の段の差が大きい。

G (Fig 38-2)

胎土は石粒等の混入物が少ない良土で、焼成はやや軟質で、粘性乏しく割れになど落粉する。色調は灰色~灰褐色を呈する。

凸面の縄目叩きは、ほとんど痕跡をとどめないほどに磨り消されており、無文状態に近い。凹面は細かな布目痕が認められ、部分的にナデ調整を施したものもみられた。幅は16.5-17.5cmで、厚さは2.5cm前後と厚手で大ぶりの男瓦である。側面は Fig 29-5 の形状が多く、端面は同図ウのようにへら削りを施す。玉縁部の良好な資料は出土していないが、部分的に残る破片でみると側縁・端縁とも深く面取りする。文瓦Ⅳ類Bに胎土・焼成・色調など極似し、対応が予想されるものであ



0 20cm

Fig 38 男瓦(3)

る。

H (Fig 38-3~4)

胎土は石粒等をあまり交じえず、焼成は比較的良好である。色調は表面が灰黒色、芯部が灰白色を呈し、厚さ2.5cm程の製品が多い。

凸面の織目叩きは、ナデで丁寧に磨り消しており、痕跡的に認められるにすぎない。凹面は布目痕を残すが、布目は極めて細かいもので、乱れは少ない。4の例のように布の合せ目を残したものはごくまれである。凸面の筒部と玉縁部の段の差が大きく、凹面は筒部から玉縁部に至るカーブが強段を成している。側面・端面の処理法は、側面が Fig29-4・5 の方式によるが、5の例が大半である。端面は同図ウの方式による。瓦質・凹面の布目の状態などから女瓦Ⅱ類に相似するものである。

Ⅱ類 格子叩き

凸面に格子目の叩き目を持つものを一括したく Fig38-5~8, PL52-9~12) これらは、格子目の形状差から数種に分けることも可能であるが、叩き目以外の胎土・焼成・色調や調整法等極めて共通性が強く、区別する要素はなにも見当らない。また前述したように、Ⅱ類と男瓦Ⅰ類Aは、叩き目の相違以外は共通した特徴をもっており、女瓦にみられた織目と格子目との関係に相似している。

凸面は格子目を成す条が、共に側縁に対し斜めに走り交叉するもので、格子の細かいものと大きなものがある。叩き目は、叩き締めたのちに磨り消されており、男瓦Ⅰ類Aと同様叩き目の完全にナデ調整されたものは判別不能のⅠ類Ⅱ・Ⅱ類 (Fig 38-9~10, PL52-13~14) 一群にかなり含まれているものと思われる。凸面の筒部の端縁近くに、端面と平行に横位の強いナデを施し、軽い段を作り出したものや端縁近くがすぼまった形状を呈する例が多くみられた。凹面はほとんど全て糸切痕、布目痕を残している。糸切痕は斜め方向に走るものが大半で、側縁に直角なものも若干認められた。布目痕はやや細かいが、乱れやシワが比較的少ない。布の縫じ合せ目痕を残す例は極めてまれである。

玉縁部の形状は、側縁を斜めに切り落したものが殆んどである。玉縁部と筒部凸面の段の差が大きい方で、直線的な段部を作り出すものと、この段の差が小さく、斜めの段部を作り出したものがある。ともに玉縁部の中程から端部にかけて幾分下がり気味になる。側面の処理法は Fig29-4 の方式が多く、5のように狭く削りを施したのも少量認められた。端面は同図ウの方式で、端面へのヘラ削りは深い。

(5) 鬼瓦 (Fig 34-12~15, PL50-8~10)

鬼瓦は8点出土しているが、小破片で復元できるものはなく、全容は不明である。このうち比較的残りの良い4点のみ図示した。

12は面相の詳細は不明であるが、肉高の口と鼻の一部を残している。鼻の穴は2つとも裏面まで貫通しており、鬼瓦を取り付ける際に使用したものと考えられる。裏面は深い糸切痕を残している。

表2 女瓦・男瓦出土層位別点数表

分類	出土層位		第Ⅰ面		第Ⅱ面		第Ⅲ面		第Ⅳ面		計	備考
	I	II	イ	他	口	他	ハ	他	第Ⅴ面			
										第Ⅴ面		
女	I	A	12	4	9	8	55	208	104	307	707	
		B	1		4	3	6	17	14	21	66	
		C	3	1	1	8	23	20	35	38	129	精良土18点
		D				1			2	4	7	
	II	A	1			1	4	9	8	8	30	
			2		7	3	15	18	79	36	76	234
		B			1	3	4	22	15	16	61	小
		C			1	1			1		3	
		D		1	1		3				5	
		E	98	105	279	3	73				558	
		F	105	25	43	3	24				200	
		G	1	3	4	3	14				25	文字・記号
	瓦	判別不能	2	2	9	2	24	132	33	136	340	I A, II A・B群
		III A・B	1	4	7						12	A(11), B(1)
IV		A	2		3	1		5	11	5	27	
		B	42	7	1						50	
女瓦計	267	159	366	52	248	492	259	611	2454			
男	I	A	1		3	2	16	58	35	70	188	
		B						12	3	5	20	
		C	1		2	2	12	30	3	9	59	精良土10点
		D	5	1	3		2	2	1		14	
		E	21	29	91	3	30				174	
		F	24	5	18	4	10				61	
		G	8	5	3						16	
		H	2	1	1		3				7	
	II			2			3	39	15	49	108	
		判別不能		1	1	3	14	99	29	102	250	I A, II群
		男瓦計	63	47	122	14	90	240	86	235	897	
注. イ) 土丹敷き遺構 ロ) かわらけ溜り遺構 ハ) 瓦溜り遺構 数値(破片数)												
第Ⅱ・Ⅴ面及び他は各面上の包含層より出土。												

第Ⅲ面出土。13は珠文が径3.8cmと大きく、珠文帯から外周側に向って隆起している。表面に糸切痕を深く残す。第Ⅰ面出土。14は径2.2cm程の陰刻による珠文を残し、その内側に凹線の表現で、面と珠文帯とを分ける。裏面はナデ調整され、平らに仕上げている。第Ⅰ面出土。15は外周に幅5mm、高さ4mm程の凸帯をもち、その内側に径1.7cmの珠文を表現し、さらに凸帯を置いて、珠文帯と面

とを分けている。第Ⅳ面瓦溜り遺構出土。

(6) 面戸瓦 (Fig 34-16, PL 50-7)

面戸瓦片と思われるものが第Ⅱ面から1点出土した。男瓦を焼成前に加工したもので、切り落した面は2回のヘラ削りで丁寧に仕上げている。同様の製品が境内の直会殿用地の発掘調査で多く出土した。³⁵

(7) 文字・記号を有する瓦 (Fig 34-8~11, PL 50-2~5)

8・9は凸面の斜格子目状の中に裏字の「大」が認められる。叩き目の原体は、×状を縦位に連ねた一個所に文字を刻み込んだ叩き板で叩き締められたもので、同一原体による資料と思われる。³⁶「大」の字は瑞祥的な意味を持つものであろう。女瓦Ⅱ類Eに胎土・焼成・色調や離れ砂の質等近似する。第Ⅰ面・Ⅱ面から合計4点出土し、すべて同一原体によっている。極楽寺、³⁷横浜称名寺³⁸の出土例にも叩き目中に「大」の字を配したものがみられる。また女瓦Ⅱ類G中にも「大」を配した例が認められた。

10は女瓦端面に「△」の刻印が押捺されている。女瓦端面に三角印を押したものが、極楽寺、多宝寺跡、覚園寺、二階堂永福寺跡から出土している。覚園寺出土例には男瓦の段部や筒部端面に見られるものもある。これらは瓦工房の印と思われるもので、鎌倉における瓦の生産と供給体系を知ろうと一つの手がかりとなろう。第Ⅰ面出土。

11は女瓦端面に「㊦」の径9mmほどの印が押捺されている。現在のところ類例は知らないが、竹管状のものによる刺突の印が、極楽寺・多宝寺跡・二階堂永福寺跡などで出土している。第Ⅱ面出土。

(8) 研磨痕のある女瓦片 (Fig 34-17)

女瓦片に磨き加工を施したものが、第Ⅱ面より1点出土した。女瓦Ⅰ類Aの破片を利用したもので、磨きは破片周囲と凹面に施されている。陶片やかかわらけに研磨痕を有する例は比較的多く出土しているが、瓦片によるこの種の例は少ない。

註1 直会殿用地発掘調査団・研修道場用地発掘調査団「鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書一直会殿用地発掘調査報告書・研修道場発掘調査報告書」1983年。

註2 名古屋考古学会裏山1号窯調査団「八事裏山1号窯発掘調査報告書」古代人38, 1981年、及び拙稿「鶴岡二十五坊跡出土の鎧について」鎌倉考古Noll, 1982年、八事裏山1号(H-G-83-85)窯で、焼成された蓮花文鎧瓦と同文の製品が当宮の供僧坊であった鶴岡二十五坊から1点出土している。

註3 史跡永福寺跡発掘調査団「史跡永福寺跡昭和56年度～昭和58年度発掘調査概報」鎌倉市教育委員会、1981～83年および赤星直忠「永福寺址の研究」、『中世考古学の研究』1980, 所収。

註4 鎌倉文化研究会「鎌倉—史蹟めぐり会記録—」1972年。

註5 瓦当部の径に対し接合する男瓦部の径が大きいためやや楕円形になったと思われる。

したがって瓦当面の天地より右左の径が大きい。

- 註6 赤星直忠「鎌倉たより(一)」考古学雑誌16-7, 1926年
- 註7 文字・記号瓦で述べたもの(Fig 34-10, PL 9-4)がある。註1文献、直会殿報告 Fig 23-12はHA I 18と同型式で、文様面に「△」の刻印がみられた。
- 註8 赤星直忠「鎌倉在柄天神社古瓦」考古学雑誌22-1, 1932年
- 註9 極楽寺旧境内遺跡発掘調査団「極楽寺旧境内遺跡」鎌倉市教育委員会, 1980年
- 註10 註3, 赤星氏文献
- 註11 吉田章一郎・田村晃一・荒木伸介「史跡称名寺発掘調査概報(第2次)『横浜市埋蔵文化財調査報告書(Ⅱ)』横浜市埋蔵文化調査委員会, 1972年, 第3図17・18
- 註12 註3文献
- 註13 拙稿「勝長寿院跡出土の古瓦について」
鎌倉考古No 6, 1981年
- 註14 頼朝法華堂で採集された字瓦で、現在鎌倉市旧大船支所文化財分室と横浜賀考古学会で所蔵している。「鎌倉-史蹟めぐり会記録-」鎌倉市文化研究会1972年, 写真が紹介されている
- 註15 註11文献, 第3図11, 頼朝法華堂跡出土例よりこの方が瓦当厚や瓦当文様などがより近い。
- 註16 本型式については、いずれも小片で各々の全体の様相が知られないため、剣頭文の形状差により3種を指摘しただけに留めて、すべて同一型式として扱った次第である。今後の増加資料をまわって結論としたい。
- 註17 註3文献, 昭和57年報告(図3-10), 昭和58年度報告(Fig 6-7, PL 6-7), 赤星氏文献(第5図13)
- 註18 東国では伊豆願成就院, 筑波日向遺跡, 下野毛羽寺(益子地藏院), さらに岩手県平泉の中尊寺伝大池址周辺から出土した字瓦群に認められる。
- 註19 註1文献, 剣頭文系の例としては、直会殿 Fig 22-13・15, 研修道場 Fig 61-1・2である。なお唐草文系の例としては直会殿 Fig 62-6が同一技法によって製作されたと考えられる。
- 註20 註3, 赤星氏文献・第5図14で瓦当文様において若干の差異が認められる。
- 註21 千葉市遺跡発掘調査団「千葉地遺跡跡」1982年, Fig 98-1。瓦当文様は永福寺出土例に酷似する。
- 註22 註9文献, 図24-5・6。
- 註23 覚園寺境内発掘調査団「覚園寺境内発掘調査報告書」宗教法人覚園寺1982年。上向きの剣頭文を出土しているが、瓦当文様において若干の差異が認められる。
- 註24 註9文献, 図24-21~23。このほか種々の上向き剣頭文が得られている。

- 註25 註3文献。上下に界線を配し、大小の上向きの刺頭文がみられる。
- 註26 註11文献、第3図3・4。上下に界線を配した例もある。
- 註27 凸面端縁付近に欄の末端処理を思わせる例があることは知られている（加納重文・片岡肇・谷口俊治「平安宮大極殿の発掘調査」平安京跡発掘調査報告書 第1輯、1976年）。
註1文献、研修道場 Fig 66-1～3の資料にも同様の痕跡を残した例（女瓦Ⅰ類A中）が認められた。なお、先の平安宮大極殿報告にその痕跡から羽子板状の叩き板復元図（第34図）が図示されている。
- 註28 第3文献、凸面の礎印き目、糸切り痕の方向、側面・端面の形態、凹面への二次調整、胎土・焼成・色調、使用された離れ砂の質などが明らかに共通する要素であることが指摘できる。また住田正一「鎌倉古瓦考」考古学雑誌9-2、1919年
- 註29 女瓦Ⅰ類Aと同様、粘土板を得た粘土角材の整成に際し、糸切りの技法が用いられた結果と考えられる。なお本類Aの資料中にこの技法を用いたと思われる例が、鶴岡八幡宮発掘調査団「鶴岡八幡宮一発掘の記録」鶴岡八幡宮社務所1980年の図23-⑧に認められる。
- 註30 註3文献、昭和56年度報告書（Fig 11-3）、昭和57年度報告（図3-15、昭和58年度報告（Fig 7-3）などの例を挙げられるが、永福寺跡においても出土量は少ない。
- 註31 註3文献、昭和58年度報告 Fig 8-16・18-20
- 註32 註1文献、直会報告 Fig 38- Fig 40
- 註33 例えば、極楽寺旧境内遺跡（註9文献）図26-3～4。二階堂永福寺（註3文献）昭和56年度報告 Fig 11-2、勝長寿院跡、建長寺、在柄天神社などが知られる。
- 註34 註11文献、第4図2
- 註35 註1文献、直会報告 Fig 37
- 註36 註1文献、研修道場報告 Fig 68-4も同一原体による叩き目痕と思われる。
- 註37 註9文献図25-1～3、図27-5～10で何種類かあるが、すべて本タイプとは異なる。
- 註38 註11文献、第4図4

(9) 小結

以上のように出土瓦の概要を述べて来たが、ここではこれらの瓦類の諸特徴をとりまとめ、出土層位・点数等の数量についても若干の検討を加えておきたい。

A 鍍瓦・宇瓦

軒先瓦では鍍瓦が86点、宇瓦が73点の総計161点を数えるが、型式判別不可能な小片を除くと、鍍瓦は20型式70点、宇瓦は17型式62点であった。鍍瓦は蓮花文系が2型式2点出土した他は全て三巴文を主文様としたものである。宇瓦は刺頭文系が7型式43点、唐草文系が9型式18点、そのほか半載花文系が1型式1点出土した。このうち鍍瓦のHA I 01、II 01-01・07-09や宇瓦のHN I 01・

03, II 01・03は、瓦当文様や製作技術から鎌倉時代初期に位置づけられるものと思われる。特にHA II 07-09は瓦当裏面に指頭庄痕が顕著であり、HA I 03は瓦当部を折り曲げ技法によっており、その面に陰刻の剣頭文を表現している。この巴文鏡瓦=剣頭文字瓦の類が上原真人氏のいう中央官西系のものであり、²¹京都からの新風移入であるとみなされる。東国では奥州平泉、筑波日向遺跡、下野尾羽寺、伊豆願成就院等の資料が知られ、鎌倉では12世紀末の創建年代をもつ永福寺跡の出土例が知られるのみであり、年代も平安時代末から鎌倉時代初期あたりに置くべきものであろう。また、HA II 01-03の鏡瓦は大ぶりで巴文の彫りが深く全体に力強さを感じさせる一群である。これに対応する字瓦がHA II 01とした陰刻の剣頭文で、剣中の柄が太く先端が尖って、画然と押型のあとを深く印する。この字瓦は女瓦凸面広端に別粘土を貼って瓦当部としている。

これらの軒先瓦群は表1に示すごとく、第V面上(中世基盤土層上)から出土している。第V面は中世最下層遺構面であり、鶴岡八幡宮創建時の面と考えられており、これらの軒先瓦群を創建時に近い瓦と認定しても大きなまちがいはないと思われる。さらに第IV面の瓦溜り及び包含層出土瓦は前述の軒先瓦群の他に鏡瓦がHA I 01, II 09・11がみられ、字瓦ではHA I 03が認められた。第III面以降ではこれらの軒先瓦群が極端に減少し、出土していても磨滅の著しい小破片のみとなる点かなりの時間が経過したことを示す資料であり、廃棄された瓦片が削平や整地、地業により上層にもたらされたものと考えられる。この他、出土量が少なく層位的に不安はあるが瓦当文様や製作技術等からみて、字瓦のHA I 03・05・06の唐草文とIII 01の半載花文も鎌倉時代前期頃までの所産と思われる。

なお、第IV・V面の型式ごの出土点数は鏡瓦のHA I 01-03が14点、II 07・08が17点となり主たる型式であることが知られるが、字瓦はHA II 01が24点でもっとも多く、II 03の折り曲げ技法による剣頭文が5点と対応鏡瓦に比べて少ない。しかし、同種の技法による唐草文字瓦が境内から出土することや女瓦IV類Aとした一群がこの字瓦の女瓦部の可能性もあり、対応するHA II 07・08の一群の出土量が多いこともうなづける。

これに対し第II・III面では、鏡瓦のHA II 24・27・33、字瓦のHN I 08・I 18・II 06などが主たる型式となっている。これらの瓦当文様や製作技術などをみると、巴文鏡瓦は巴の頭部がやや丸味をもち、尾部末端が隅の巴の背に順次接した状態が多くみられ、界線も細い凸線で表現されている。珠文は小粒の貧弱なものを密に配するか、またはHA II 33・34のように何個か組合せた珠文を交互に配した例になっている。字瓦の剣頭文は細い凸線によって表現され、剣先を上向きにしたHN II 16の例もある。唐草文系は文様にシャープさを欠き、彫りの浅いものとなっており、顎部の作りは段顎形式であるが、厚みのない浅顎である。

B 女瓦・男瓦

出土瓦の諸特徴の中で離れ砂が顕著に認められる技法の一つである。離れ砂は、鏡瓦・字瓦の瓦当面には范型から取出しを簡単にするために使用された例が多く認められた。女瓦への離れ砂の使用は凹凸面にみられ、用いられた砂粒には細かな精選された砂による例が殆んどであるが、粗い大

粒の混存した砂を使用した例がⅠ類C、Ⅱ類Eである。また凸面の離れ砂は叩きを施す前に表面に撒いたと思われ付着する砂が叩きによって打ち込まれた状態が一般的である。

次に凹面調整のための凹型台を示唆する資料がみられた。これは凹面に無刻の細板状の圧痕を残した女瓦Ⅰ類A・C、Ⅱ類に認められ、凸面と同一の叩き目を凹面に残した例が女瓦Ⅰ類Cにある。前者は一見、横骨状の痕跡もしくはナゲ調整のようにみえるが、縦位に走る圧痕は軽い段が重複したものや互いに交叉したものなどがあり、部分的な圧痕を残す点から判別された。叩き板はほとんどが女瓦の全長に匹敵もしくは上回る細ながい長方形状（短冊形か？）の原体を側縁に平行して移動しつつ叩き締める方法である。とくにⅡ類D～G、Ⅲ類の女瓦凸面の叩き目は、叩き板の短幅いっぱい大型の×状の交叉文を縦位に連ねたり、横線や何種類かの文様を組合せた叩き目痕を施している。また女瓦Ⅰ類A中に叩き板の縄の末端処理を思わせる資料がみられた。

男瓦は有段式の所謂玉縁付のものばかりである。凸面は縄目叩きを施したものが主体をなし、Ⅰ類Aと共通した製品であるⅡ類とした一群のみが斜格子の叩き目が認められた。叩き目の大部分はへら削りやナゲにより調整され、痕跡的に叩き目が認められる程度であり、滑らかに仕上げる工夫が意図されている。凹面は布目痕を残し、Ⅰ類Fの例は離れ砂を使用していた。また横骨からはずした粘土円筒に残る布を取るための引き紐と思われる波状にうねる縄痕が横方向にみられた。側面には分割の切り割り痕を残した例は認められず、すべてへら削り成形され、凹面側縁のみに面取りを施している。

次に出土状況についてみると、女瓦・男瓦は破片数にして3400点余り出土しているが、このうち表採等の出土層位不明の瓦片を除いた3351点の内訳は表2に示したとおり、女瓦が2454点、男瓦が897点である。これらを分類し、各面ごとにその数の比較をおこなったものが表3・4であり、主な遺構の出土率を示したのが表5である。これによると女瓦では第Ⅰ面～第Ⅴ面に縄目・格子目・特殊文・無文がそれぞれに出土しているが、出土頻度からみた場合第Ⅰ面～第Ⅲ面と第Ⅳ・Ⅴ面については著しく様相を異にしている。すなわち、第Ⅳ・Ⅴ面から出土した女瓦は縄目叩きⅠ類A～Dと格子目叩きⅡ類A・B、さらにⅡ類CやⅣ類Aがある。女瓦Ⅰ類A、Ⅱ類A・Bとした同一工人による製品と推測される一群が70%以上を占めており、表2・3・5のⅠA、ⅡA・Bとした分類困難な一群も含めると比率はさらに高くなる。従って、第Ⅳ・Ⅴ面ではⅠ類A、Ⅱ類A・Bとした一群が主たる型式となり、Ⅰ類C・D、Ⅱ類C、Ⅳ類Aは量的な出土はみられない。

ところがⅡ類D～Gの一群は第Ⅲ面以降から出土しはじめ、先の第Ⅳ・Ⅴ面に出土した一群が減少し、磨滅の著しい小破片ばかりになり、時間的経過を示すものであった。第Ⅱ面になるとⅡ類E・Fはさらに増加し、85%以上と主たる型式になっている。このことは男瓦にも共通した現象で、男瓦Ⅰ類A・Ⅱ類はさきの女瓦Ⅰ類A、Ⅱ類A・Bの第Ⅳ・Ⅴ面で主体をなした女瓦に対応する一群であり、その出土比率からもそれを裏付けている。さらに第Ⅲ面以降から出土する男瓦Ⅰ類E・Fと女瓦Ⅰ類E・Fが対応し出土比率の高さを物語っている。こうした傾向とくに遺構出土の女瓦・

表3 女瓦の層位別出土比率表

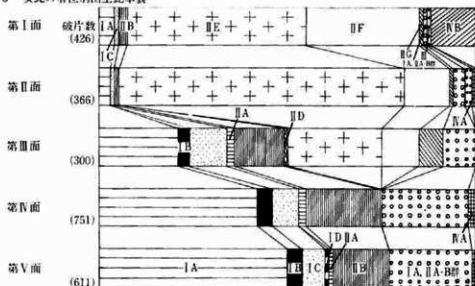


表4 男瓦の層位別出土比率表

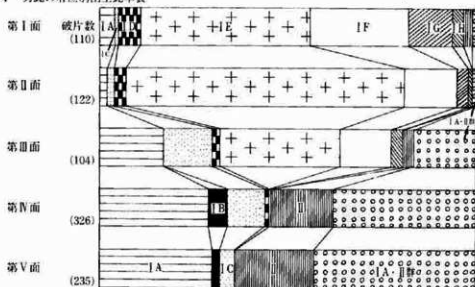
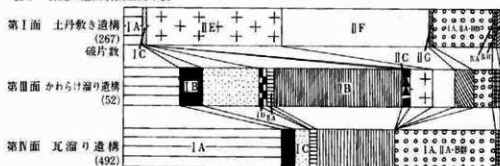


表5 女瓦の遺構別出土比率表



を比較した場合、前者が縄目叩きを中心とした文様であるのに対し、後者は大型の斜格子や花菱などの何種類かの文様を組合せた叩き目によっている。

以上、今回の調査で出土した瓦について報告してきたが、遺構に伴った資料が極めて少なく十分に検討を加えられない部分が多く、今後の課題としたい。しかし、今までほとんど報告されることのない男瓦や女瓦にも重点を置いたつもりである。その結果、十分に処理できたとは思えないが、少なくともこれらに対応する軒先瓦と推定されるものを多少なりとも指摘し得たであろう。

註1 上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」古代学研究13・14、1978年

(原 広志)

IV 金属製品

(1) 銅製品

A 三叉戟 (Fig 39-1, PL 53-7)

全長7.7・最大幅4.9・最大厚0.9cmである。Ⅱ面西土丹敷遺構南東隅出土。天部像の持物の一種である三叉戟と称される武具持物である。差し込み型で長さ2.8cmの茎部を有し、二条の沈線が首都を巡る。箭状刃部は左右及び頂部に配され、バランスのとれた二等辺三角形様の形状を呈す。先端刃部の根元辺りに僅かな鍍金痕が認められる。軸中央部は菱形状ふくらみ、左右刃部軸下縁辺はふくよかな雲形状の円みをもつ。各部の稜線は明瞭に走行し中央部では菱形に構成される。軸部断面は菱形で茎部断面は長円形となる。鋳造製。

B 釘隠 (Fig 39-4, PL 53-1)

径1.6・高0.2cm。Ⅲ面1建物跡南端部出土。5葉の蓮弁を配す小型の釘隠である。葉先の一部に僅かに鍍金痕が認められる。釘穴は0.4×0.3cmの長方形状を呈す。鋳造製。

C その他の飾金具 (Fig 39-5・7-9, PL 53-3-6)

Fig 39-5 (PL 53-4) は全長4.5cm。Ⅲ面中央部土丹版築上面出土。断面半円形の曲状製品。片面の釘穴部は円形に突出し変化をもたす。両面が正面と思われる。右断面を斜に切り取る。背面釘穴部は1ヶ所のみ確認し得る。表面は鍍金痕が顕著に残る。具体的用途は不明であるが、何らかの木製品を縁どる飾り金具であろう。鍛造製。

Fig 39-7 (PL 53-5) は残存部全長2.0cm。Ⅲ面1建物南側外で出土。不整形状を呈すが左隅部がやや方形で、断面は円筒形と思われる。表面に僅かな鍍金痕あり、鍛造製。

Fig 39-8 (PL 53-6) は全長9.9・左端部幅2.1・中位幅1.0・厚さ0.1cm・Ⅳ面覆土中出土。唐草文様を配した精緻な製品である。表面及び側面に鍍金を施す。左端部には故意に切断された形跡が認められる。中央部が雲形状に広がる延板を半分に切断したものであろう。右端部縁辺は幅狭な雲形状に切り出す。全体に0.1cm幅で縁どりが施され、内側に唐草文様が毛彫される。文様はやや形式化しているものの宝相華唐草文の系統に属し、S字状の蔓と花卉とが交互に連続する。余白

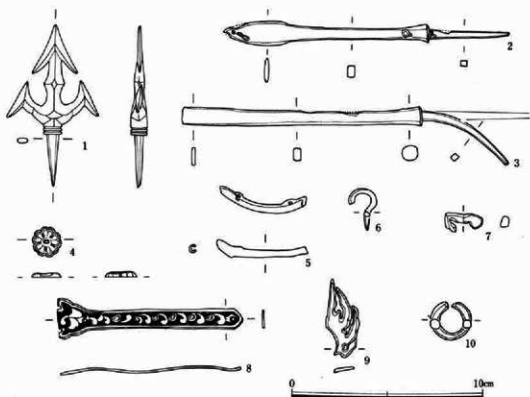


Fig 39 銅製品、鉄製品 1三叉戟、2槍ガンナ、3平ノミ、4～5・7～9飾金具、6掛金具、10環

は魚子地文で充てる。目釘穴は右端部と左側首部辺りに穿つ。左端縁辺にも目釘穴様の穿孔が認められる。用途としては、厨子や礼盤のような箱形ないしは方形木製品に伴う装飾用具が推察される。

Fig 39-9 (PL 53-3) は最大長4.1・最大幅1.8・厚さ0.2cm。Ⅳ面土丹版築面上出土。火焰光背の一部である。表裏面共に鍍金を施す。

D 錢 (Fig 40, 表 6)

本遺跡出土銭は総数54枚で調査面積に比し少量といえるが、残存状態は比較的良好で全て判読可能であった。出土遺構面はⅠ～Ⅲ面に限られる。遺構との関連で特記すべき出土状況を呈する例はないが、Ⅱ面上出土銭34枚は指銭状態で発見された (PL 8-1)。その他詳細については表 6 に記す。

E 環 (Fig 39-10, PL 53-2)

水田面上に堆積する暗黒褐色粘性砂質土層中出土。2.2×2.0cm。断面略々円形。表面の細工はやや粗雑であるが、僅かに鍍金痕が認められる。

(2) 鉄製品

A 槍ガンナ (Fig 39-2, PL 53-9)

全長15.2・刃部幅1.3・基部0.5cm。Ⅲ面土丹版築面上出土。茎部は長さ4.2cmで断面方形である。

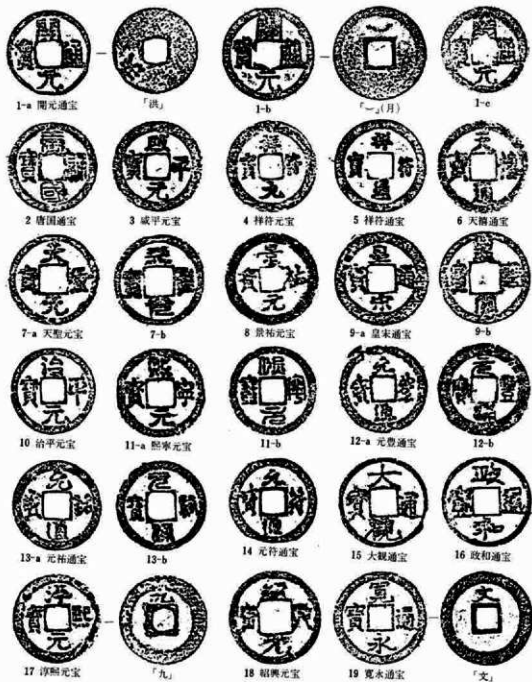


Fig 40 錢拓影

表6 錢出土一覽表

	錢種	時代	初鑄	字體	出土面			計	備考
					I	II	III		
1	開元通寶	唐	621	楷書	1	6		7	背文「洪」,「一」(月), 加工錢1
2	唐國通寶	南唐	959	篆書			1	1	加工錢1
3	咸平元寶	北宋	998	楷書		1	1	2	
4	祥符元寶	北宋	1008	楷書		2	1	3	
5	祥符通寶	北宋	1008	楷書		1		1	
6	天禧通寶	北宋	1017	楷書	1			1	
7	天聖元寶	北宋	1023	楷書 篆書		1	1 1	3	
8	景祐元寶	北宋	1034	楷書			1	1	
9	皇宋通寶	北宋	1039	楷書 篆書		3		3	
10	治平元寶	北宋	1064	楷書		2		2	
11	熙寧元寶	北宋	1068	楷書 篆書		1 4		5	
12	元豐通寶	北宋	1078	行書 篆書	1	4 3		9	加工錢1
13	元祐通寶	北宋	1086	行書 篆書	1	1 1	2	5	
14	元符通寶	北宋	1098	行書		1	1	2	
15	大觀通寶	北宋	1107	楷書	1			1	
16	政和通寶	北宋	1111	楷書		2	1	3	
17	淳熙元寶	南宋	1174	楷書	1	1		2	背文「九」
18	紹興元寶	南宋	1190	楷書	1			1	
19	寬永通寶	江戸	1636	楷書	2			2	背文「文」
				總數	9	34	11	54	

柄頭部は円形状に広がり、軸部断面は長方形状となる。刃部先端は若干欠損するが穂状形態を良く残す。

B 平ノミ (Fig 39-3, PL 53-8)

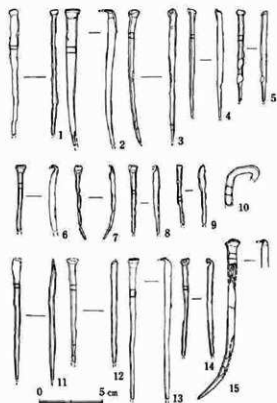
残存部推定全長18.5・刃部幅0.9・茎部最大幅0.4cm。Ⅲ面土丹飯築面上出土。茎部は湾曲し、かつ端部が欠損するが復原長6.5cmと思われる。柄頭部は円形状に広がり軸部断面は平板状に方形となる。刃部先端はやや幅広となり、鋭利な刃先部が良く残る。

C 掛金具 (Fig 39-6, PL 53-11)

全長2.4・幅0.3cm。Ⅲ面1建物南東隅出土。断面長方形状で欠損部もなく良好な残存状態を保つ。簡弁な部戸などに用いられた掛金具と思われる。

D 釘 (Fig 41, PL 53-10・12)

釘は各面から出土し特にⅢ面から得られた資料が多い。何れも断面方形で頂部の折れ曲るタイプと台形状タイプとに大別される。Fig 41-10 (PL 53-10) は掛け金具的な機能が推定される。釘資料の中で特に注目されるのはFig 41-14~15(PL 53-12-1, 12-2)の2点である。同資料は何れも墓壙と併行年代の所産と推察され、鎌倉出土の釘資料としては比較的古い時期に属するものである。



(松尾宜方)

Fig 41 鉄釘

出上面・I(1) Ⅲ(2~8) IV(9・11~12) V(10・13)

V 骨製品

(1) 筭 (Fig 42-1~2, PL 54-2~3)

Fig 42-1 (PL 54-2) はⅡ面上出土。根部残欠。幅1.6・厚さ0.3cmの獣骨製品。穿孔部は半欠する。

Fig 42-2 (PL 54-3) はⅢ面上出土。根部残欠。幅1.6・厚さ0.2cmの獣骨製品。穿孔部は円錐形状を呈す。

(松尾宣方)

VI 石製品

(1) 硯 (Fig 42-3~4・8, PL 54-4~5・9)

Fig 42-3 (PL 54-9) は幅6.4cm。Ⅰ面第4区画土丹敷遺構南拡張部出土。海部に掛る部分の断欠。硯面及び側面の研磨は円滑である。海部への傾斜面上には数条の擦痕が認められる。長方硯。濃暗紫色粘板岩製。

Fig 42-4 (PL 54-4) はⅠ面第4区画土丹敷遺構東拡張部出土。長方硯陸部断欠か。硯面円滑。黒色粘板岩製。

Fig 42-8 (PL 54-5) は厚さ2.3cm。Ⅱ面覆土中出土。長方硯陸部左下端部断欠。各面の研磨は極めて円滑である。硯面には数条の擦痕が認められる。縁部の高さは0.2cm。灰色粘板岩製。

(2) 砥石 (Fig 42-5~7・9-11, PL 54-6~8・12-14)

Fig 42-5 (PL 54-7) は幅3.0・厚さ1.0cm。Ⅰ面覆土中出土。断面長方形、砥面平滑で中央部が磨耗のため凹みを呈する。灰白色凝灰岩製。

Fig 42-7 (PL 54-13) は一辺約6cmの方形で側面及び底面は自然面を使用する。厚さ約2.0cmを側る。Ⅱ面覆土中出土。砥面平滑で一方に傾斜させる。青味掛った灰白色粘板岩製。

Fig 42-6 (PL 54-6) は長さ4.0・幅2.4・厚さ約1.3cm。Ⅰ面第1区画土丹敷遺構上面出土。平面長方形で表裏面共に使用する。砥面及び各側面は平滑であるが、上端部がやや不整形であり或いは再生利用品とも推察される。灰黒色凝灰岩製か。

Fig 42-9 (PL 54-12) は幅6.0cm。Ⅲ面方形整穴状遺構出土。砥面及び両側面平滑。底面及び上下側面は粗い自然面で、破損品の再利用が考えられる。硬質砂岩製か。

Fig 42-10 (PL 54-14) はⅢ面方形整穴状遺構出土。雲母混りの自然石材を使用した製品の断欠。砥面は使用のためかやや黒づくむ。石材不明。

Fig 42-11 (PL 54-8) は幅3.6・厚さ0.7cm。Ⅴ面土丹版築面上出土。砥面は極めて平滑で使用のため若干凹む。乳白色粘板岩製。

(3) 滑石製品 (PL 54-10-11)

PL 54-10は口縁部破片、PL 54-11は胴部破片で何れも滑石製鍋の破片と思われる。

(松尾宣方)

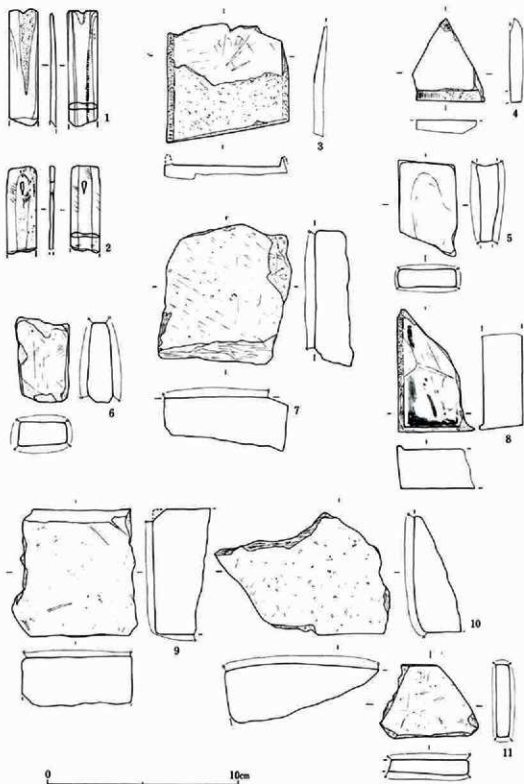


Fig 42 骨製針(1~2)・硯(3~4・8)・砥石(5~7・9~10)

Ⅶ 木製品

板草履、下駄、折敷板等各種別に記述する。法量記載は長さ、幅、厚さの順とする。

(1) 板草履 (Fig 43-44, PL 55-56)

Fig 43-1 (PL 55-1) はⅠ面第4区画土丹敷遺構東側証張面上出土。24.5・9.2・0.2cm。上下下端部共決るが下端部の方が鋭角的である。下半部の損傷が著しいが左側縁部に方形の袈りが認められる。先端部穿孔。板目材。

Fig 43-2 (PL 55-2) はⅡ面暗褐色土軟質版築面上出土。24.6・10.0・0.4cm。上下端部共に袈りその両側の頂部は上端部が円形で下端部はやや鋭角的である。右側縁部に方形の袈り。先端部穿孔。表面にワラ状の付着物が認められる。板目材。

Fig 43-3 (PL 55-3) はⅢ面方形竪穴状遺構内出土。(以下の板草履は全て同遺構内出土である。) 25.0・11.8・0.2cm。上下端部共やや浅く袈り両側頂部は円みを呈する。両側縁部は楔状に決る。先端部穿孔。板目材。

Fig 43-4 (PL 55-4) は24.2・11.4・0.3cm。上下端部共に直線状に切り取る。両側縁部は楔状に袈り先端部に穿孔。板目材。

Fig 43-5 (PL 55-5) は17.2・8.8・0.2cm。上端部は浅目に袈り下端部は直線状に切り取る。上下隅部は円やかさを呈す。両側縁部は台形状に袈る。先端部の穿孔部は比較的大きい。板目材。

Fig 43-6 (PL 55-6) は19.6・8.7・0.3cm。上下端部共に直線状に切り取る。部分的な損傷のため全容は不明だが、右側縁部に方形の袈りが認められる。先端部に穿孔。表面に芯材使用の際に付されたのか、疋痕様の条痕が残る。板目材。

Fig 43-7 (PL 55-7) は24.7・11.5・0.2cm。損傷部が多いが、平面長円形で上下端部共に決る。両側縁部は楔状に決る。先端部穿孔。板目材。

Fig 43-8 (PL 55-8) は24.4・11.3・0.3cm。平面長円形で上下端部を内湾気味に決る。両側縁部は楔状に決る。表面は略々全面に亘りワラ状の付着物が認められる。先端部に穿孔。板目材。

Fig 43-9 (PL 55-9) は24.1・11.2・0.2cm。平面長円形で上下端部共に浅く内湾気味に袈り、両側縁部は楔状に決る。先端部穿孔は右半部にのみ認められる。板目材。

Fig 43-10 (PL 55-10) は23.5・11.4・0.3cm。平面長円形だが下半部側縁はやや鋭角的に内傾する。上端部は略々直線的に切り取り、下端部を浅く決る。左側縁部に楔状の袈りが認められる。先端部に穿孔。板目材。

Fig 43-11 (PL 55-11) は24.1・11.3・0.2cm。平面長円形。上端部は僅かに浅く決られ、下端部は損傷があるものの浅い袈りが認められる。側縁部は楔状に決る。先端部に穿孔。板目材。

Fig 44-1 (PL 55-12) は24.3・11.1・0.2cm。平面長円形。上下端共浅く決るが、下端部の方がやや鋭角的である。両側縁部は楔状に決る。先端部穿孔。板目材。

Fig 44-2 (PL 56-1) は22.4・10.5・0.2cm。平面長円形。上下端部を袈り、両側縁部は方形に決る。先端部に穿孔。板目材。

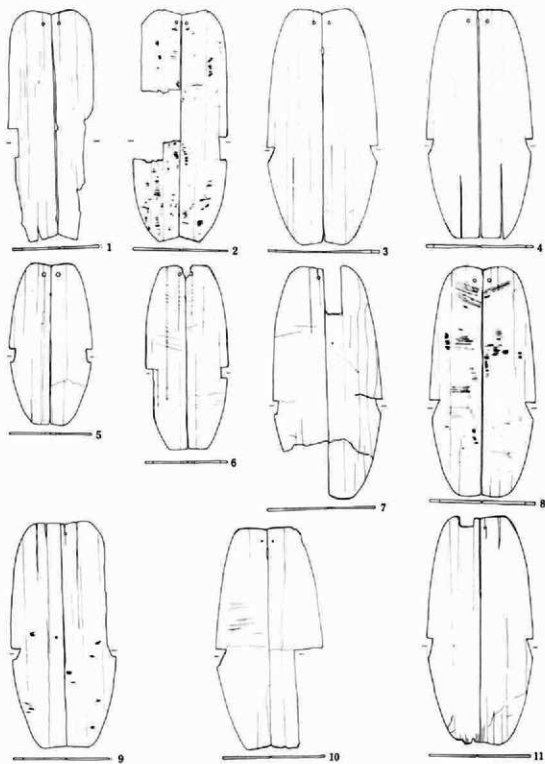


Fig 43 木製品(1) 板草履

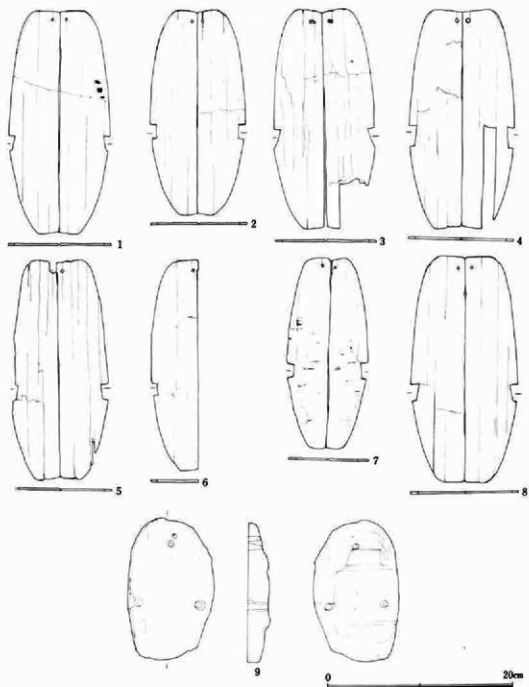


Fig 44 木製品(2)板草履(1~8)・下駄(9)

Fig 44-3 (PL 56-2) は24.0・11.1・0.2cm。平面長円形。上下端部共挟るが、下端部がやや鋭角的である。両側縁部は楔状に挟る。先端部に穿孔。板目材。

Fig 44-4 (PL 56-3) は24.1・11.4・0.2cm。平面胴張隅丸方形。上下端部をゆるやかなカーブで挟り両側縁部は台形状に挟る。先端部穿孔。板目材。

Fig 44-5 (PL 56-4) は24.0・10.6・0.2cm。平面長円形。上下端部共に浅く抉る。両側縁部は台形状に抉る。先端部穿孔。板目材。

Fig 44-6 (PL 56-5) は23.0・半載幅5.0・3.0cm。左半部のみ残存する。上下端部共に直線的に切り取る。側縁部は方形に抉る。先端部穿孔。板目材。

Fig 44-7 (PL 56-6) は20.9・8.9・0.2cm。平面はやや幅の狭い長円形で上下端部共に僅かに内湾する。両側縁部は台形状に抉る。先端部の穿孔は左右がやや歪む。表面にワラ状の付着物が認められる。板目材。

Fig 44-8 (PL 56-7) は24.6・11.8・0.2cm。平面胴張隅丸方形。上下端部は僅かに内湾気味に抉る。両側縁部は台形状に抉る。先端部に穿孔。板目材。

この他板草履芯の破片は130点以上出土するがその多くはⅢ面整穴状遺構内出土であった。

(2) 下駄 (Fig 44-9, PL 56-8)

15.6・9.2・2・3cm。木製五輪塔等の出土した暗黒褐色粘性砂質土層上面から出土。磨耗等の損傷が著しいが平面長円形の小型の連歯下駄である。前壺は台の略々中央部にあり、その右前にも小穴が穿孔される。後孔は内傾して穿たれ、台左上の拇指部分と思われる個所が凹み状を呈す。歯部は著しく磨耗し原形を留めない。台中央部は上下端部に比して肉厚である。現在のところ、当資料は鎌倉市内に於て最も古い時期の所産例である。

(3) 船形木製品 (Fig 45-1, PL 54-1)

13.7・1.7・1.0cm。Ⅲ面方形整穴状遺構底面出土。長方形木材を刀子などで削出し、ノミで内部を削り込んだものと思われる。船首内側を一段高く造り出し船尾は平坦である。造作技法は極めて粗く、舵等の付属物を備えた形跡は皆無である。船形木製品の市内出土例としては千葉地遺跡が挙げられる。

(4) 曲物底 (Fig 45-2, PL 58-8)

Ⅲ面方形整穴状遺構内出土。厚さ0.2cm程の板材を使用した、曲物底と思われる製品の断欠である。縁辺部に連繫穴らしき2対の穿孔が2箇所認められる。

(5) 折敷 (Fig 45-3~4, PL 57-1~6)

今回の調査による折敷状木製品は小破片も含めて20以上に上るが、出土箇所は全て木製五輪塔など同じく墓壇南側の窪地内に堆積した暗黒褐色粘性砂質土層上面からであった。比較的形状の良好な2点について紹介する。

Fig 45-3 (PL 57-6) は残存部最大長18.6・厚さ0.5cm。折敷断欠。各縁辺部に穿孔があり、隅部はやや丸味を帯びて整形される。

Fig 45-4 (PL 57-3) は復原可能な折敷例である。推定計測数値、18.8・15.6・0.2cm。各辺中に穿孔あり。各隅部を丸く削り出したやや長方形の製品である。

(6) 円板状木製品 (Fig 45-5, PL 58-4)

長径3.0・短径2.7・厚さ0.1cmの長円形状製品である。中央部に正方形の穿孔。

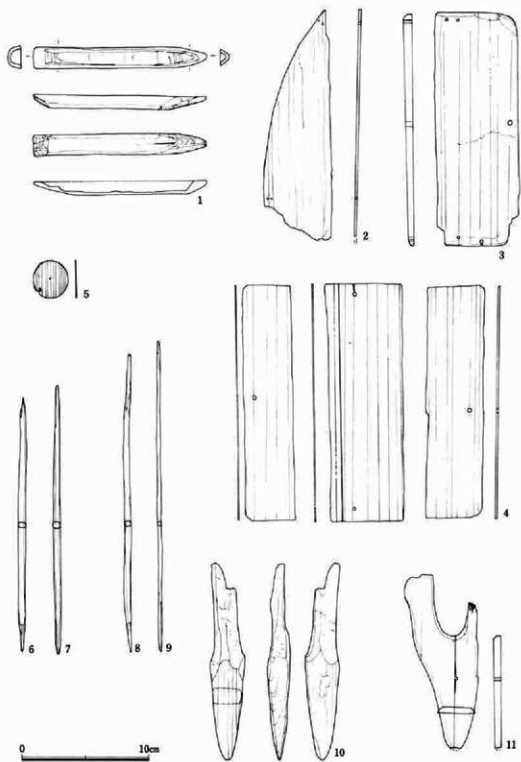


Fig 45 木製品(3) 船形(1)・曲物底(2)・折敷(3,4)・円板状(5)・箸状(6~9)・枕状(10)
・二又状(11)

(7) 箸状木製品 (Fig 45-6-9, PL 57-7-8)

いわゆる箸状木製品は鎌倉の市街地遺跡に於て最も出土例の多い遺物の一種である。本遺跡での出土数は21本と比較的小量で、その多くは目面方形堅穴状遺構内出土であるが木製五輪塔出土面の黒褐色粘性砂質土層上面からも出土した。

Fig 45-6-7 は方形堅穴状遺構内出土。Fig 45-6 は全長20.2cm。切断面台形状。Fig 45-7 は全長21.4cm。切断面は円形に近い。

Fig 45-8-9 (PL 57-7-8) は黒褐色粘性砂質土層上面出土。Fig 45-8 は全長23.8cm。切断面円形状。Fig 45-9 は全長24.7cm。切断面方形状である。

(8) 杖状木製品 (Fig 45-10, PL 60-2)

V面上発掘区西壁際出土。杖状製品の先端部である。残存部全長15.8・中位厚さ2.4cm。形状やや扁平。

(9) 二又状木製品 (Fig 45-11, PL 58-9)

全長13.8・残存部最大幅4.0・厚さ0.6cm。小田遺構上段出土。如何なる機能を有する製品か不明である。上半部右側を欠失するが形態から鑑みて左右対照と思われる。中央部に方形の穿孔あり。左側面中央部に稜を残し表裏両面共に平坦に整形する。

00 五輪塔 (Fig 46-47, PL 59-1-2)

墓壇南側深地内暗黒褐色粘性砂質土層上面から2例出土する。

Fig 46 (PL 59-1) は全長108.6・水輪厚2.1cm。火輪右軒先部を欠損する他は略々完形。空輪頂部から水輪下端部に掛けて縁辺部に幅1.7cm程の縁取りが施される。各部の計測数値を高さ、最大幅の順で下に記す(単位cm)。

空輪	19.8×21.8
風輪	14.3×22.7
火輪	14.7×21.7 (残部数値)
水輪	18.5×24.0
地輪	41.6×24.0

空輪、水輪の最大幅は各部中央部に相当し、円形状を呈す。風輪、火輪は各々台形状で、略々相似形である。地輪の丈は他の各部に比べ特に長く、下端部幅は21.0cmでやや尻すぼみである。各部間に若干の歪みはあるが、両側端部は略々垂直線上に位置する。背面は縁取りを施さず平面的に整形する。

Fig 47 (PL 59-2) は全長141.0・厚さ1.8cm。水輪を除く各部に欠損がある。板状五輪塔。各部の計測数値は下記のとおりである(単位cm、高さ、最大幅)。

空輪	23.3×21.2 (残存部)
風輪	21.1×27.8 (残存部)
火輪	19.8×30.0 (残存部)

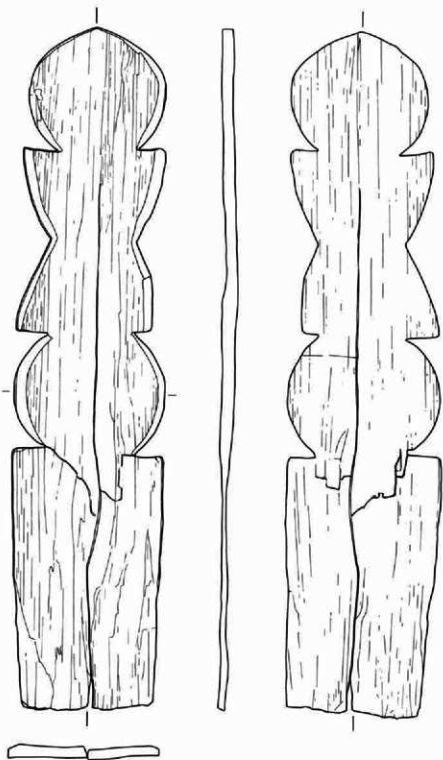


Fig 46 木製品(4) 五輪塔

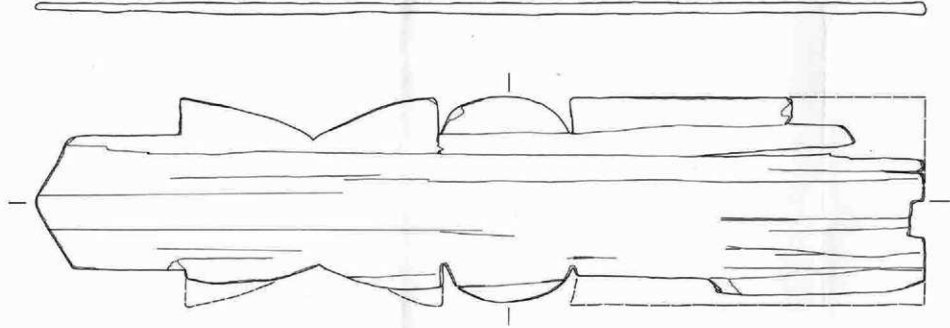


Fig 47. 木製品(5) 五線笄

水輪 20.7×32.3

地輪 36.0×31.2 (残存部)

空輪は両側端部を欠損する。風輪、火輪は共に台形状で相似形を呈する。水輪は最大幅を中央部にとるが、高さが幅に対しバランスを欠き押し潰されたような形状である。地輪は丈が長く、下端部に挟り幅6.0cm、挟り入り2.4cmの柄穴が開く。柄穴は中心線下に位置せず右側縁が中心線に沿い、下端部左側に偏る。右側縁辺部は、空輪を除く各側端部が垂直線上に位置する。恐らく左側縁辺も同様と思われ、また空輪も左右に円形状にふくらむ形状をとっていたのであろう。

⑩ 碁伝 (Fig 48-1~4, PL 59-4~7)

五輪塔と同じく窪地内暗黒褐色粘性砂質土層上面から4点出土する。計測数値は長さ、幅、奥行の順である。

Fig 48-1 (PL 59-7) は74.3・5.0・5.1cm。頂部円頭型。二条の刻線を巡らす。断面方形。左側面刻線下に釘穴状の穴が開く。下部に方形の柄穴らしき挟り部あり。下端部は杖状に尖る。荒削り整形。

Fig 48-2 (PL 59-6) は64.8 (残存部)・5.3・3.3cm。頂部円頭型。三条の刻線を巡らす。断面長方形。側面は偏平となる。下半部欠損著しく、下端部を欠失する。荒削り整形。

Fig 48-3 (PL 59-5) は63.4・5.8・4.0cm。頂部三角形型。二条の刻線を巡らす。断面長方形。側面は偏平となる。身部中央に背面まで貫通する長径13.0cmの穿孔が認められる。下端部は杖状に尖る。荒削り整形。

Fig 48-4 (PL 59-1) は50.6 (残存部)・5.3・4.8cm。頂部三角形型。三条の刻線を巡らす。断面方形。身部中央を浅く抉る。下端部欠失。荒削り整形。

⑪ 特殊製品

全て窪地内暗黒褐色粘性砂質土層上面出土である。

Fig 49-1 (PL 59-3) は復原全長115.4・頂部幅8.7・頂部厚3.0・軸部幅3.7・軸部厚3.0cm。二本に折れるが、断面長方形の棒状製品。頂部は円形状にふくらみ、上端部に欠損箇所が認められる。上方に突出部が存在したと思われる。円形頂部上端近くに深度1cm程の釘穴状の小穴が開く。同左下端部側面は4×12cm範囲で浅く抉り、対面は0.8×2.0cmで縦方向に抉る。棒軸下端部はやや欠損するが杖状を呈す。

Fig 49-2 (PL 58-5) は残存部50.4・最大幅5.0cm。左側端部に縫れ部を挟んで3ヶ所

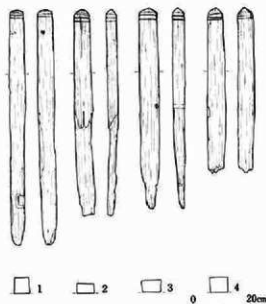


Fig 48 木製品(6) 碁伝

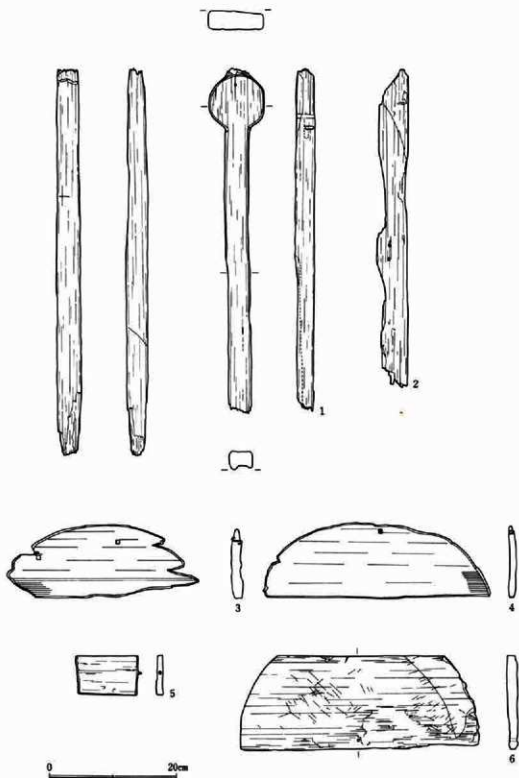


Fig 49 木製品(7) 特殊製品(1~2)・その他の製品(3~6)

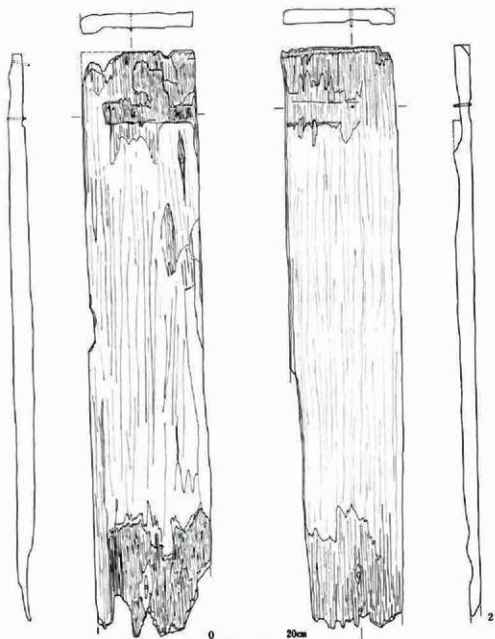
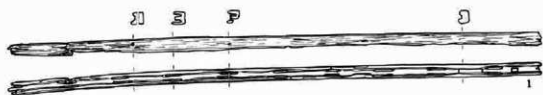


Fig 50 木製品(8) 特殊製品

のふくらみをもつ。中央部に2ヶ所の穿孔あり。五輪塔様製品の断欠か。

Fig 50-1 (PL 61-4) は残存全長140.4・幅54.5・厚さ4.5cm。厚板製品。2枚に割れる。下端部欠損。上部部近くに縦5cm、横40.0cm以上、深さ0.8cm程の柄穴状抉部が残存する。抉部内に30.0cmの間隔を置いて小釘が残存する。釘穴は略々板平面に直交する。上部部左側には柄穴内釘穴から12.5cm離れて、やや外傾状態で打ち込まれた釘が残存する。全体に荒削りに製作され、用途不明。

Fig 50-1 (PL 61-1) は全長128.4・幅2.6・高さ3.4cm。断面凹形の棧状製品。凹部の内法幅は1.7cmで、芯々間隔約13.0cmをもって一对の柄穴が10ヶ所並列する。柄穴は平均4.6×0.8cm、深さ1.5cmを計る。右側端部から数えて5ヶ所目の柄穴には上側面から打ち込まれた小釘が貫通する。同じく3ヶ所目の柄穴左側にも小釘によると思われる穿孔部が認められる。全体に荒削りに切り出し、凹部はノミで抉り出す。

03 その他の製品

何れも窪地内暗黒褐色粘性砂質土層上面出土。

Fig 49-6 (PL 58-3) は残存部数値37.7×15.0・厚さ1.5cm。桶状の曲物底と思われる。長辺部中に穿孔あり。表面左半部に擦痕が錯綜状態で走行する。

Fig 49-4 (PL 58-2) は残存部数値35.5×11.5・厚さ1.0cm。曲物底と思われる。外縁辺中に椀樹皮を半折して貫通連繫させる。

Fig 49-3 (PL 58-7)。残存部数値30.0×11.8・厚さ1.5cm。曲物底と思われる。欠損部多し。椀樹皮をS字状に折り曲げて連繫させた個所が縁辺部近くに2ヶ所認められた。

Fig 49-5 (PL 60-3) は6.3×9.3×1.0cm。やや台形状の方板材。右側辺部に木釘が突出する。

この他、鉄釘の打ち込まれたものや不整形の板材など、平板状木製遺物が出土している。

04 桶 (Fig 51-1, PL 64-1)

Ⅲ面方形壑状遺構内出土。長さ9.5・幅3.8・棟幅1.1・歯長2.7cm。歯数79本。完形品である。全面を黒色処理(大変薄い黒漆を塗っている可能性と柿渋などを塗った可能性がある)する。椀は緩く弧を描き、断面は上面やや隅丸形状で切残し部の三角部分は鋭角に近い。典型的な横櫛タイプである。

(松尾宣方)

Ⅷ 漆製品

約17点の皿・椀類の漆器製品が出土している。いずれも欠損部があり、完形品を得ることはできなかった。比較的良好なものを例示し代表とした。これらの椀、皿類は内壁あるいは外壁に朱漆による鮮やかな文様をもつものと、そうでないものとに大別できる。又、文様は手描によるもののみ

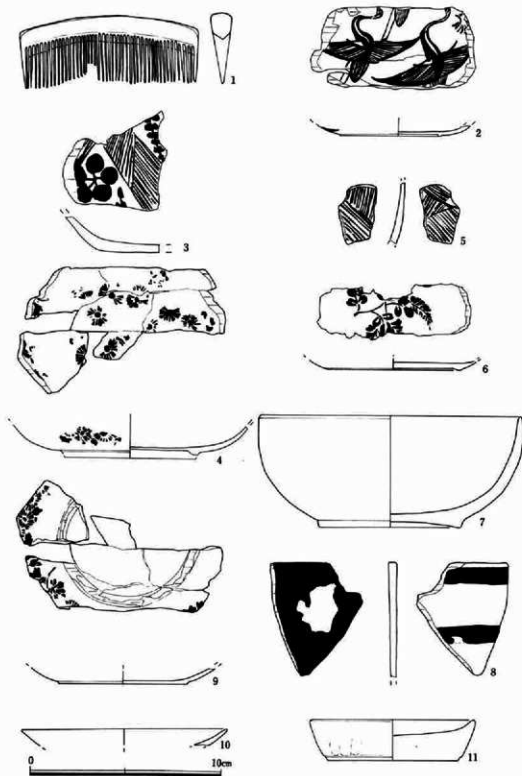


Fig 51 漆器皿・碗

で、スタンプによるものは皆無であった。製品の生地はいずれもロクロ成形によるものであるが、唯一 Fig 53-11 では外壁にカンナ削り痕と思われるものも見られた。以下、個別に簡単な記述説明を加える。

Fig 51-2, PL 63-1 は底径5.4cmを計る皿で、全面を黒漆で化粧した後、朱漆による鶴文を内外壁に描写する。嘴部が破損しているので、鶴は松喰いか否かは不明である。描写は巧みで、流れるような筆致は躍動感を感じさせる。Ⅲ面上出土。

Fig 51-3, PL 63-2 は底部を除く全面を黒漆で化粧した後、内外壁に朱漆で梅花や枝、波などを描写する。底径は不明。椀であろうか。波の細い線と梅花の広い面的描写の対比がみごとである。近似する梅花文様は、鎌倉幕府跡から出土したと伝えられる例品が「日本の美術12」第2図¹⁴などにも見られる。Ⅲ面上出土。

Fig 51-4, PL 63-6 は底径約7.0cm。椀であろうか。全体を黒漆で化粧した後、内外壁に朱漆で菊花、葉を描写する。文様については葉部を見ると外壁、底部付近より始まり、口唇部を越えて内壁に至るようである。見込み部には菊花を多く配する。

Fig 51-5, PL 63-5 は椀の口縁部破片で、全体に黒漆で化粧後、朱漆で波文を描写する。Fig 51-3の波文と似る。Ⅲ面上出土

Fig 51-6, PL 63-3 は皿で底径7.0cmを計る。全面を黒漆で化粧後、朱漆で萩の花を見込み部に描写する。萩は主幹から三本以上の枝を左右にのばし、それぞれに花と蕾を持つようである。Ⅲ面上出土。

Fig 51-8, PL 64-5 は全面を黒漆で化粧の後、内壁は全体に朱漆を塗る。外壁は幅広い2本の線を朱漆で引いている。器形は定かではないが、かなり大型の盤状容器と思われる。Ⅳ面上出土。

Fig 51-7, PL 63-7 は口径13.9cm, 底径7.6cm, 器高5.9cmを計る椀である。底部を除く全面を黒漆で化粧する。朱漆による文様は見られない。底部には三ヶ所にロクロのつめ痕と思われる凹キズが確認できる。Ⅲ面方形整穴状遺構内出土。

Fig 51-9~10, PL 64-4の9は底径6.8cm, 10は口径11.0cm。いずれも皿で底部を除いて全面を黒漆で化粧する。10は残存部全面に黒漆を塗る。いずれもⅤ面上出土。

Fig 51-11, PL 64-6 は口径8.8cm, 底径7.1cm, 器高2.2cmを計る。底面を除く全面に黒漆を施すが、他と比べると薄塗りである。生地は出土中最厚で唯一外壁にカンナ削り痕を残すものであるが、生地の成形仕上げはロクロ仕上げである。窪地内暗黒褐色粘性砂質土層出土。

PL 63-8 は黒色漆皮で製品は不明である。漆皮表面を見ると細目の布痕のようなものがあるので布のようなものに塗られた可能性が大である。Ⅳ面上出土。

PL 64-2 は荒目布に黒色漆を塗っているもので、烏帽子の一部と思われる製品である。Ⅲ面方形整穴状遺構出土。

註 「日本の美術」No12 至文堂、1967年

(杉山春信)

IX 中世以前の土器

本遺跡出土の中世以前の土器は、いずれも混入もしくは流れ込みの状態でも出土しており、明確な遺構に伴って出土している遺物はない。

以下に各時期別に出土遺物を紹介する。

(1) 弥生時代中期の土器 (Fig 52-1・2, PL 65-1)

1は大形の深鉢、胴部上半から口頸部にかけての破片。器外面及び口頸部内面には、荒いハケ目が施されている。外面の口縁部近くはハケ目の上から軽くヘラナデが施されている。調整等の特徴から弥生時代中期のものと考えられる。2は深鉢もしくは壺の底部。底径5.8cm、かなり突出した底部である。底部のみの破片であるため明確ではないが、その特徴から一応弥生時代中期後半の宮ノ台期に属するものと考えたい。

(2) 弥生時代後期～古墳時代前期の土器 (Fig 52-3～9)

3は壺の底部。底径8.8cm。底部には木葉痕を残す。胴部は底部から大きく開いて立ち上がる。内外面ともに細いハケ目が施されている。4は台付甕底部から接合部にかけての破片。外面に細いハケ目が施されている。5は台付甕脚部上半から接合部にかけての破片。脚部外面にはハケ目が施されている。6は甕の口縁部から胴部上半にかけての破片。口径35.8cm。口縁部は若干反しつつ立ち上がる。口唇部は面取りをし、外傾する面を作り出している。器内外全面及び口唇部に細いハケ目が施されている。外面の口縁直下のみ幅5mm程ナデによってハケ目が消されている。7は高坏の体部から口縁部にかけての破片。口径16.6cm。坏部はやや内彎しつつほぼ直線的に立ち上がる。外面は細いハケ目が施され、内面は丁寧にナデられている。8は高坏の脚部片。裾部が広がる器形であろう。9は手づくねの小形土器。

以上の土器は、いずれも破片で出土しており、全体を知り得ないため明確な時期比定は出来ないものの、その部分的な器形の特徴や整形等の特徴から弥生時代後期から古墳時代前期のものと考えて大過ないであろう。

(3) 古墳時代後期の土器 (Fig 52-10-18・Fig 53-19, PL 65-2～6)

10-18は土器。10-14は坏。10は略完形。口径12.2cm、器高5.4cm。口縁部はほぼ直立し、長く延びる。口縁部と体部の間には明確な稜を持つ。11は口縁部から底部近くまでを残す破片。口径13.4cm、器高4.0cm。外面に弱い稜を有し、口縁はほぼ直立する。内面は放射状に赤彩されている。12は口縁部から体部にかけての破片。口径12.0cm。外面に弱い稜を持ち、口縁はわずかに外反して立ち上がる。内面は赤彩。13は口縁部から体部にかけての破片。口径12.4cm。外面に強い稜を作り出す。口縁部は外反し、長く延びる。14は口縁部から体部下半にかけての破片。口径12.0cm。体部と口縁部の境には明確な稜を作らない。口縁部は外反する。15-17は甕口縁部の破片。ともに口縁部は「く」の字状に開き、最大径は胴部にあるものと思われる。15は口径16.2cm。口縁内側にナデ

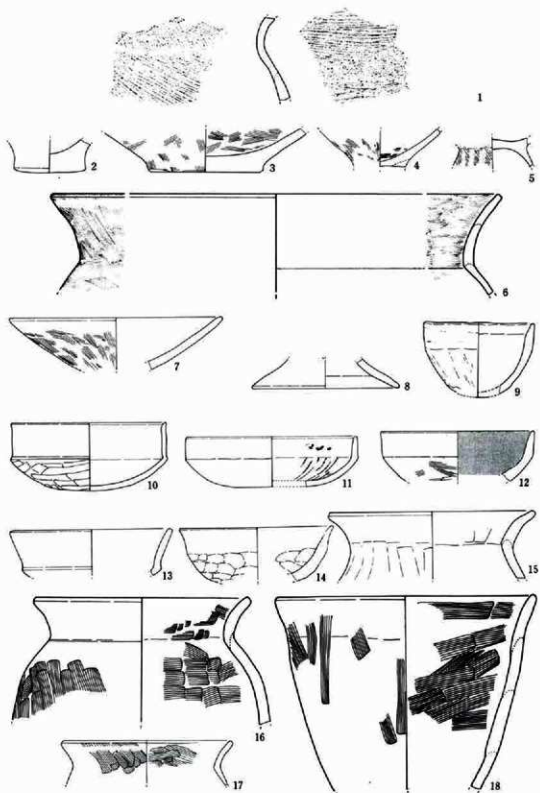


Fig 52 中世以前の土器(1)(3/4)

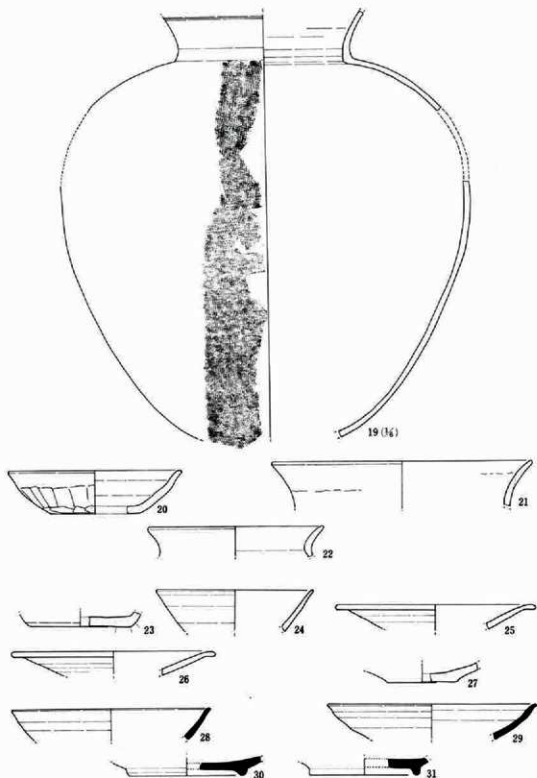


Fig 53 中世以前の土器(2)(1/5)

により若干くぼむ。16は口径16.8cm。内外面ともハケ調整が顕著である。17は口径13.2cm。18は甔。体部下半以下を欠く。口径20.4cm。口縁部はやや外に開き、体部はほぼ直線的に底部にむかう。

以上の土師器は古墳時代後期鬼高式土器の範疇に属するものであろう。

19は須恵器大甕、口縁端部と底部を欠く。口縁直下と思われる部位に断面三角形の細い凸帯が回る。肩部が強く張り、最大形を胴部上半に持つ。胴部外面は平行叩き目文を残し、内面の叩き目は磨り消されている。口縁端部を欠くため明確ではないが、概ね6世紀代の所産と考えられる。土手状遺構中出土。

(4) 奈良・平安時代の土器 (Fig 53-20-31, PL 65-7-10)

20-22は土師器、20は杯、口径13.6cm、底径7.0cm、器高3.5cm。口縁部はコノナゲ、体部は2段のヘラケズリ、底部はヘラケズリ、体部はやや開いて直線的に立ち上がり、口縁部はかるく外反する。21は甕口縁部。口径20.4cm。口縁は軽く外反する。胴部のあまり張らない器形になると思われる。22は小形甕の口縁部。口径13.8cm。土師器のうち杯20は、いわゆる相模型杯であり、法量がやや小形化しており、8世紀後半代のもと考ええてよいであろう。20、21は小片のため詳細不明であるが、胎土、整形等から奈良・平安時代のものであることは間違いないであろう。

23-27は須恵器。23は杯底部、底径8.0cm、底部は糸切り後、外周を回転ヘラケズリしている。体部と底部の境も5mm程度の幅でヘラケズリされている。24は杯口縁部。口径12.4cm。25、26ともに杯口縁部。口縁部は肥厚し外反する。底部が欠失しているが、高台が付く器形かもしれない。口径は25が15.0cm、26が15.6cm。27は杯底部。底径5.8cm。底部は回転糸切り離しのままであり、体部はかなり外に開くものと思われる。

須恵器のうち23は、底部整形の特徴から8世紀後半〔前内出2号窯式〕のもと考えられる。24は、器形から23よりいくぶん新しい時期の〔前出1号窯式〕のもと考えられるが、小片のため詳細は不明である。25-27は口縁が肥厚し外反する等の特徴を持ち、いずれもかなり新しく10世紀後半〔御殿山5号窯式〕のもと考えられる。

28-31は灰釉陶器、28は杯の口縁部片。口径15.4cm。口唇部は若干外反している。29は皿の口縁部片。口径16.4cm。口唇部が外反する。30、31は高台部片、30は高台部径8.6cm。高台はやや斜に出る。土手状遺構周辺出土。31は高台部径8.0cm、高台はやはりやや斜に張り出す。

灰釉陶器はいずれも10世紀後半から11世紀にかけての時期〔折戸53号窯式〕のもと考えられる。

以上の様に奈良・平安時代の出土土器は、8世紀後半から9世紀にかけての土師器と須恵器及び10世紀後半から11世紀にかけての須恵器と灰釉陶器という2時期に分かれることが指通できる。

(永井正憲)

第4章 総括

鎌倉国宝収蔵庫新築計画に伴う事前発掘調査により、幡岡八幡宮造営史の一端を垣間見ることができた。更に中世以前の遺構についても調査を実施し、八幡宮創建以前の様相について具体的に解明し得る手掛りを捉えることができた。以下各遺構を中心として考察を加えたい。

1 中世遺構

本調査で確認された中世遺構はⅠ～Ⅴ面に亘る地形板版築面上で検出された。Ⅰ面上に於ては6区画に及ぶ土丹敷遺構の所在が判明した。各区画によって土丹の詰め込み密度に多少の差はあるものの、全体としては極めて堅牢な構造といえる。土丹敷の中で拡張の施された形跡が、1、2、4、6区画に認められた。この内第1区画は第2区画に対する拡張面と考えられ、また第2区画の当初土丹敷面は溝を挟んで南北に並ぶ二面の正方形区画によって構成されるという全容が把握し得る例であった。この略々直下に検出されたⅡ面上の土丹敷遺構も長方形の全容が確認された。Ⅰ、Ⅱ面上に構築された土丹敷遺構については出土遺物の検討により、Ⅰ面を16世紀前半～16世紀後半、Ⅱ面を15世紀前半～16世紀初頭の所産と推定する。或いは今後の検討によってはⅠ、Ⅱ面間の年代差は更に短縮される可能性も考えられる。

土丹敷遺構の機能性については、各区画共に土丹を平坦地形するものの、礎石、柱穴等の建築遺構の所在を示唆する証左は認められず、通常の上屋施設を想定するに足りる手立は得られない。土丹敷状態を見ても、堅牢かつ平坦化されているとはいえ、その所業は如何にも急造でありまた瓦や雑多な石材等を便宜的な補強材として用いるなど、恒久的な使用を意図して構築されたとは言いがたい。考えられるのは版築面上に設置された土丹敷によるいわば台状の施設が、資材置場ないしは作業場的な機能を有することである。年代的な面からは合致する事象として、明応九年(1500)の修理、北条氏綱による天文年間(1502～1517)の造営修理及び豊臣秀吉によって計画された天正修理事業などが挙げられ¹⁾これに伴う宮緒施設と考えたい。Ⅱ面上の土丹敷遺構を同施設オリジナルと考えた場合、Ⅰ面に於ける急激な規模の膨張は、修営事業が本格的に推進された過程を物語るものであろう。

次にⅢ面上遺構についてであるが、同面の存続年代は14世紀前半～15世紀前半に至ると思われる。面上に於ては礎石、石列を伴う1建物跡、礎板等を設置する柱穴による2建物跡、そしてかわらけ、板草履等を包含する方形竅穴状遺構の3種類の遺構が検出された。1建物跡は今回の調査の中で最も社殿建築にふさわしい遺構といえる。具体的な社名ないしは寺名の推定は今後各方面に亘る検討の結果を待ちたいが、主要伽藍区域の最東部に位置する建物と考えられる。最東部と考えたのは、1建物の東方及び境内東縁辺部に該当する武徳殿発掘区域内の同面上で1建物に相当する規模を持つ建物跡の検出例が皆無であることに依る。なお、1建物跡内に検出された2石の礎石は緑石列と

の間隔から推して外廊部に伴うと考えられる。

2 建物跡は柱穴の規模に鑑みても簡易な構築物が推定されよう。両建物跡周辺のビット群の中に木の根の遺存例があり、また1建物南東隅外側から斜行する溝状遺構が極めて簡単な水路様である点などから推して、発掘区中央部は境内主要区域と外縁区域とを画すべく設定された「空間域」と想定される。Ⅰ、Ⅱ面上に資材置場的な施設が設定されたのも、「空間域」の利用になればこそその所業であったろう。同域内で検出された方形竪穴状遺構は祭祠の要素は認められず、かわらけ、板草履その他のいわば不用品投棄のために掘られた「穴」とするのが最も可能性が高い。このようなⅢ面上の「空間域」はⅣ、Ⅴ面でもその色彩を濃くし、創建当時から踏襲された計画性が窺われる。

Ⅳ面は13世紀中半から14世紀初頭に掛けての存続面と推定される。同面上の遺構としては、Ⅲ面1建物下の柱穴様ビット列及び発掘区北西隅に検出された「瓦溜り」状土壌である。1建物下位の柱穴ビット列は本格建物に移行する以前に所在した何らかが前身建物を推定させる。「瓦溜り」状土壌出土の瓦には鎌倉初期に属する製品が殆んどで、八幡宮創建当時に使用された瓦を境内造営過程の中で大量投棄した事象の結果と判断される。Ⅳ面上に木の根が遺存する事実と考え併せ、これも「空間域」故の所業であろう。

Ⅴ面は八幡宮創建時、12世紀末から13世紀前半に掛けての存続面と考えられる。湿地状の黒褐色粘質土層上を土丹や海砂を用いて地形した急造の版築面で、発掘区を斜行する脆弱な溝以外には具体的遺構を検出できない。Ⅴ面全測図中の発掘区南半部にある溝状の落ち込みは、版築面の脆弱部分を掘り下げたもので遺構を示すものではない。同面上にはこれと類似した脆弱個所が他にも見受けられる。

2 中世以前の遺構

八幡宮創建以前の当該地の地形は、数条の自然水路が大半を占める。水路は地層断面観察により、2-3回流域を変えたと判断された。数ヶ所の淀みには大量の草状植物や小枝、葉などが堆積していた。水路北西部の西側は一段高くなり平地が形成されるが、そこに発見された合葬人骨と墓壇は今回調査の中で最も注目すべき事実の一つである。墓壇構築面は、Ⅴ面構成層との間に2枚の黒色土層を挟んで堆積する暗黒褐色粘性砂質土層で、明らかに八幡宮創建以前の時期に属する。同面上から出土したかわらけ様土器（Fig 20-2-3, PL 37-2-3）及び白磁碗（PL 33-8）からみても、その時期は12世紀中頃以降と判断されよう。

埋葬人骨は森本教授の報文に詳述されるように1号人骨は成人男子、2号人骨は成人女子で何れも頭を北方向に、顔は西に向け右脇を下にし西方浄土を拝す、いわゆる毘黎位で葬られていた。墓壇南側窪地内に堆積する暗黒褐色粘性砂質土層上で、大量の植物遺物と共に黒色土に混在して出土した五輪塔、碑伝などの塔婆類も層位的観察により同年代の所産と推察される。出土状況は散乱状態を呈し、窪地内に向けて草木を伴う黒色土と共に一気に流れ落ちたかの如き様相であった。未調査のため推定に過ぎないが、検出された墓壇の西側一帯に墓域が形成され、そこに設置された塔婆

類が土砂の崩落などの原因により窪地内に流れ込んだと考えられる。墓墳上の被覆土が平面堆積し、盛土等の墓地形成状況が判然としないのも崩落に因るものであろう。

さて、窪地内から出土した各種の木製遺物の内、形状の判然とし得るのは2基の五輪塔及び4基の碑伝である。何れも荒削りな造作であるがそれだけに素朴な作風が感じられ、涅槃葬位の男女合葬墓と共に、12世紀中～後半、平安末期の鎌倉に仏教信仰を基盤にした生活様式が定着していたことを窺わせる好資料である。平安期の鎌倉については、「倭名類聚鈔」「天養記」「吾妻鏡」などに鎌倉郡内の記手や人物往来などの記述がみられる。特に源頼義が石清水八幡宮を勧請して由比若宮を建立し、その子義家の同宮修営、義家の曾孫義朝の鎌倉亀ヶ谷居住など、源氏一族と鎌倉との強い絆が平安後～末期の鎌倉を象徴する代表的な事象である。更に加えて治承四年(1180)兵を起した源頼朝に対して千葉常胤が鎌倉入城を勧めたのも、当所が要害の地であると同時に源家との縁が深いことを理由としている(「吾妻鏡」治承四年九月八日条)。

このように平安期の鎌倉は「源家ゆかりの地」というイメージに傾倒されるが、その実相については、「…所素辺鄙、而海人野叟之外、卜居之類少之…」(「吾妻鏡」治承四年十二月十日条)の如き寂寥たる様相であったとするのが唯一の記録である。吾妻鏡の当条は頼朝入鎌当時の様相の一面を描写したのであろうが、後に続く「…間巷直路、村里授号、加之家屋並堂、門扉軒軒云々」の記述が如何にも対照的に過ぎる。若宮大路造営に際して頼朝自らが監督し諸将が土石を運ぶとの仰々しい記述(寿永元年三月十五日条)もそうであるが、鎌倉に本拠を定めた頼朝の「源家ゆかりの地」復興事業を強調する余り、必要以上に入鎌以前の鎌倉を貧弱に描き過ぎた感を禁じ得ない。今回発見された涅槃葬位の合葬人骨や木製塔婆類などの葬送に関わる諸資料が、「所素辺鄙、而海人野叟之外」と称された平安末期鎌倉について、今後その実像を解明する手掛りとなることは間違いないであろう。ただ、残念ながら現在までのところ市内各所の発掘調査例をみても、平安期に関する遺構遺物の発見は少ない。これは中世の都市造営の過程で潰え去ったことに因るケースが多いためと思われるが、今後の発見例の増加が期待される。

さて、今回出土した木製五輪塔及び碑伝の推定年代は従来の遺存例に比し、²³木製品としては最古の部類となる。従来碑伝については滋賀県滋賀郡葛川明王院の元久元年(1204)銘碑伝が最古の遺存例とされていた。故石田茂作博士は碑伝について、「修験仏教独自の思想と実際とにもとづいて考察された我国独特の仏塔形式であり、本来の目的は修験者が修法の時と所と人とを後日に伝えるための記念碑的なもの」とし、木製が通常で場合によっては立木をそのまま加工して用いた場合もあり、遺存例が僅少なのもそのためと論じておられる。更に博士は、造立目的の一つに塔婆的意味を持たせることもありとされ、また年代的には平安期に既に存在していたと推定されている。博士の推論に従い、今回発見された碑伝を塔婆的目的を有した墓塔として考えてみたい。なお、墓墳周辺に小穴が多数穿たれていたが、これは碑伝などを建てた痕跡ではないだろうか。さながら鎌草子に描かれた京都東山の塚状墓地を連想させる。

五輪塔については京都市法勝寺出土鎧瓦五輪塔(保安三年・1122)を始め19例の平安期五輪塔が

知られるが、何れも瓦、石、金銅製ないしは経箱、絵画に描かれたもので木製遺存例は皆無である。木製五輪塔としての最古例は静岡県伊豆長岡郡成就院銘札（文治二年・1186）が挙げられるが、これは銘札としての特異例であり他の類例は極めて少ない。今回の出土例は筆者の浅学の範囲内に於てではあるが唯一の平安期末木製五輪塔であろう。然し乍ら形態的には各輪部の量比率等に他の平安期作例と異なる点もあり、今後の資料増加を待ちながら検討をすすめた。

ところで、治承四年に頼朝が鶴岡八幡宮の建立に着手した時点では、既に墓域も塔婆類も崩落し湿地状の黒色土層が被覆するところに変貌したと、発掘区内の土層観察の限りに於て想定される。しかし果して八幡宮建立開始時には墓域の存在は全く意識されてなかったのであろうか。少くとも伝承地として存在したであろうことが考えられないだろうか。想像に過ぎないが、源家との関りの深い平安末期の鎌倉に於て涅槃葬位を施し、各種塔婆類或いはこれに伴出した曲物、椀、著伏木製品をも供えられた被葬者を埋葬する場所は、単に自然水路傍の空地だからというだけでなく、当時の鎌倉に於ける重要墓域として定められた区域内に選定されたのではないだろうか。被葬者を軽々に源家ゆかりの人物などは推定すべきではないが、「…為崇祖宗 點小林郷之北山 構宮廟 被奉遷鶴岡宮於此所…」(吾妻鏡治承四年十月十二日条、傍点筆者)の記事から、頼朝が歴代の祖先の霊を嗣る目的をもって八幡宮を小村郷の北山に遷したことが窺れる。遷宮地の選定に際して頼朝を始め関係者の意識の中にかつての葬地を適地とした何らかの理由があったのではないだろうか。後考を待つ。

塔婆類の出土した窪地部の確認調査の結果検出された水田遺構は、関連出土遺物から推して11世紀代—12世紀初頭に属すると推察される。調査範囲に於ては自然水路域との間に土手を築き、その一部を切断して取水口となし、かつ2条の畦畔に画された3枚の水田面が確認された。水田遺構と塔婆出土面とのレベル差は約30—40cmで、水田廃棄後この辺りは窪地化したままであったと想定される。この水田遺構と吾妻鏡寿永元年（1182）四月廿四日条に記される絃巻田とは勿論年代的に台致しないが、その実在についての祖型的水田資料を得たと言えよう。

なお、自然水路区域内の最北端部（海拔約8.2m）の青灰色砂礫層について神奈川県立博物館主任学芸員松島義章氏の御教示によれば、礫中には鹹水産性の貝による侵食穴が認められ当時の海岸線の上昇が推定されるとのことである。自然水路の形成年代については、弥生、古墳期に属する遺物から奈良、平安期に属するものまで雑多に混在し判然としなが、海退に伴ないながら幾多の曲折を経て長期に亘って形成されたものであろう。

以上のように、鶴岡八幡宮境内のこの地に於ける海岸線から水田の開墾、墓地の形成そして5次に亘る八幡宮境内の造営と、一連の経過の一端を知ることができた。

註1 「鎌倉市史・社寺編」吉川弘文館発行昭和34年初版

註2 「日本佛塔・日本佛塔の研究」石田茂作 講談社発行昭和44年

寄稿文

鎌倉国宝館内出土人骨について

森本岩太郎

I はじめに

昭和57年9月、鎌倉国宝館の収蔵庫建設予定地の発掘調査に際し、発掘区の西北寄りの一隅から台葬されたと思われる土葬人骨2個体分が発見された。8B-1号人骨(男性)と8B-2号人骨(女性)とがそれである。これらの人骨はいずれも第V面下に含まれるので、両人骨の属する年代は平安時代後期～末期であると判断された。これらの人骨につき記載する。

II 人骨の出土状態

8B-1号(以下第1号人骨と略記する)と8B-2号人骨(以下第2号人骨と略記)の両人骨は同一墓境内に台葬されているようにみえる。両人骨とも北頭位右側臥伸展位で、第1号男性人骨が東側、第2号女性人骨が西側にあり、両者が並列する。

第1号男性人骨は顔面を西方に向け、顔部をやや後方に反らせている。元来は右側臥位であるが、土圧により左肩が脊柱より前方へ押し出されるようにつぶされている。その結果、左肘を前方へ突き出しているが、左肘を強く屈曲しているために、左手の位置は下頸骨付近にある。右上腕骨は体幹軸とはほぼ平行して脊柱の背後を走るが、右肘がほぼ直角位に屈曲しているために、右前腕は脊柱と交差し、右手の位置は腹部の前にある。骨盤部は保存が良くない。股関節は左右とも軽度屈曲しているが、屈曲度は左のほうがやや大きいので、左膝は右膝よりやや前にある。両膝も軽く屈曲し、左足が右足の上に一部重なっている。

第2号女性人骨は第1号人骨の前(西側)にあるが、その顔部は第1号人骨の左肩の前方にやや離れて位置し、顔面は第1号人骨の場合と同様に西方を向いている。人骨の保存が良くないので確かなことは言えないが、脊柱は軽く前かがみに湾曲しているように見える。右肩が土圧により後方に突出し、右肘頭を第1号人骨に向けて体幹から直角に突き出しているが、右肘を強く屈曲しているので右手の位置は後頭部付近にある。左肩はオトガイの前下方にあるはずであるが、土留用鉄製パイルにより破壊された。左上腕骨は体幹の前を体幹軸と平行して走るが、外展位をとる。左肘が直角に近い角度をとっているため、左肘を腹部につけて左手を体幹から前方に突き出したような姿勢をとる。股関節は両側とも軽く屈曲しているが、右のほうが屈曲度が大きいので、右膝は左大腿の前方に、また左膝は右下腿の前方にそれぞれ位置する。右膝はほぼ直角位、左膝は鈍角を呈するので、両側の下腿はほぼ平行に並列し、左足が右足のやや前方にくる。第2号人骨の両足の位置は

第1号人骨の両足のほぼ前方でやや離れたところにある。

第1号・第2号兩人骨に副葬品は見当たらない。

Ⅲ 人骨所見

(1) 第1号人骨 (PL 67~68)

第1号人骨は壮年期後半の男性人骨1個体分と思われる。骨質が厚く、比較的頑丈なつくりであるが、人骨の保存状態は必ずしも良くない。形態を保って残っているのは頭蓋の一部と歯、両側の上腕骨・桡骨・尺骨・大腿骨・胫骨・腓骨の一部だけである。

頭蓋についてみると、まず頭蓋冠の左半の一部(約14×10cm大)があり、左頭頂骨と冠状縫合を介してそれに続く前頭骨前頭鱗の各一部分からなっている。冠状縫合は内板が完全に閉鎖しているが、外板がほとんど閉じずに残っている。次に保存不良な頭蓋冠右半の一部(16×11cm)がある。この骨片の前端は右眼窩上縁、後端は右下項線と項平面、上端は右側頭線のやや上方、下端は右側頭骨の乳様突起と下顎窩などからなっている。乳様突起の膨隆および下顎窩は大きく、下項線の発達が良い。ほかに接合不能な頭蓋冠の小破片が10個余りと右側頭骨錐体片が1個ある。顔面頭蓋で残っているのは左右の上顎骨歯槽突起とそれに属する歯の一部、下顎骨体とそれに付属する歯の一部だけである。上・下の歯列弓は側方から土圧により圧迫されて縦長の放物線状に変形している。残っている歯および歯槽の状況は次のとおりである。

8 × × 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 ● × ×
8 ● 6 5 4 3 2 ×	× × 3 4 5 6 7 8

ただし、数字は残存永久歯、●印は歯槽閉鎖、×印は欠損のため状況不明であることをそれぞれ示す。歯の咬合様式は缺状咬合型で、咬耗度は $\underline{8}$ と $\overline{8}$ が Broca の第一度であり、他の残存歯は同第2度である。[6 および 7] の歯槽閉鎖はおそらく齧触によるものと思われるが、残存歯に齧触は認められない。

上肢骨についてみると、上腕骨は左右とも骨体の大部分が残っている(長さ左19cm, 右22cm)。三角筋粗面が良く発達している。上腕骨中央における横断示数は左81.8・右82.6であり、中央周径は左右とも69mm, 最小周径は左66mm・右67mmである。桡骨は左右とも骨体中央部が残っている(左12cm, 右10cm)。骨体横断示数は左64.7・右70.6であり、骨体中央周径は左右とも42mmである。尺骨も骨体が残っているが、右のほうが保存が良い(左6cm, 右16cm)。右尺骨の骨体横断示数は87.5である。

下肢骨についてみると、大腿骨は左右とも骨体が残っているが、右のほうが保存が良い(左22cm, 右27cm)。殿筋粗面および粗線は良く発達している。骨体上部の横断示数は左右とも71.4で超大型に属する。右骨体横断示数は110.7で、ピラステルの形成は中等度であり、右中央周径は93mmである。

脛骨も左右の骨体の大部分が残っている。右のほうが保存が良い。脛骨体横断形は左右とも Hrdlicka の第Ⅳ型(菱形)に属するが、前縁は比較的鋭い。右脛骨の栄養孔における骨体横断示数は59.0、また同中央部における骨体横断示数は59.5をそれぞれ示し、いずれも平脛型に属する。骨体周径は栄養孔部で96mm、中央部で90mmである。ヒラメ筋線は良く発達している。

この人骨に外傷や病変は見られない。

(2) 第2号人骨(PL 69~70)

第2号人骨は壮年期後半の女性人骨1個体分と思われる。第1号人骨に比べると骨質は薄く、骨格は小型できやしやである。人骨の保存状態は第1号人骨と同様にあまり良くない。形態を保って残っているのは頭蓋の一部と歯、両側の上腕骨・橈骨・尺骨・大腿骨・脛骨・腓骨の骨体の一部ならびに骨盤の一部である。

頭蓋についてみると、まず頭蓋冠の左右の一部の破片がある。左右ともそれぞれ頭頂骨・側頭骨・後頭骨の一部からなる骨片(左は11×10cm、右は13×11cm)で、ラムダ縫合は内外板とも閉鎖が完全に終わっていない。このほかに若干の接合不能の小さな頭頂骨片・後頭骨片などが残っている。顔面頭蓋については、ほぼその右半が残っているが、保存状態が良くない。顔面も横方向からの土圧を受けて横径が短縮し、変形が著しい。この顔面頭蓋片の上部には前頭鱗のほぼ右半が付随している。冠状縫合は内板がほぼ閉鎖を完了しているが、外板はまだ部分的に開いている。下顎骨は骨体の大部分が不完全に残っているが、これも横方向から圧縮されている。歯および歯槽の状況は次のとおりである。

××654321	123456××
876×432×	××34567×

ただし、数字および記号については第1号人骨の場合と同様である。歯の咬合様式は狭状咬合型で、咬耗度はおおむね Broca の第2度であるが、 $\bar{8}$ は第1度を示す。歯の齧蝕は見られない。

上肢骨についてみると、上腕骨は左右とも骨体の下部が残っているが、左のほうが保存が良い(左13cm、右5cm)。骨体は細いが、三角筋粗面は良く発達している。左上腕骨の骨体中央横断示数は75.0で、中央周径は60mm、最小周径は56mmである。橈骨は左右とも骨体が残り、右のほうが保存が良い(左9cm、右13cm)。右橈骨体横断示数は73.3でその中央周径は39mmである。尺骨も左右の骨体が残っている(左13cm、右15cm)。左尺骨体の横断示数は85.7である。尺骨体後面のいわゆる斜線・垂直線ともよく発達している。

下肢骨については、まず骨盤片がある。すなわち、左腸骨の弓状線を含む骨片(7×5cm)と、右腸骨翼の一部(5×3cm)とである。大腿骨は右のほうが保存が良い(左14cm、右26cm)。左は骨体上半、右は骨体の大部に骨頭の一部が加わったものである。右大腿骨体上部横断示数は72.4を示して超広型に属するが、中央横断示数は100.0で、ピラステルの形成は認められない。股筋粗面

の発達が良い。脛骨体も左右が残っているが、右のほうの保存が良い（左18cm、右16cm）。右脛骨についてみると、骨体中央部の横断形は3角形で、前縁は鋭い。中央横断示数は75.0で正脛型に属し、中央周径は87mmである。腓骨体は右のほうの保存が良い（左12cm、右20cm）。腓骨体は比較的細い。

この人骨に外傷や病変は見られない。

Ⅳ 若干の考察

北頭位伸展葬で合葬されていた平安時代後期～末期の人骨2体のうち、第1号人骨は壮年期後半の男性、第2号人骨は壮年期後半の女性であり、夫妻の人骨と想像される。人骨に外傷や病変が認められないので、残念ながら死因は不明である。男女とも骨格における筋付着部の発達が良いことから、かなりの労働に従事した者と推測される。殊に第1号人骨の骨格は太く頑丈であるので、筋骨たくましい男性であったと思われる。

大腿骨体上部横断示数が男女とも超広型を示しているが、これは鎌倉材木座出土の中世人骨の場合とはほぼ軌を一にするものであり、今回の鎌倉国宝館内出土の人骨は、扁平大腿骨が平安時代後期から鎌倉時代に継続する形式の1つであることを物語っている。鎌倉国宝館内出土の大腿骨体のピラステル形成が男性に強く女性に弱い点も鎌倉材木座出土人骨の場合によく似ている。

合葬人骨は男女とも骨年齢の割に歯の咬耗が進んでいるが、これは中世から近世初頭にかけてしばしば見られる現象で、平安時代も例外でないということを示す例であろう。

Ⅴ まとめ

鎌倉国宝館内から出土の北頭位右側臥伸展葬で合葬されたとと思われる2個体の人骨のうち、第1号人骨は壮年期後半の男性、第2号人骨は壮年期後半の女性とそれぞれ推定される。男女とも日常比較的はげしい肉體労働に従事していた者と思われる。

写 真 图 版



▲ 1 発掘区の全景(調査前)



▲ 2 調査開始状況



▲1 Ⅰ面上遺構全景



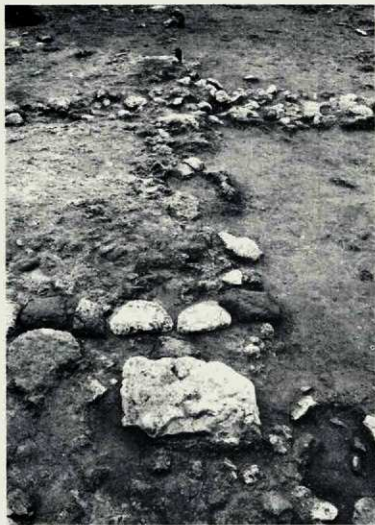
▲2 Ⅰ面上各区画遺構(西方から)



▲ 1 第4区画西側壁部



▲ 2 第3区画(西方から)



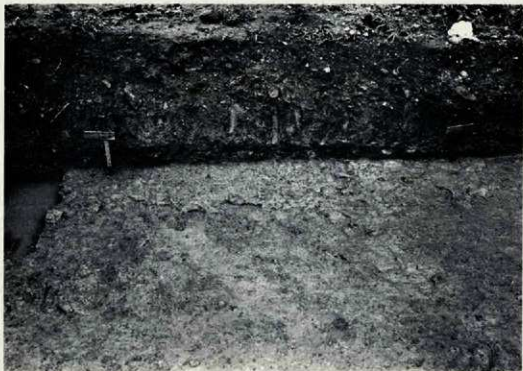
◀ 1 第3区西(北方から)



◀ 2 区内(巴文鏡互出)土状況



▲ 1 Ⅱ面上遺構全景



▲ 2 Ⅱ面上区画遺構



◀ 1
目前土区调查情况



◀ 2
三叉戟出土状况(目前上)

▶ 1 指環出土状況(頁面上)

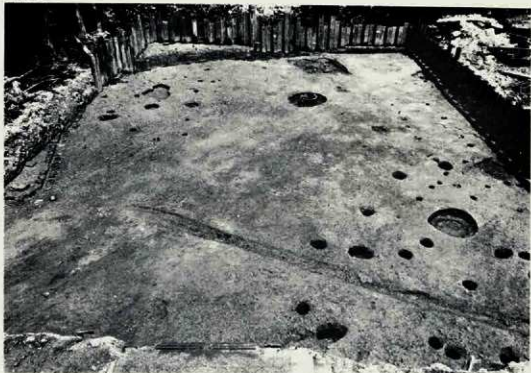


◀ 2 板草履出土状況(頁面上)



◀ 3 板草履出土状況(頁面上)





▲ 1 地面上遺構全貌



▲ 2 1建物跡(南方から)



▲ 1 2 建物跡(西方から)



▲ 2 柱頭残存状況



▲ 1 柱頭及弓體板殘存狀況



▲ 2 柱頭殘存狀況



▲ 1 方形坑穴遺構(上層)



▲ 2 方形坑穴遺構(下層)



▲ 1 方形穴状遺構(底面)



▲ 2 単弁蓮花文鍍瓦出土状況(皿面上)



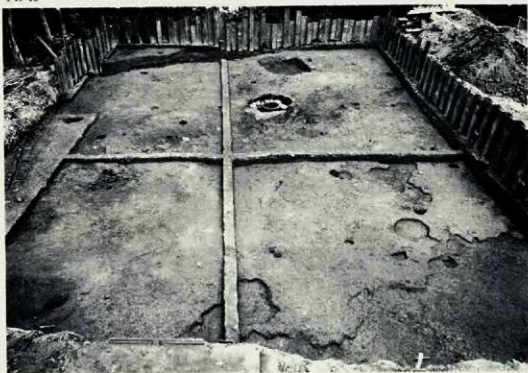
▲1 平ノミ出土状況(Ⅲ面上)



▲2 檜ガンナ出土状況(Ⅲ面上)



▲3 釘隠出土状況(Ⅲ面上)



▲1 N面上遺構全景



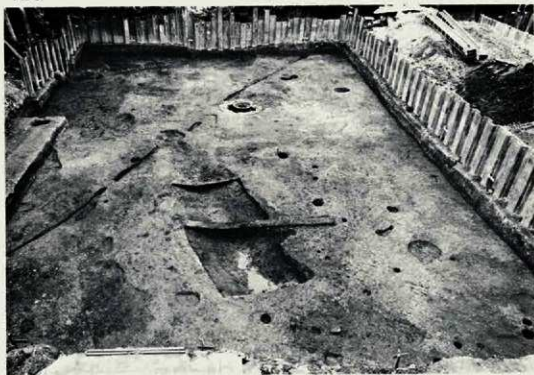
▲2 柱穴列(N面遺存部分のみ)



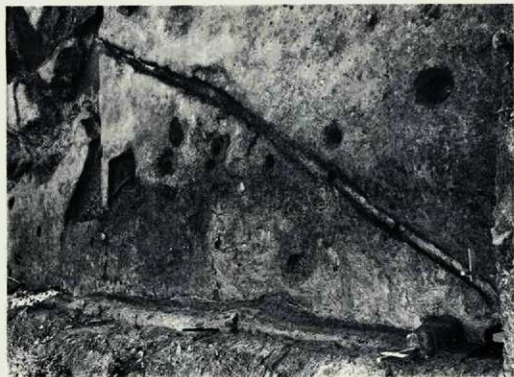
▲ 1 瓦溜り (瓦埴積状況)



▲ 2 瓦溜り (掘り上げ後)



▲ 1 V面上遺構全景



▲ 2 溝状遺構(V面遺存部分除去後)



▲1 V面上遺構(部分)



▲2 モッコ状製品出土状況



▲1 中世以前の遺構(北半部)



▲2 自然水路表出状況



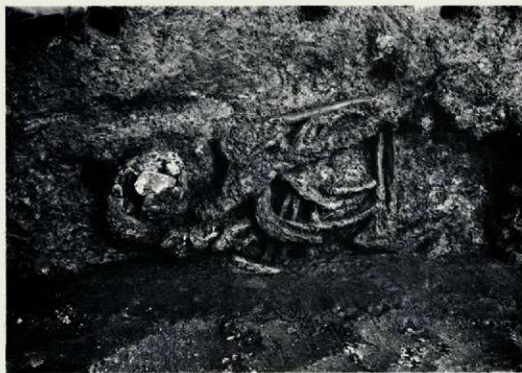
▲1 水路上堆積土層



▲2 有植物堆積狀況



▲1 葛城周遊柱穴群



▲2 1号人骨上半身露出状況



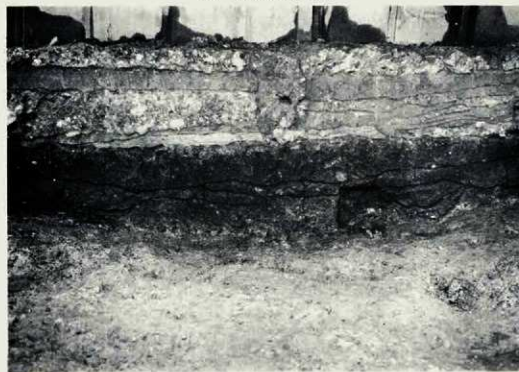
▲1 1号人骨



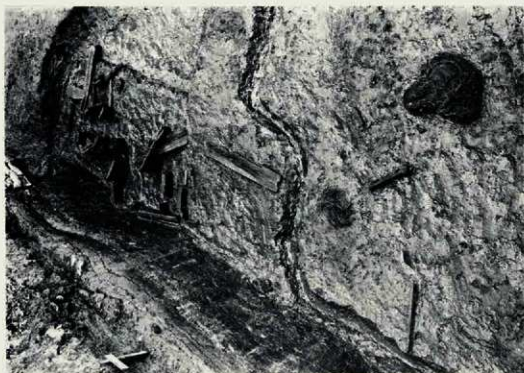
▲2 2号人骨



▲1 合葬状況(合成写真)



▲2 築壇上堆積土層



▲1 木製品等出土状況



▲2 木製品等出土状況(部分)



◆ 木製塔婆類出土状況





▲ 1 束状植物出土状况



▲ 2 束状植物切断部分



▲1 モッコ状製品出土状況



▲2 縄状製品出土状況

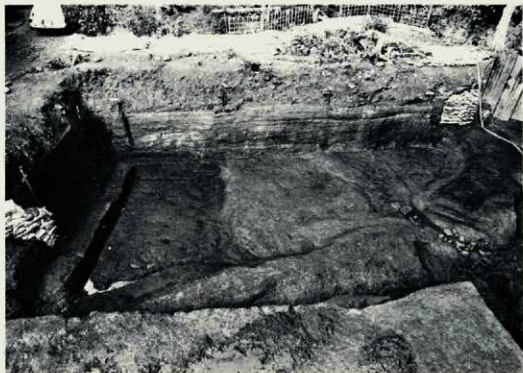


◆ 木根表出状況





水田跡全景



▲1 水田跡(東方から)



▲2 土手切崩部(水路か?)



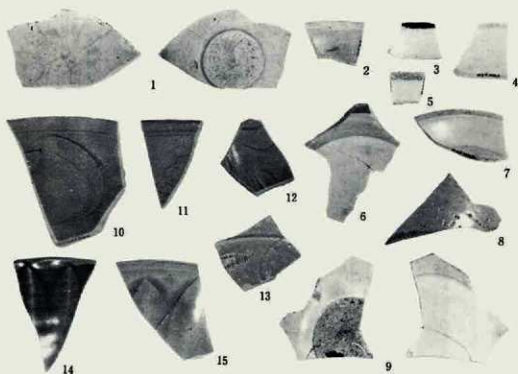
土手切斷部



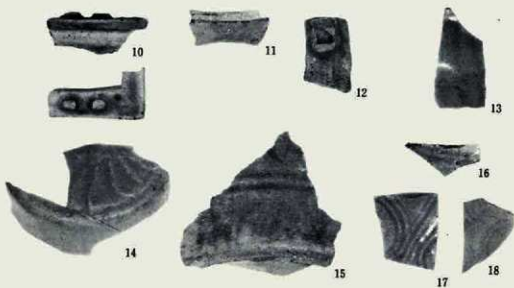
◀ 1 木製出土状況(水田上)



▲ 2 須恵器破片出土状況(水田上)



▲ 青磁・白磁

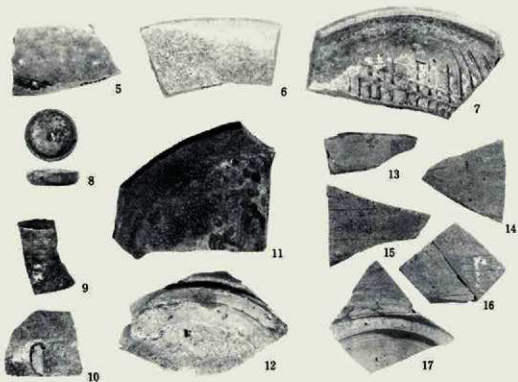


▲ 青白磁

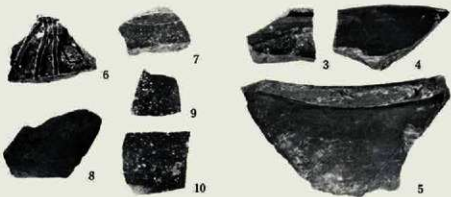


▲ 瀬戸

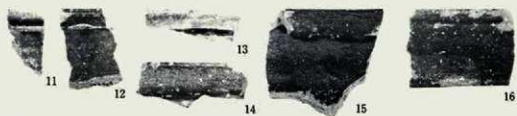
▲ 湯輪蓋



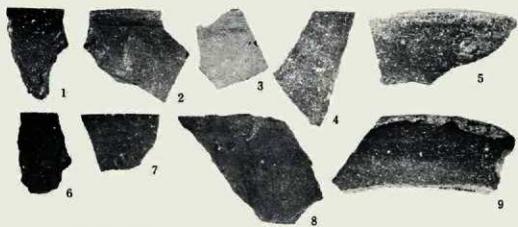
▲ 瀬戸



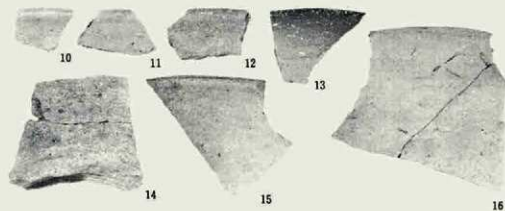
▲ 拓器



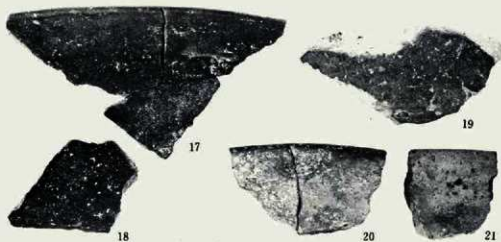
▲ 拓器



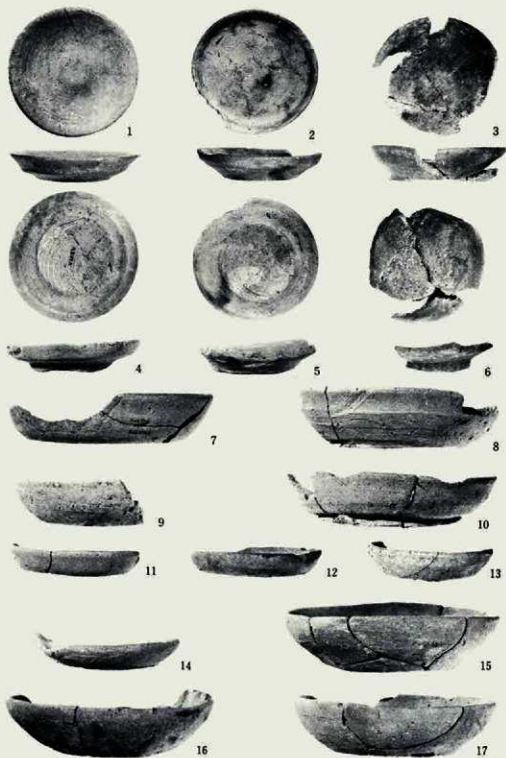
▲ 常滑窯系片口鉢

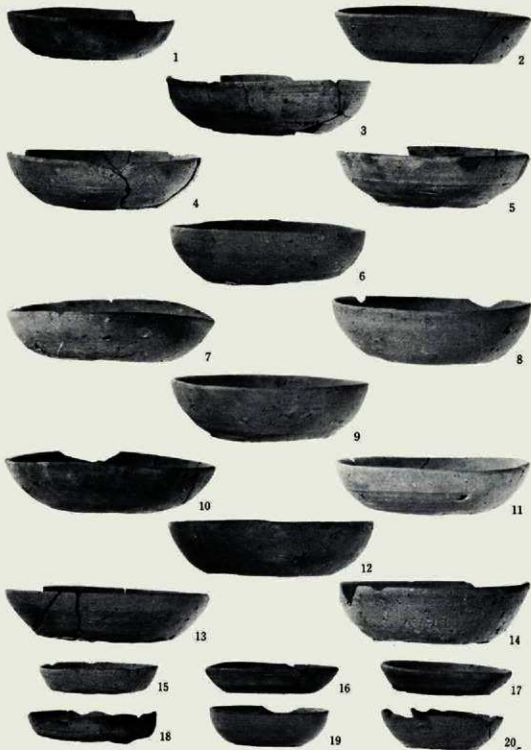


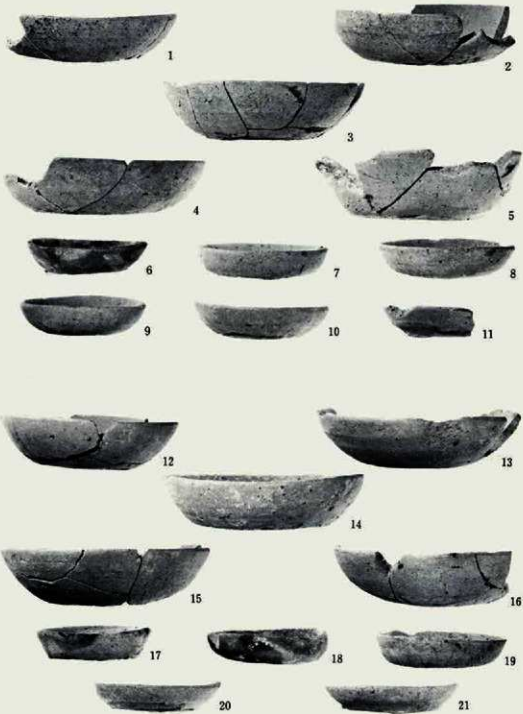
▲ 山茶碗窯系片口鉢



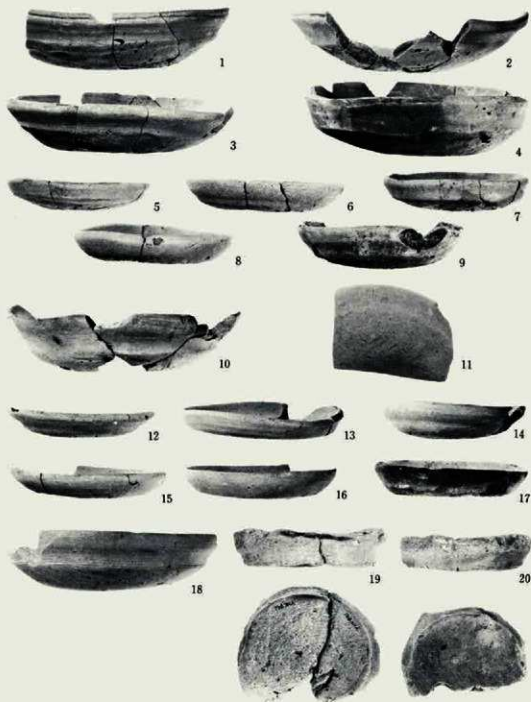
▲ 火鉢

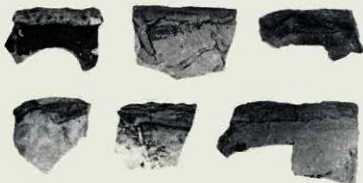






かわらけ(3)





▲ 壁体もしくはトリペの破片



▲ 土錘



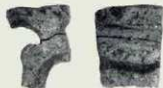
▲ 瓦貫壺の脚部



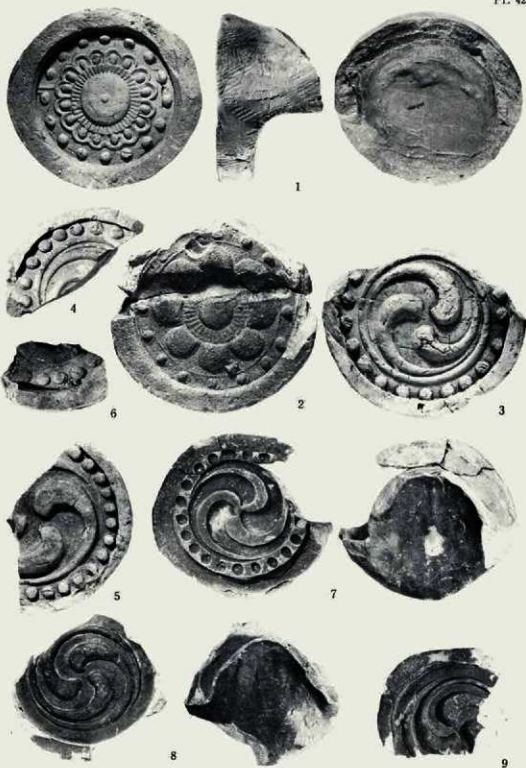
▲ かわらけ片円板



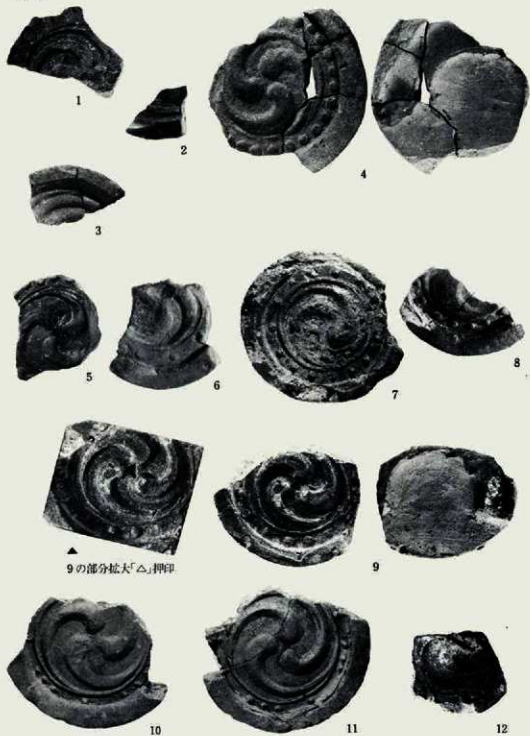
▲ 刻み目のあるかわらけ



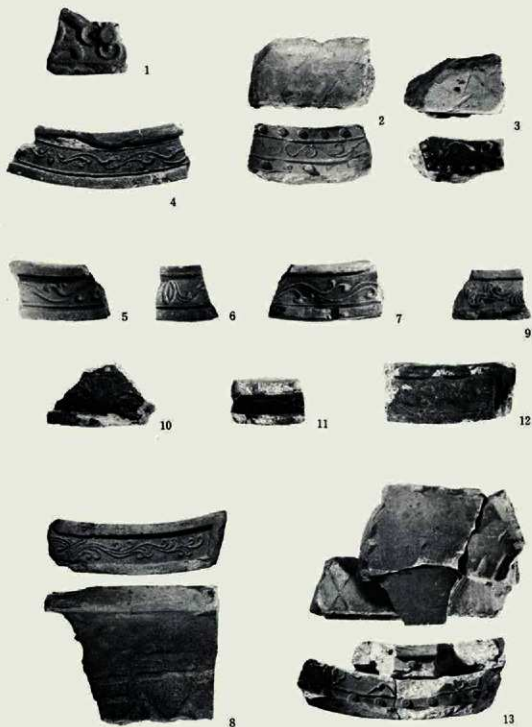
▲ 不明土製品



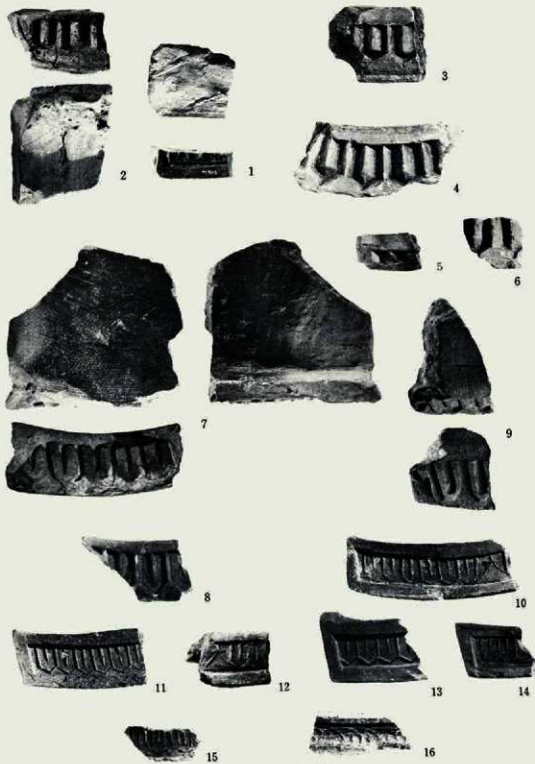
銅瓦 1·2 蓮花文系 3~9 巴文系



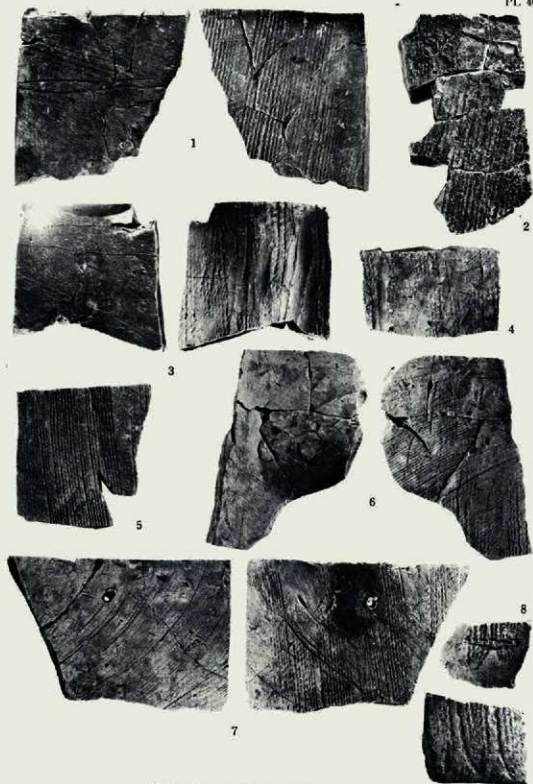
銅貨 1～12巴文系



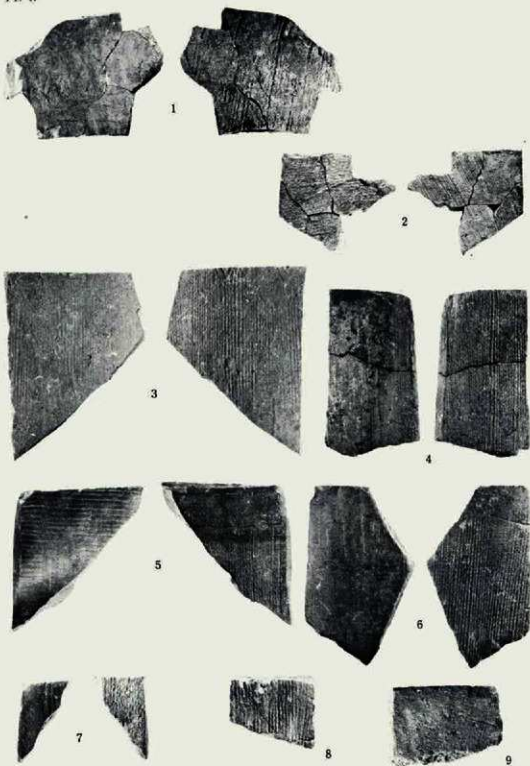
字瓦 1~12唐草文系, 13半截花文



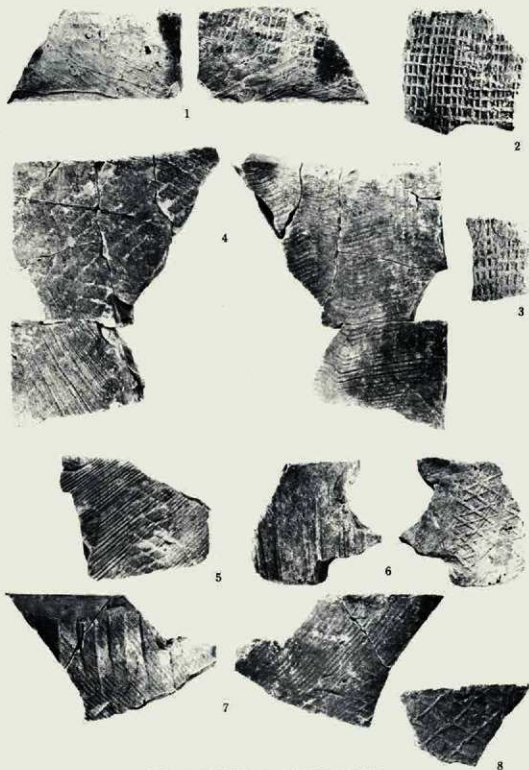
字瓦 1~16刻纹文系



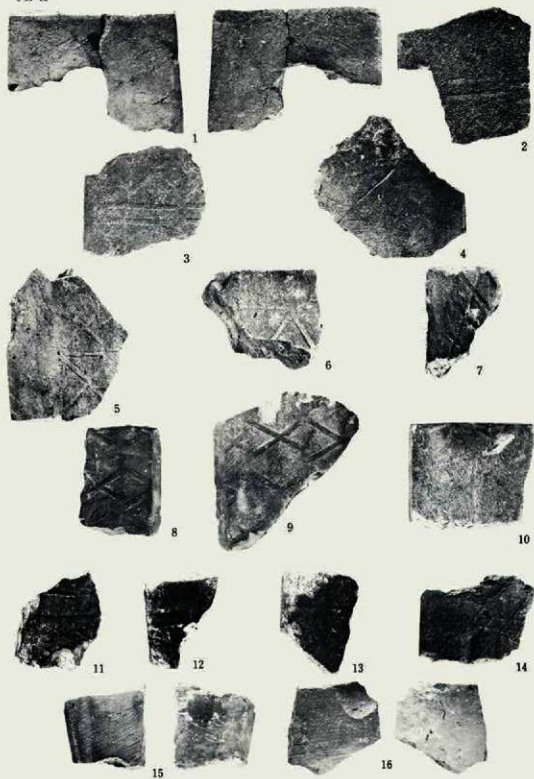
女瓦 I類A(8・9は叩き板の裡の未施処理例)



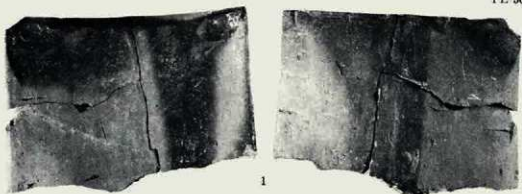
女瓦 1・2 I類B、3～8 I類C、9 I類D



女瓦 1-3 Ⅱ類A、4-7 Ⅱ類B、8 Ⅱ類D



女瓦 1~4 Ⅱ類E、5~7 Ⅱ類F、8~10 Ⅱ類G、11~14 Ⅲ類、15、16 Ⅳ類A



2



3



4



5



▲ 6の部分拡大
極痕(女瓦I類A)



7



8



9



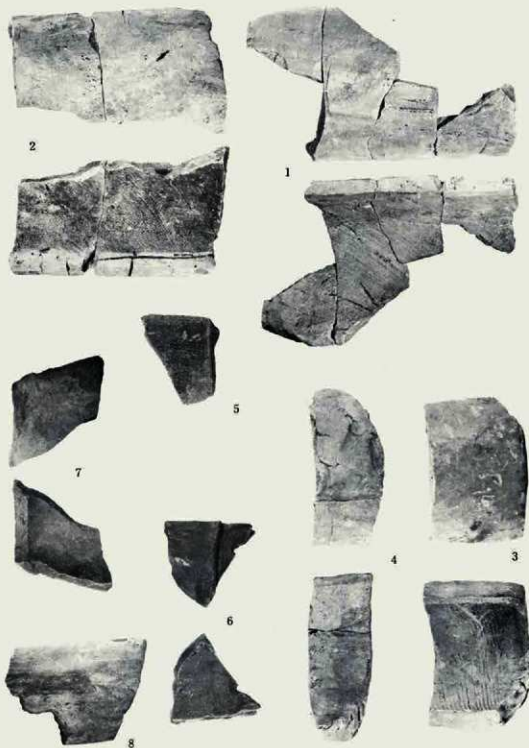
10



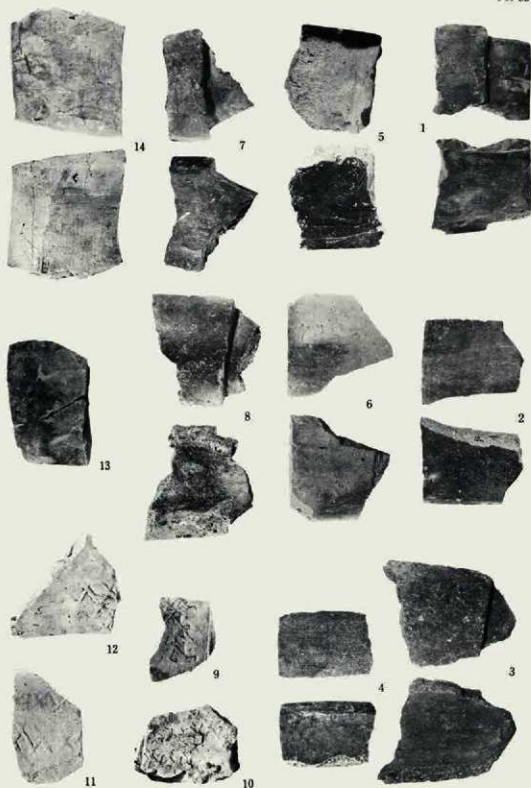
11



女瓦 1 N類B、2~5 文字・記号瓦、7 面) 瓦、8~10 鬼瓦



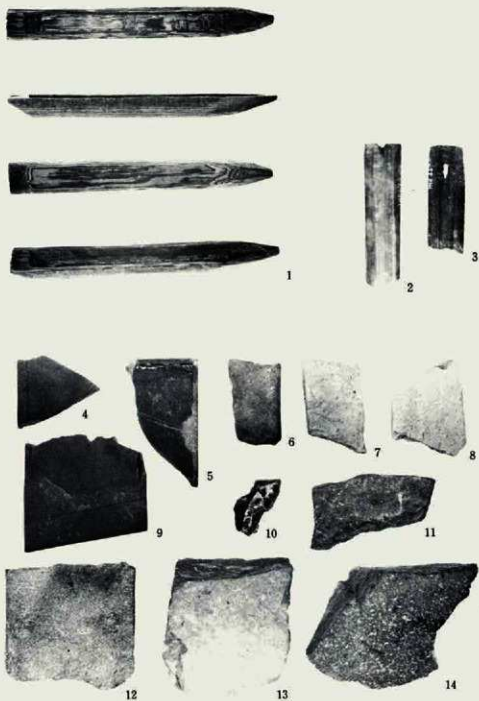
男瓦 1~5 I類A、6~8 I類B



男瓦 1·2 I類C、3·4 I類D、5~7 I類E、8 I類F、9~12 II類、13·14 I類A-II類群



銅・鉄製品 脚金具(1・3～6) 環(2) 三叉戟(7) 平ノミ(8) 拍ガンナ(9)
 掛金具(11) 釘(10・12)



木製舟形(1) 骨製弄(2-3) 硯(4-5-9) 砥石(6-8-12-14) 滑石製品(10-11)



1



2



3



4



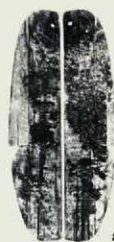
5



6



7



8



9



10



11



12



1



2



3



4



5



6



7

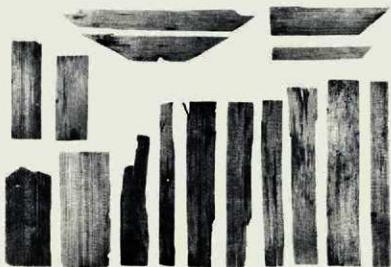
▼下駄



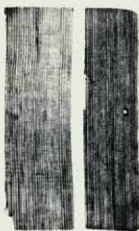
8



木製品 板草履(1~7)、下駄(8)



1



2



3



4



5



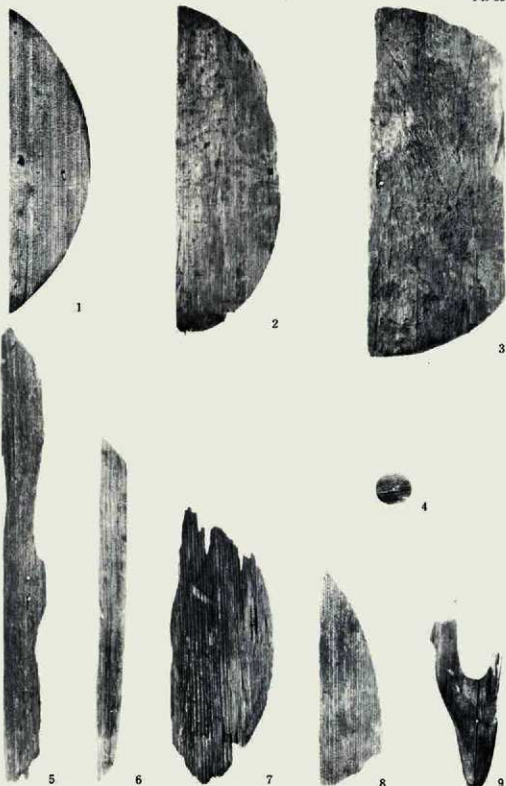
6



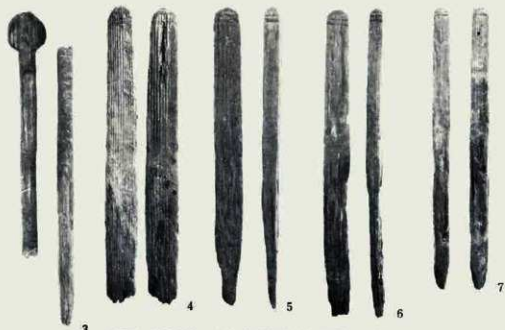
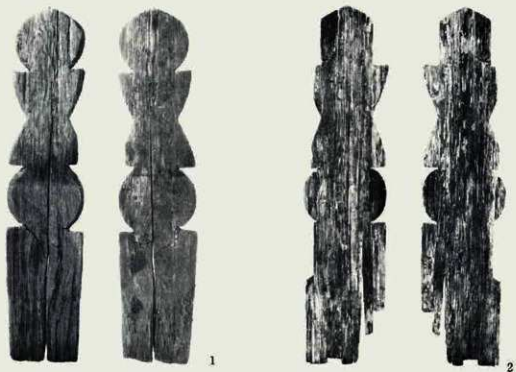
7

8

木製品 折敷(1~6) 箸(7~8)



木製品 曲物底(1~3·7~8) 特殊製品(5) 二又状製品(9) 不明品(6)



木製品 五輪塔(1~2) 特殊製品(3) 神伝(4~7)



木製品 梳状製品(2・5～7) 方形板材(3) 釘頭を有する木材(4) 不明製品(1)
2の梳状製品を除き全て塔婆類と伴出品である。



1



2



3



4

木製品 棧材製品(1) 同部分(2) 不明品(3) 厚板製品(4)



木製品 塔婆類と伴出した各種不明木材



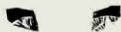
1



2



3



4



5



6



8



7





佈 1



2



3



4



5



6



7





1



2



3



4



6



5



7



8

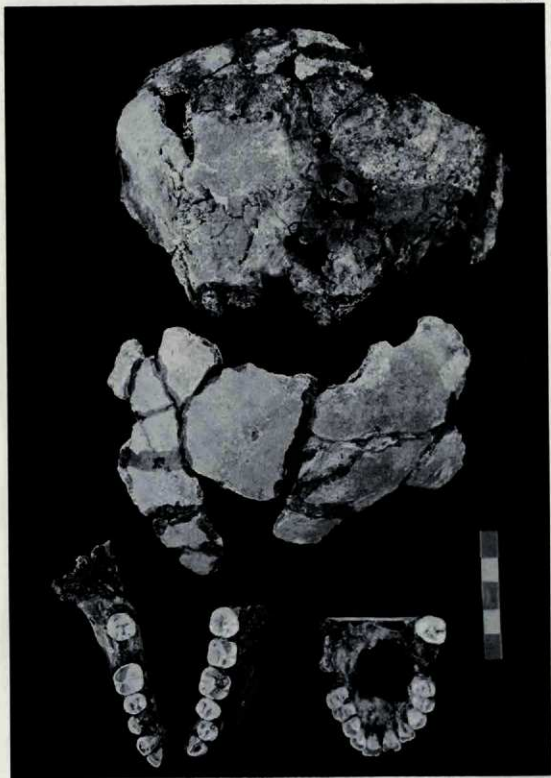


9



10

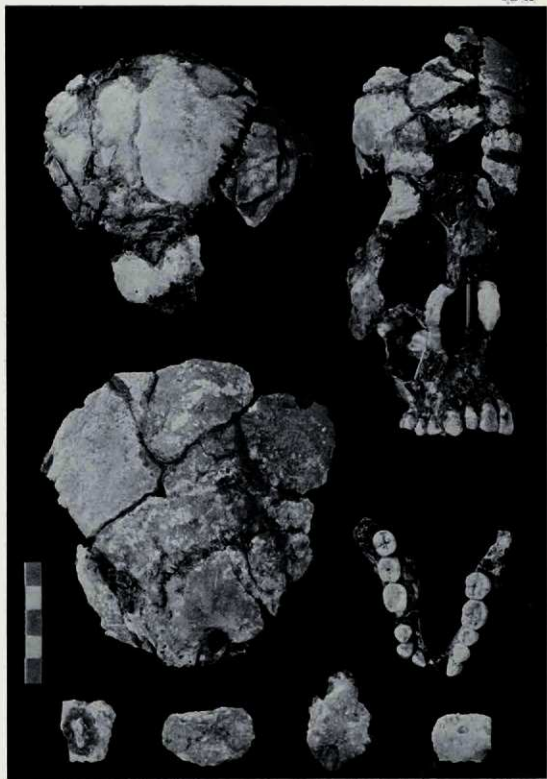
中世以前の土器



第1号人骨の頭蓋片と歯



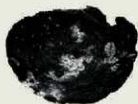
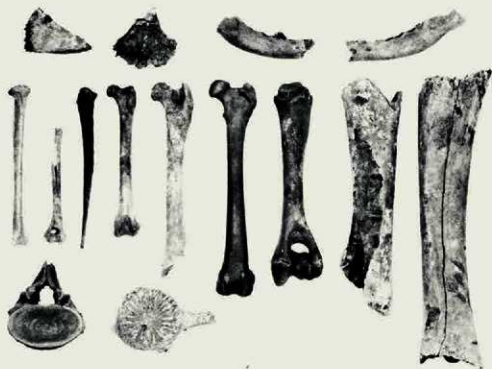
第1号人骨の上・下肢骨片



第2号人骨の頭蓋片と歯



第2号人骨の上・下肢骨片



骨・種子

鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書

—鎌倉国宝館収蔵庫建設に伴う緊急調査—

発行日 昭和60年2月28日
編 集 鶴岡八幡宮境内発掘調査団
発 行 鎌倉市教育委員会
鎌倉市御成町18番10号
印 刷 新光印刷工業株式会社